

## 翻刻『本朝斑女箋』

## 翻刻の会

一、底本には刷りが比較的好いと思われる、早稲田大学演劇博物館所蔵の七行九十六丁本（二一〇—二四六）を用いた。

作者 為永太郎兵衛

奥書 豊竹越前少掾

版元 西沢九左衛門（底本では「九左衛門」が破損）

丁付 「斑 一」 「斑 九十六終」

上演 寛保元年（一七四一）三月四日大坂豊竹座初演

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類等では改行しなかった。

2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）で示した。

3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「二」「ハ」「ミ」は

「に」「は」「み」とした。

4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7 疊字は、平仮名は「、」、片仮名は「、」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。

8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

9 底本の不明箇所は適宜同板の他本で補ったが、特に断らなかつた。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究會）の会員によってなされた。

清水唯由、砂山由起江、山崎薫子、米澤 史。

文字譜、改行、本文の最終確認は山田和人が担当した。

なお、早稲田大学演劇博物館には、翻刻の許可を御快諾いただきました。記して感謝申し上げます。

（山田和人）

作者 為永太郎兵衛

麗れいの御み物ものずき。大々たいたい尽じんと名なに高たかきへ里さとに威い光こうぞ。かゝやけり。

御きげんとりぐ也。

いづれも御前になをしおく。

向。<sup>かう</sup>いぶかし（一ウ）さよと有ければ。

間なき。心をさつしお佐のため。御前へ召つれ候と恐れ入ッて述べれば。

斑女御前もさしよつて。ノフ曲もない我君。せめてお心打明て何が誤何が科と。たつた一言おつしやつて下さんせと。  
託願へは花子のまへ憚なく。自ゆへに姉女郎の斑女さんを。秋の扇と人にいはる、悲しさはいか計り。古郷より母の  
迎に見へしを幸。此身に暇を給はれと申上れば母は御前に打（二オ）向ひ。御寵愛娘一人に止り。数日都へ帰り給は  
ねば。禁裏おもてへの聞へはどう有ふと思し召ス。此野上はかねて君に恨ある。高階の右大将親平の領分。もし御大事  
に及び。花子ゆへじやと人にいはれなば。わたしら親子が心すまぬ其訳は。もと吉田の御家来と。いふをせいしてコレか、  
さん。それを爰でいはんす事かいな。此程より御暇給はれと願ふは。第一は君の御為。斑女様への義理も有り。都にまし  
ます御本妻桔梗の前様へ義理を立てると。申は恐れおほひ事ながら。いふにいはれぬわたくしが心名残おしいは山々なれど。  
好んで別る、心の悲しさ。一首の歌にと計りにて打しほるれば。少将殿短冊を取上ケ。浅からぬ契も今は等閑に。いかに成  
行身の別（二ウ）かも吟じかへし詠かへし。扱は花子が此儘爰に有りたきも。かなたこなたの義理にせまつてあかぬ中の  
暇を願ふよな。又某が斑女を見捨し其子細は。十二年いぜん都にて。妻の桔梗の前は梅若といふ男子をもふく。産顔を  
見るや見ず。勅命によつて奥州へ任国の折から。此所に逗留してあの斑女に馴初しが。其月より懷妊せしと聞キし計り。  
其後人の噂には斑女は男子を設しといへ共。陸奥へは告しらす。けふの今迄我子の行衛をふかく隠す不届もの。幾度  
いふても叶はぬ願いと。つれなき仰に野上の長。ホ、其儀についての御不興なれば。此長が申訳。太夫職の斑女御前の設  
られし若君なれば。松の位をかたどりて松若様と私めが（三オ）名付親。それを廓の悪口仲間が申には。吉田のお家は天  
満宮を御信仰有によつて。御惣領を梅若様と申スは聞へたが。斑女の産れし子を松若殿と号しは。御本妻腹の。梅はちる

共松は常盤の齡をたもち。お家を我子につがせん巧と人の譏を氣毒がり。七夜の内より松若様を里にやられ。御行衛がしれざれば。申訳もなき仕合せと。いひもあへぬにヤア下々の紛のごとく。里にやり在家がしれぬとて其まゝに捨置かと。御氣色かはつて見へければ。

斑女は涙にかきくれて里にやりし其さきは。あれなる長の弟野上の藤太と申すもの。わらはが引舟とつれ立のき。今はいづくに夫婦に成つてゐる共しれず。十一年が其間。(三ウ)松若君の行衛のしれぬはわたしが誤。数ならぬ身に設しお子を。先程迄御大切に思し召て給はる。君が心の。有難さよ。

斑女が心底聞うへはしいて不届共いひがたし去ながら。松若が行衛しれる迄は都へ供は叶ふまじと。料紙硯の筆くしいめし。雲隠の月を画し此扇の裏に今又花夕白を書きそへて。斑女におくる記念ぞや。

いかにもして松若にあひに扇を手ふる。末のちぎりを待ッべしとたびければ。

一座の傾城口々に。今遊した扇の絵が夕白なりや。つい晩かたに若君の。お顔見さんす瑞想と。悦びさめく折からに。都より御台所口。お使者として。執権松井の兵衛重俊参上と披露して。すつと出たる異形の出立ち。簀笠に高履草(四

オ)刈鎌を携へて。御前も人目も憚る色なく立ッたる有様。一座の人々興さめ。てこそ見へにけれ。

ヤア老に耄たか松井の兵衛。此少将が目通り共憚らず。異なる姿慮外千万。誰か有ル。あれ引立よと以の外なる御忿。

ホ、此松井の兵衛を老にほれしと。御覧有はあきしい眼。酒色の外はなんにも見へぬか情なや。誠に蔵を侮るものは盗賊に教へ。邪氣は虚に乗じて入理り。君奥州にましますを幸イ。高階の右大将親平が。讒言日々に募共。御舅参議忠

通卿。是迄は禁庭の首尾。取繕ひ給ふといへ共。中々忍びず。最早此たびが破れ口と相見へたり。コレ。御台所梅若君御親しの物思ひ。家来の拙者迄肝をけづる口惜さ。御いけん申御供し（四ウ）て。都へ帰らんと来て見れは。右大將が詞に違はぬ其御身持子。先年此宿にて。まつ此ごとき御放埒を。粉源五が数度の諫言。御用ひなきによつて御目通りに腹切て相果し。彼が死骸を当所中山に葬り。傾城斑女とやらんが一字を建立有しより。斑女堂と名高く。世の人言に源五が忠節。斑女が情をいふ度に。こなたの身持放埒の取さた。京童の仇口のはに。かゝり給ふとしろし召れぬ愚さよ。たつた今右大將が讒言にて。代々に伝る吉田の佳名。都北白河の御館は。青草しげつて狐狸の栖とならん。浅ましや。コレ。其時の草刈鎌。簑は則ち美濃の国。此野上の取さた天が下にひろまる共。防は此笠此兵衛が。（五オ）形に顕はす異見は是切り。サア後共いはさぬ。今さつぱりと御心を改られ。上洛有れば重畳。承引なければ此鎌で腹十文字にかつさはき。憂つらきめを見ぬ覚悟。サアく返答承らふ早く聞ふと詰寄く。詞を尽し理を尽し怒つ泣つ諫れば。少將はつと理にふくし。今に始ぬ其方父子が諫言。用ひざるは我しながら酒狂とやいはん。禽獸にも劣し身のうへ。是なる二人の遊君に迷はぬ證據。斑女は此まゝ、野上の長に預おく。花子は一首の歌の心を感じ。母が願ひに任せ暇をとらす。早々古郷へ帰るべし。某も是より上洛取急ん。兵衛はささへ都に帰り。桔梗の前。粉梅若にも此趣を告しらせよ。ハ、はつと計りに松井の兵衛。頗あたまを（五ウ）地にすり付。悦び涙諸共に。早御暇と立出れは。花子親しも打つて。古郷へ帰る名残の袖。右と左に嬉しさと。悲しきこめし憂別れ。跡に残れど斑女は君に。別れ悲しさ記念の扇手にふれて。我子の行衛尋扇の末長く。長門宮の裏に籠し秋の扇の色ふかき。例は異国本朝の。斑女が簀。

是なれや君が。情ぞ三重へ名にしあふ。

月こそ洩ね板庇。不破の関所を固しは。当国の領主高階の右大将親平の家臣。高の武者之介義隆。関が原の半途より。

中山の手に乱株高垣兵具ひつしと立並べ。遠見斥候の諸役人。眼をくばって扣しは。事厳重に見へにける。

醒井の本陣より右大将の執権。内記左衛門氏廣けらい引連入り来れは。(六才)武者之介出向ひ。暮に及んであはた、しき

体何故に来られしぞ。さればく。兼て貴殿も存の通り主君右大將は。少將の御台桔梗の前に。御執心より発つて確執と

成此度少將都へ帰るさ。野上の里にて遊興奢。放埒の身持を禁庭へ奏聞有しに。阿房払にせよとの勅諭を幸いに。彼が

旅宿柏原へ押よせ。少將を亡す思し立ちなれ共。もし討もらさは奥州の方へ落行くまい物でなし。此不破の関にて討とれ

との仰によつて来たり。其儀は此武者之介一人承つても防んに。貴殿を加勢に給はる事。もし少將に志有て。見遁す

べきかと御疑かゝりしな。こは我君共覚ぬ仰。某は幼少より父母の手を放れ。主君の(六ウ)御患にて成長。則ち高階

の一字を給はり。高の武者之介と。名乗ほどの御厚恩いかでか忘ん。少將を讒言なさるゝを。是迄お諫申したは皆君の御

為。良薬口に苦き喻。却て御疑を蒙りしは我不運。あはれ少將此所へにげ来らは。召とつて二心なき證據を

頭さん。先々貴殿は遠路の勞。暫休足有べしと打つて役所に入にけり。

住馴し野上の里を。柏原まで送り道。古郷へ帰る傾城花子母の濊町打連して。関所間近く立とまり。コレ娘。

ちと嗜めや。そなたは古郷へ帰るといふて。少將様に暇乞迄してべんくゝと跡を追イ。付まとやる程お為にならぬ。サア。

そりやよふ合点してゐれど。放れともないが因果。(七才)もきどうなおまへにせつかれ。いひ残した事も有り。ま一とお

顔がヲ、嬉しやそれそこへ。見へるくと夕間暮。いそがせ給ふ少将惟貞。じゆりん合羽に大小よこたへ。人目を忍ぶ旅人の風俗。

テモ扱もお前も未練な。爰迄したふて御出かいの。今も今とて此娘に。ホウ異見かそりや皆尤。そこで我等も。ふつつり思ひ切て都へのぼる。名残にちよつと顔見に來たとの給ふ所へ。ふだいの家來岡崎金吾まつ黒に成つてかけ來り。扱も我君野上にて。御放埒の御身持チ天聴に達し。急ぎ追討有べしとの勅詔を蒙り。右大將親平。只今柏原の本陣へ押よせ候故。朋輩鳴川宇内を。君の代に残し置。多勢を切ぬけ是迄(七ウ)參上。とく何ッ方へも御立のき有て然るべう候と大息ついで訴れば。

花子瀧町はつと仰天。少将も驚き給ひ。扱は松井の兵衛がいひしに違はず。右大將が兼ての譏言よな。かく成くたれば最早都へは帰られず。一ト先奥州へ立退ん。汝は是よりすぐ京の館へ馳着。桔梗の前梅若へ此通りをいひ聞せよ。早くくととの仰に。はつと打つたつ金吾飛フがごとくに急行。

少将重てコレ兩人。由縁ある国なれば。是より奥州へ下らんとは思へ共。氣毒は此ふはの関。右大將か家來武者之介が固たれば。輒く通る事叶ふまじ。いかゞはせんとの給へは花子はつと心付。よい事が有お氣つかひ遊ばすな。其武者之介が家來。川隈甚平といふ者。わたしが野上に(八オ)勤て居る時。たびく文を越たれ共。ついに返事もせなんだが是幸イ。口でちよつぽりだましてどうぞ。通しませんと関所の内を。うかゞへは。

甚平も油さし行燈にかゝり透し見て。ヤアそちや花子じやないか。昨日此関を通りしが今野上へいぬるのか。見ればくさり

合つた男連。うまいなく。ヲ、めつそふな事いはしやんせ。跡なは兄様。こちらはか、様。連立つて国へいぬはいな。明  
日此関を通ればよけれど。急な事故どうぞおまへを頼んで。通してもらをと思ふてきやんした。ほんの情じやはいな。イヤ是  
花子。情といふ事見し事知つてか。エ、あたどうよくな。サ、其時は皆わしが悪かつた。是拜ます。ム、堪忍してくれか。  
そして今通してやつたら。ハアテ此身はどうなりと。おまへ（ハウ）に任すと手を取て。じつとしめれはヲ、こりやたまらぬ。  
扱はぞつこんきおつたな。氣遣しやんな通す。夜更人しづまつて何ぞ相図がヲ、それよ。おれが曰外やつた文に。歌  
が有ルそれ覚てか。ホンニ其文に書いて有たが。餘り大事にかけて。つい梳紙にしてのけた。ホ、ウこりや尤。読だ跡が役に立  
てまあ嬉しい。そんならま一度いふてきかそ。不破の関。朝こへゆけば霞たつ。野上の方に驚ぞなく。覚やつたか。是  
にどうなと節付ていふたがよい。マアそれ迄向の辻堂に待つて居て。よい時分にふはの関。アイ。合点でござんすと。別れて  
三人急き行。跡見送つて甚平は関所の内へ入にけり。  
折節風に誘れて。耳を突ぬく鯨波。乱調に打つ鉦太鼓ほらの（九才）響に驚く内記。つづいて欠出る武者之介。ア、ラ心  
得ず。三声宮の音に入れば味方の勝利なき道理。ハレ心もとなしいかはせんと氣をもむ折節。  
右大将の使として。犬上平馬あわた、數かけ来り。コレく内記武者之介。只今主君右大将。柏原の宿に押よせ。少将惟  
貞討とり給ふといへ共。数多の家来が死物狂今戦ひまつ最中。猶も関所をさしかため。残党きたらは一々に討とられよ。  
我レは是より引かへし。敵の多勢を防がんといひ捨てかけり行。

アレ聞れたか武者之介。少将を討とられしとは先ッ安堵。コリヤく家来共。弥氣を付木戸を固よ。イザこなたへと打連て入ルさ



の月も。更渡鐘につれたつ三人連し。時分はよしと花子は関所（九ウ）に立寄て。不破の関。朝こへ行ケば霞たつ。野上のかたに。驚ぞなく。合点と甚平がさし足ぬき足行燈の灯火。ふつと吹消まつくらやみ。

さぐりよつて木戸押ひらは少将藩町。足のふみとも危きせごし。なんなく通ればつゝいて花子。行をちらりと武者之介。見付けた女め通さぬと。飛かゝつてたぶさ髪。引ケと逃るがとたんの拍子。手に残ったは櫛かんざしなむ三宝にがせしと。追ツかけ行クを甚平木戸口ぴつしやりさすを。後げさに内記が早業。

たまぎる声に家来共。差出す火影に見て恠り。ヤアうぬは甚平。コレ武者之介。御辺が家来今の歌を相図に。此関を通せしは疑もなき少将。サア真直に白状と。（十オ）せちがふ内に息絶れば。詮義の種も内記が不審。武者之介は忙然とあきれ果たる折こそ有し。

まちかく聞ゆる響の音ト。逸栗毛に打跨り蒐上げたつる右大将親平。くらかさにつゝ立ヤア〱兩人リ。今柏原の宿におしよせ。少将と心へ討つたるは家来鳴川宇内。似者を拵おき。落失たる惟貞。此道ならで行べき方なし召捕たるか何んと。せきにせけば内記左衛門扱こそ。たつた今女が相図で此関を通せしは。武者之介が家来甚平。落行キしは大かた少将と。聞クより親平くはつとせき上。ヤイ武者之介。日比儕が諫言だて。少将に志有ル事明白。イヤそれはお情なし。既に女を引つとらへし時。手に残たる櫛簪。是覺なき證據といはせも立ずヤアくらい（十ウ）〱。関破りの女めを。さがし出す迄其櫛簪。あたまにさし。面恥さらすがよいこらしめ。勘当じや立ッてうせふ。ヤア内記左衛門。汝はいよ〱此関にとゞまり厳しく固よ。我は是より都へ押よせ少将が妻。桔梗の前を奪取り。一家残らずぼつ払はん者共つゝけと駒

に鞭。打立てこそ急ぎ行。

跡見送つて武者之介。ヲ、御憤尤。此上は我カ根限り。関破りの不敵女。にげ隠る、共天地の間尋出さて置べきかと。

取上ケ持し櫛簪。さして行衛はいづく共しらぬ山路を三重へしたひ行。

花鳥の。都の春を。徒に。吉田の少将惟貞卿の御台所。桔梗の前は十年餘りの御留主住居。北白河の本所には。早近

カ々に御帰洛とて。待間もとけし長廊下。お傍づかひの姫。共寄集り。けふは若殿（十一才）梅若様。御家老の兵衛殿を

お供につれられ。御父少将様早ふ御帰洛なさる、様にとの。御願にて北野の社へ御参詣。それ共思し召ぬ殿様。美濃の国

野上の廓の二人りの傾城。斑女花子の色に迷ひ。お帰り延引するを幸いに。高階の右大将殿の大内表への讒言。どうでも

根の有ル事とは思やらぬか。ハテしれた事。御台所桔梗の前様。此館へ嫁なされぬ先から右大将殿のほれて。こちらの殿様

に恋を仕まけた腹立。十二年ぶりにほらすのじやはいの。少将様奥州へお下りの時。御誕生の梅若丸様。ことし十二にお

成りなさる、迄。親子御の御対面さへ遊さぬ。殿様のお居ぐさりもよつほと。そなたのいやる通り。追付御帰洛なされた

ら。御台様にもお久しぶり。其上に斑女花子三人の手に。きりくもまれ（十一才）もまる、三目錐の少将様。惟貞で

はない是強様じやと。いふといのふと。遠慮もなげな高咄し。ヤレはしたない旁。夫の少将殿野上の宿に御逗留なさる、

を。斑女花子の色に迷ひ給ふと。あしさまな取沙汰は皆わらはが従弟。右大将殿の巧。最早君の御留守迎も今少。随分物

事ひそやかにと制しおはする折からに。

御台の御父参議忠通卿。一家の館案内に及す。玄関よりしづくと入せ給へは。桔梗の前褥をさがり。是は御老体

の切々の留守見舞。御くらう様やと挨拶あれば。十二年の長の留主も今少し。それに付き。ちとおことに密々一大事を語りたしとあたりを見廻し給ふにぞ。コリヤく秘共。梅若兵衛の帰を待受ケ知せよと。女中を残らず勝手手（十二才）た、せ。一大事とはいか成御事。心元なふ存じますと尋給へは。ヤア桔梗の前。おことが幼少より。従弟の右大將に。終に対面させた事はなけれ共。見ぬ恋に執心として少將に妻しを憤り。彼が多年の巧にて。野上の宿に此度の逗留を。以の外なる越度に取なし譏奏して。則ち右大將討手を蒙り向ふたり。エ、すりや我夫は。ヲ、まだしも運に叶ひ。落延しとは聞ケ共心元トなく。某懇意の公卿を頼み歌枕一見の願イをたて。智少將の行衛を尋んと思イ立暇乞に来つたり。又逢迄の父が形見と頗るの髻ふつつと切て渡し給へは。桔梗の前は涙と共に押戴き。いかに簪の為じやとて餘りな思し切。ヤア歎くは愚。あれなる柳の一ト木を見よ。春の気色（十二才）の若やかに緑の髪としげれ共。秋吹風に散はつる心を直に我法名。柳葉居士と改メて諸国を廻り。聲に力ラを添ん事方寸の内に有り。それに付キ江州高島郡の与惣といふ獵師。元トは奥村前司といふ武士の舩にて。才智有ル若者。折々右大將か招くといへ共。不道の主には仕へじと貧しき世渡り。何とぞ彼レを松井の兵衛が養子とせば。吉田の家相統の基と思ひ。最前より其与惣を玄関に待せ置いたり。ハアそれは何よりお嬉しや。家の為と有からは。自らも対面し。兵衛の養子にす、めませふ。ヲ、然らばこちへと柳葉居士も諸共に。打つれ玄関に出給ふ。折から御館の。築地の外北野より御下向ある梅若丸。ことし十二の荅の花お供は（十三才）老木の松井の兵衛。刀取持チ引そふて立帰る。

跡よりしたひくる男小腰かめて申く。憚ながら此お館の公達。梅若様と見奉り。ひそかにお願イ申上度キ事有と捫手で

か、れば。ヤアこいつ軽はずみな。御訴詔あらはお館へ参ッて申上いさ。イヤなふ兵衛願イと有レは途中とて聞キ捨がたし。まあそちは何者ぞと。仰にはつと頭をさげ。私めは山田の三郎と申もの。御父少将さま御寵愛の傾城。斑女殿の腹に誕生なされた松若丸様を。藁の上より預りかくまひまして最早十一才にお成りなさる。御器量といひ恰好物ごし。丁とお前に其儘。素性たゞしき吉田のお家の若君様。いつがいつ迄埋木の御住居させますもいたはしし。松若様も親御様兄君に（十三ウ）御対面なされたきお願いにて近江一国の神々様へ御祈願の絵馬奉納。今日はお家の御信仰北野天神宮へ。私を代参に立られし所に。梅若様と見受ケ是迄参上。御台様へ此通りを。仰上られ下さりませい御からう様。お取なし偏に願上ますと。詞遣イも諂ぬ。真実心の願イ也。

始終を聞て松井の兵衛。扱は今日宝前にて。梅若君のお傍へ落たりし絵馬に。願主吉田の松若丸と有しをふしぎと思ひしが。今山田の三郎か物語りを承れば。紛もなき君の御弟。天満宮の御引合せの梅と松。連枝の両若君はやく御対面有レかしと申上れば。兵衛のいやる通り。弟松若の在家のしれしは神の告。母様へ申上都へ入部を取急き。対面達たき物なれ共。父上には（十四才）御病氣とて野上の宿に御滞留ましますを右大将の讒言。遁る、は天満宮の御利生と。参詣したればこそ山田の三郎に廻り合たれ。父の帰洛なさる、迄フウ兵衛と有ければ。

ア、いかにも。事騒しき折からなれば。松若様の御入部は延引なさる、共。忠義ふかき山田の三郎。武士に取立つかはされよと。心を付ければ梅若君。けふよりは三郎我カ家来と成。弥弟松若を等閑なふ養育頼む。主従の印シにはそれ兵衛。其一振をと仰にはつと。金作の御佩帶渡せは三郎押戴。身に餘ッたる御賜。梅若様の御けらいに成たる様子。松若

様を始め女房や姑しゅうめに悦よろこはせたふござります早はやお暇ひまと。一札ハルツのふれは。

詞ワ、追付御親子御兄弟そごいお揃そろなされて御対たい（十四ウ）面。其時地ウ傍輩はなばい因ちみの参会中それ迄は。先さらばと松井の兵衛。梅若君ハルの御供申表門フシへと別わかれ行。

此頃都江ノに徘徊はぐかいする。名下に奥州の駒太郎こまさん。ゑぞが島の鬼四郎おにとて人買仲間の口利共。酒さげんの衛足。

地色チイロ、三郎にへつたり行合。詞ワ、コリヤ山三ぶか。ホイ又出合でたかい。二人リ共にうまいめに合あつたかしてまつかいてるはく。イヤこりやごうがわいて吞のだのじや。此四五日はふのわるい猫ねこの子にも出くはさぬ。世間せけんにがき共を大事じにかけるか昼中ひるでもへちまはぬ。わぬしもけふは孫三じやそふな。素手すでふつていなふよりつれていなぬかい。やつれていねとは何なんの事。ハテちちと二人リは吞のすへて脚すねがた、ぬ。太義ながら肩かたにかけていんてくれ。ヲそりや安やすい（十五オ）こつちやが。しる通りおりや雀とり目。もふ日のくれるに間まかなければ。うちづいて居りや結句けつぐわいらが世話せわに成なル。そこらでぐつと一トねいり。酔よさまして跡あとからこいと。とつかは急ハツミツシぎ立帰る。

工調コウテウ、身勝手がってなやつじやないか。ナア駒四郎。ハアもふ寝ねおつた。さらば我らもやつころりと。脚打すねもたせ高軒いびき前後フシもしらずふしければ。

表おもて玄関げんかんに人音あしおとト。登こ奥御殿おくでんへにげ込はムは。近江ハルのふな売り高島ノ与惣。跡うを慕したふて御台若君兵衛もつゝいて追おかけ出。詞ワ、コレくと与惣。いかほど辞退じたい召めつても。参議忠通卿の御さしづ。是非ぜひ身みが子分こぶんにせねは。ア、是兵衛様めつそふな事御意ごいなされな。私わたしめは野上の傾城斑女けいせいはんめが兄あにでござりますはいの。ヤア斑女御前の兄あにだと聞きケば。お家へ（十五ウ）対たいしてゆかりも有。松井が

養子に成なつておくりやれ。サアそふしてたものゝと御台梅若立おんたいばく寄り給へは。

阿あれまだおつしやる。忠通様のお差さ図ずといひ。松井の家督かどくを継つぎますれば。私が身に餘けうつて氣疎きそ仕合なれ共。それを世間で申さふには。あれ見よ。高島の与惣いもうとめが妹斑女いもばんがお影で。松井の源五げんごの死跡しあとへ付つけ込こんだ欲煩よくわづらと。後指うしろゆびをさゝれふより。や

つぱり在郷ざいかう住居じうきよの麦飯むぎめいで。鯉鮒こいなづな釣つのが氣きさんじと。欲ほを離はなれ義ぎを立たぬく。詞ことに主従しゆじゆ取とつく嶋しまも。なき所へ。

本國ほんくわくよりの早打はやうちと呼よりく岡崎金吾おさききんごあはたしく馳はせ付つけキ。扱とりも右大将親平みぎだいしやうしんへいの讒言せんげんにて。主君少將殿しゆきんせうしやうでんを罪つみに落おとし。御上洛ごしやうらくの

道柏原みちかしはらの宿しゆくにて大勢たいせいをもつて討うちとらんとせしゆへ。鳴な（十六オ）川宇内かわうしを代しろりに残のこし君は不破ふたの閑迄かんぢ御立ごたてのき。右大将みぎだいしやうは都

へ登のぼり桔梗ききやうの前まへを奪はとらんと。手勢てせい引ひぐしおつ付つ是へ御用心ごしんしんの為ため御注進ごしゆしん。又我カ君またわれがきみの御行衛見ごぎやうゑみ届とど申ますといひ捨直すてなに引ひかへす。

急いそのしらせに主従しゆじゆとむねとやせん角かくやと俄はいもう。余所よそこに聞きかなす与惣いもうともほつと。俱ともに忙あはて居ゐたりしが。サテ兵衛様べゐさまへ

ちとお願ねがひ。お聞届きこどけ下くだされふやと手てをつけば。ハテ此中このちゆうへかて、くはへ願ねがひとは何なんシでかおじやる。イヤ私わたしめをどうぞおまへ

の御養子ごやうしにヤアく何なんとおいやる。右大将みぎだいしやうが惡心あくしん故ゆゑ。かゝるお主おぬしの凶變きやうへん。御台若君おんたいわくきみの御供申ごくうしん最早世もはやを忍しのばねばならぬ様に成

くだり。知行ちかぎに放はなたる此兵衛このべゐ。お身を養子やうしにして讓ゆづべき家督かどくがない。イヤお家が乱みだれ御難義ごなんぎの折をじやに（十六ウ）よつて。

見かねて養子やうしに成なたいと申事まを。ヤアそれはほんか。ナンノ偽いつはり申まをましょ。ヤレそれは大悅たいえつ。死しんだ盼ぼんが蘇よみがへて。御主人ごしゆじんの今の御

用に立たといふ共是ともはほどに嬉うれしかるべきかと。与惣いもうとに取付つけ悦えつ涙なみだ。

桔梗ききやうの前まへも力ちからを得え。ソフ満足まんぞくや今いまよりは与惣いもうと。松井まついの源五兼俊げんごかねとしと名乗なをり。吉田きちだの家いへの忠臣しゆしんと成なてたも。ハ、アお心付こころづかれし御

台所だいしよの御さしづ。源五げんごと名を改かめれは死したる盼ぼんが蘇よみがへしも同然どうぜん。かゝる騒動さうどうの砌きり。親子おやこの益えきより武士ぶしの魂たまし。是爰こゝにと。

御広間の刀掛なる大小取て渡せば。はつと押戴き腰に流石の侍姿。今日只今親兵衛に譲受たる執権職。松井の源五兼俊御目みへと。厚き礼義に人々は悲しき中の御悦の時しも有し。

館の四面（十七才）人馬数多の物音に。兵衛心へ御台若君奥へ伴ひ奉れは。門前に駒乗捨右大将親平。跡にひつそふ大上平馬其外雑人あまた引ぐしどつと込入。ヤア吉田一家の奴原。宣旨成ぞ慥に聞ケ。少将惟貞酒色に溺れ虚病を構へ。禁庭へ恐れざる不行跡其罪科輕からず。我カ領内江州柏原にて討取べきを。逐電せし重罪大内裏は。願イも訴訟も叶ぬ様に此親平がしておいた。急ぎ梅若が首打て。桔梗の前を渡せくと呼びける。

ハハハ。ても身勝手な宣旨呼び。御台所を渡せとはのぶといせんさく。松井の源五兼俊が扣へたれは。ゑこそは渡し候まじと。いふ顔見るより犬上平馬。ヤアうぬは主君の領国高島の与惣じやな。某を上使として。度々我君の召る、（十七ウ）には辞退ひろいで。松井の源五と名乗ルからは。松井の兵衛が。ヲ、養子にたつた今成上りの執権職。お相人に望なら。身不肖ながらと尻引からげ。ぐつと踏出す足のふしくれ。りくんだ松井が継木の根強さ生ぬいたるがごとく也。

イヤア存外なるぼてふりめ。者共か、つて討て捨。奥へふん込桔梗の前を引立来れと右大将。玄関さして引退く。下知に随ひ雑人共拔連く。切てか、れは抜合せ群る大勢事共せず。太刀打ち足取り身のひらき。なぎ立く表の方へおつけたり。

兵衛はよき間と梅若君を前載に伴ひ出。やうすは一ト間で申せし通り。是なる見越しの柳をつたふて。北野の杜へ御立退と抱上れは。せきのぼる氣のふみども覚ぬ足取に。ヤレくあぶ（十八才）ない静にと。いふ間に平馬が引かへせは。ぱつし

く〜と切合フシい〜おふて行。

柳地ハルの梢こさへに若君ワカミはこはさ悲ツしさ身もふるはれ。堀への外そとへとなびきたる。枝えだにうつればしいわりしはく〜ぼつきり折おし。下あへおつれば夢ゆめの胴骨どうぼねふみおこされて人買共ヒヤア。コリヤ何なんじやいと起上おきり。ヒヤア天てんから降ふつたか結構けつこうな代物しろものじやと。ひんだかゆれは梅若丸ウメワカ丸。ヤレ見みのがしてにがしてくれと。悶もだへ給たまふを猿轡さるくはしつかとはませ。コリヤ幸さいいな柳の一枝いちえ。是こゝでぶてば代物しろものに疵きずがつかぬ。そふじやく〜とぼつ立引立たちひだち歸りしは無慙むぜんといふも余り有あり。

かくとはいざや白書院ハクショインより切結きぎび出る松井まついの兵衛べゑ。数かずヶ所の深手老ふかいの身の尻居しりいにまろぶを。起おこしも立たず平馬へいばがいらつて切付きりる。遙はるかに御台ごだいは走寄待はしよまちつて〜と支給さへふを。ヤア（十八ウ）主人しゅじんの恋人怪我けがなされなと引ひのけく。既すでに危あやうき後うしろへ源五取げんごてかへしてどうど打うすへ足下そくかに踏付ふみ。コリヤ右大将みぎだいしやうがてがいの犬上いぬじやう。我父わふちの息いきある内うち。自身じしんに敵てきを討うせまするか責せめてもの御腹ごはらいせと。平馬へいばが両手りやうてを後あとへぐつと折おわけ。御存分ごぞんぶんにとさし付つれは。すつ込きん首くびをすつぽんと切きも切きたり末期まうごの手際て際は。

ヲ、よくぞ遊あそびたり扱つか。梅若様うめわかさまはいづかたにと深手ふかいの父ちちをいたはれは。ヤレ源五げんご。梅若君うめわかは先達さきだちて北野きたのへ落おし参まゐらせた。我事わがことは打うやつて。御台所ごだいどころを伴ともなひ片時ひとときも早く若君わかみに追付お付き。主君少将殿しゅきんしょうしやうだんに何なんとぞ廻まわり奥州おくしゅうへ。一いつつ先御供仕さきごきうしれ。是こゝに付つても思おもへばはかなや。たつた今親いまおや子こと成なりすぐに別わかるゝ薄うすき縁ゆかり。先さききだつ父ちちへの孝行かうかうには御主ごしゅ（十九オ）人達ひとたちの御事ごことを。頼たのむ〜といふ声こゑも。頼たのずくなき老木らうきの花ちりて空ひなしく成なければ。はつと主従しゅじゆ三世さんせいと一世いせいも纒むすむの契けがり。会者定離かいしやぢやうりとはいへ共ともほいなき別わかやと。涙なみだにむせぶ折おこそあれ。弱よわみへ付込つこム捕人とりでの雑人ざつじん。アレ鮎あは売うりめが隣となにあふた体ていなるぞ。くゝし上あて毒氣吐どけはし桔梗ききやうの前まえを



奪<sup>うばひ</sup>取り。親<sup>地ウ</sup>平公へ差上<sup>て</sup>手柄<sup>がら</sup>にせんとてんでに懺<sup>とりのな</sup>績。向<sup>むかふが</sup>掩<sup>り</sup>に群<sup>むら</sup>る大勢<sup>ウ</sup>風に木の葉の侍<sup>さむらい</sup>供。骸<sup>からだ</sup>は飛石<sup>ていし</sup>手水鉢<sup>てうづばち</sup>打<sup>うち</sup>つけく<sup>フシ</sup>。  
鑒<sup>みなころし</sup>。

けころし蹴<sup>けとば</sup>飛<sup>と</sup>しよせくる雑人<sup>色</sup>又むらく。ちりくはつとほつ払<sup>ハル</sup>ひ。御台<sup>地ウ</sup>を伴<sup>ハル</sup>ひ出<sup>で</sup>て行<sup>ハル</sup>。水の流<sup>ハル</sup>や定<sup>さだ</sup>なき。北白川<sup>あやう</sup>の危<sup>あやう</sup>き御所<sup>ミヤ</sup>を。遁<sup>にこ</sup>れく<sup>イ</sup>て。忠信義士<sup>しんぎんぎし</sup>の道<sup>みち</sup>すぐに陸奥<sup>りくお</sup>。さして急<sup>いそ</sup>ける（十九ウ）

## 第二

庵崎<sup>地中</sup>や隅田川<sup>ハル</sup>原<sup>フシ</sup>を。い<sup>中</sup>つの間に賽<sup>さい</sup>の川原<sup>ハル</sup>と迷<sup>まよ</sup>ひ子<sup>こ</sup>を。やつさ<sup>ウ</sup>にかける贗盜<sup>がんと</sup>仲間<sup>なかま</sup>。子買<sup>こか</sup>く<sup>ウ</sup>と群<sup>むら</sup>りて。どの子<sup>こ</sup>がほしいこ<sup>色</sup>りやなんば。いく<sup>ウ</sup>ら共<sup>とも</sup>なき人<sup>ひと</sup>の子<sup>こ</sup>を。勾引<sup>かどはし</sup>取<sup>と</sup>て猿轡<sup>さるくわ</sup>猿繫<sup>つなぎ</sup>。鉾<sup>めい</sup>持<sup>も</sup>よる弥生<sup>やよい</sup>の十五夜<sup>いそよ</sup>空<sup>う</sup>おそ。ろ<sup>フシ</sup>しき世利<sup>せり</sup>分<sup>ぶん</sup>け也。

あら。痛<sup>いた</sup>しや梅若丸<sup>うめわづ丸</sup>。過<sup>ハル</sup>し館<sup>やかた</sup>の乱<sup>う</sup>れより。う<sup>ウ</sup>き寝<sup>ね</sup>も長<sup>なが</sup>の旅<sup>たび</sup>の空<sup>そら</sup>へ泣<sup>な</sup>くも。なか<sup>フシ</sup>せぬ猿轡<sup>さるくわ</sup>。

後<sup>うしろ</sup>手にいましめ。奥州<sup>ハル</sup>の駒太郎<sup>うま</sup>。蝦夷<sup>あまぜ</sup>が鳥<sup>とり</sup>の鬼四郎<sup>おにじろう</sup>。柳<sup>ウ</sup>の籠<sup>かご</sup>ふり立<sup>た</sup>く追来<sup>おそ</sup>り。コリヤ<sup>詞</sup>く仲間<sup>なかつま</sup>の者<sup>もの</sup>共。今夜<sup>こんや</sup>の市<sup>いち</sup>にさまた

らしいめすが有<sup>あ</sup>ラは。こんなわつばとばくろしていなふかいと。梅若君<sup>うめわづきみ</sup>の顔押<sup>かおおし</sup>上<sup>あ</sup>れば。皆月影<sup>みなつきかげ</sup>にすかし見<sup>み</sup>て。ヲ、（二十オ）

こりやよいわつばじや。ドリヤ<sup>地ウ</sup>かたづけて談合<sup>だんが</sup>せふと。我<sup>われ</sup>レ一<sup>いち</sup>子供<sup>こども</sup>を引連<sup>ひき</sup>く立<sup>た</sup>ならべは。

ム、悴<sup>が</sup>共<sup>とも</sup>はもふ是<sup>こ</sup>計<sup>けい</sup>りか。コリヤ鬼四郎<sup>おにじろう</sup>。どいつもくよふ揃<sup>そろ</sup>ふたがらくた共。思<sup>おも</sup>はしい代物<sup>しろ</sup>もなし。目利<sup>めき</sup>して買<sup>か</sup>ふふな。

相人<sup>あひ</sup>もないとき<sup>こ</sup>なせば。コリヤ<sup>詞</sup>やい<sup>い</sup>く。人買<sup>ひとか</sup>して喰<sup>く</sup>もの共<sup>とも</sup>が子供<sup>こども</sup>の目利<sup>めき</sup>せいでよいかい。買<sup>か</sup>がなんばにして売<sup>う</sup>ぞ。ハテ目

利<sup>り</sup>するなら付<sup>つ</sup>てかへ。ヲつけ買<sup>か</sup>い<sup>い</sup>にせふ市<sup>いち</sup>にふれ。ふらふが買<sup>か</sup>か。かをくと顔赤<sup>かほ</sup>らめる商買<sup>しょうばい</sup>づく。

皆立<sup>地ウ</sup>か、れば駒太郎<sup>うま</sup>。若君<sup>わきみ</sup>をひつさげ出<sup>で</sup>。サア<sup>詞</sup>付<sup>つ</sup>てかへ。やつちやくと。ソレなんば。発句<sup>はつく</sup>は老貫<sup>らうくわん</sup>。一貫<sup>いちくわん</sup>くく。二

百よく。三百四百五百よ。くくくア、いやもふおけく。此代物は仮初ながら小判道具。マアはした錢では談合がならぬと。鬼四郎が(二十ウ)悪口に仲間の者共腹を立テ。イヤ錢で売らぬ代物なら市へ持つて出さらぬがよいわい。エ、ほつこしもない夜をふかした。何シと皆いなぬかい。いのく。あんなやつらが代物は。干付てこますがよいと口くわめき立帰る。

かゝる所へ、イくと呼かけ。近江の山田の三郎。綿帽子を女に打させ。肩にすがつて来りしは雀目病とぞしられたり。

ホイ思ひがけない三郎。人買仲間の夜市に迄。ほてくろしい女房をだかへあるくかい。イヤこいつは代物じや。噂めは此跡の宿で持病おこし寝てけつく。女房をおとりにかけ。女連れと思はせたでこんなやつを勾引た。何シとよい比な雌子ではないかと。綿ほうし脱すれは。見事。こいつはしつほり直打が(二十一オ)有ルと。見込ムも理り。野上の廓で名高き花子。盛たおられ猿轡つらやにくやの目元トさへ色を含て美しき。地ウ顔を二人はためつすがめつ。ヤイ山三ぶ。此めろはどふする積じや。ヨ今仲間の者共に宿はづれて逢つて聞いた。わいらふたりの手に器量のよいわつばが有ルげな。其ころな代物が入用。ヨ、此めろとならかへてやる。逆の事顔の道具揃へて見よかと駒太郎。とく猿轡に梅花の移ばつと薫ば。

エ、うまくさやと俄に鼻息荒なし。腰よぢらしてとろく目。ひつたり抱付キコリヤ女。奥州へ連して下る。泊々はおれがいたはりだいてねる。道も辛勞か負てやる。やいのくとしなだれかゝる。

荒くれ男の(二十一ウ)頬摺を。里に馴たる花子は流石。つれなふもいひ放さず。数ならぬ身にお志は嬉しけれ共。わたしは深ふいひかはした殿御がござんす。それにさへ引わかれ。親子づれで江戸の町へいぬるもの。駿河の府中の旅籠屋に

て。母様は俄の病氣。せめてま一度お情に。府中へ帰してくださんせとくとき。歎くを。エ、かしましい談合の邪魔と鬼四郎。又猿轡ほうばらせ。ナント三ぶ。こちのわつばとかへてくれるか。ヲ、かへてはやろが。そつちのわつばはどんな類。見たけれどおりや雀目で埒明ぬ。ハテたつた今仲間のやつらに。器量の様子聞たでないかい。サア。それじやによつて談合する。先此注文と引合してくれと。(二十二オ) さし出す書付鬼四郎ひつ取て月にすかし。エ、何んじや。年の比十一二。すうはりとして顔おも長に。色白な男のがき。イヤもふ此注文にすつて付けたこつちの代物。其めろさいとむずがへにしてくれんかい。ヲ、注文に似寄たやつなら談合せふが。まんざらむづでは商に拍子がない。吞代程でも規模つけい。テモきめ細に損せぬやつ。よいはきつさり。是じやくと錢貳百。渡せば受取りまつとないかい。ハアテ打て置ケ。さらりく三人手を打。ヤイ三郎わつばめを受とれ。代物に疵付ケまいと。都から追てきた柳の篋そへて置ケと。梅若丸を山田に渡し。花子をひつたて二人の人買陸奥へさして立帰る。

地中 跡には雀目の三郎が(二十二ウ) 主共しらず。梅若君を撫廻し。ホ、よい比なわつばめじや。サアうせいと胸ぐら取て引起す。時しも三月十五夜の月の光りに若君顔見て。ヤア三郎かといはんも叶はぬ猿轡。物いひたげに悶給ふを。

詞 イヤびこくと何ひろぐ。身を大体の人買と思ふか。なまぬるこい柳の篋くらふたとはあてが違ふ。山田の三郎がだんびら針の味見せふかと柄に手をかけ。サアくどうじやくと。見へぬ雀目をぐつとむき出し。手強ふおどす詞と形相。稚心に誠と思ひ。エ、人外の三郎め。非道働く下臈としらず家来となし。あの一腰あたへし事のくやしやと。無念の身振ひがたくく。手にこたゆれば。

ヲ、ふるふはこはいかちつとそふもおじやるまい。こわくば（二十三才）すなをに歩でうせいと。引立れば身をいぶりに。振切給ふを逃ると心得。飛か、つて首筋擱。よふあた、かに逃そふや。雀目を見込みつ、走らふとは横着な素丁稚め。イデ一ト療治とおどしの刃。するりとぬいて振上ケ、割打に。力身計りのあしらいも。あてどはうとく手の内廻つて一ト刀。ずつかりきられてうん共いはれず。どうどまろぶと白刃の鋒。朱に染ミしを又ふり上。のりがしたへは慟し。拔身を撫てホイ。こりや思はず手をおふせたか。不便やどりやどこにとかなた。こなたを盲捜しにさぐり寄だき起して。コリヤわつぱ。稚心に嘸むごい人買と恨んが。全く身の欲でない一通りを聞てくたば（二十三ウ）れ。我は近江の国の山田の三郎といふ者。吉田家の御次男松若様と申を。我カ粉市松と名を呼かくまひ奉る忠義を感じ。御兄梅若様某を御家来となし下されし所に。右大将親平が讒によつて。吉田のお家断絶。猶も敵の詮義きびしく。松若丸の首討て出す者あらは。褒美をやらんと右大将が領分。美濃近江に触をなす。され共此三郎が。かくまい居ると知ル者なければ。姑に預け国に残し。女房を雀目の杖に引連し。落行キ給ふ御主人達をしたい。此辺迄罷り下る道すがら。そちを我カ手へ買イ取た所存は。松若君のまさかの時。御身代りに立んと思ひしに。早まつたるは雀目の兎相そちが定（二十四才）業。去りながら悦べ。此一ト腰は。梅若君より給はつたる金作り。匹夫の粉の身に取てはいみじき果報。松若殿と敵を欺き。褒美をもらい忠義を立る。不肖ながら死んでくれ。猿轡をとき首を刎て取したけれ共。未練に歎く声をきかば。気おくれして手にかけれまい。所詮助らぬ命と明らめ。くたばりおろふと突飛されて梅若丸。ふかき忠義の心を聞ケば。恨むにも恨れず。不便や雀目で。我し共しらず手にかけて跡で悔まん。夜明る迄のがる、たけとよろほひ。このき給ふをサアわつぱ。覚悟はよいかと尋る手先キの

所にあらねば。イヤア大事を語らせ比興働らく小粉め。逃しはせじ一ト打にと。なぐつて廻れば身をひらき探。(二十四ウ)  
刃をぬけつくぐるもかよはき手おいの。主は目見へて物いわれず。物いふ家来は雀目ととぼく追つ。おはれつ主從廻る  
因果同士。いづれせひなき折からに。

夫トを待かね女房お熊。何心なく来か、り此体見るより三郎殿。コリヤ何事と中に入。稚い者をどうよくなと夫トをつきのけ。  
かはいやそちは手を負つたか。何者の子ぞいじらしやくるしからふと。縄猿轡ときほどけはヤア女房。心当の有ルわつぱじや。  
其儘にしてのいて討せと立か、れはウ三郎わしじやはいのふ。ナニそふおつしやるは。ヲ、梅若じやはいのふ。ホイ。ハアはつ  
と飛のき色青ざめ。四頭八倒はの根も合ねば。

ヤアくすりや此お子は吉田の若君。こなたが日外お目みへした。御主人様(二十五才)ではないかいの。サ、そふ共しらず  
手につかけ。エ、情ない事をした。松若君の身代りにと買取しが。勾引来た駒太郎。鬼四郎の兩人に。其日都北白川で出合  
つたと気が付くか。どこから出た代物と一ト言とふたら。こんな鹿相はせまいもの。出かし顔のおどしだて。御主人共しらず  
深手を負せし極重罪。お腹いせに梅若様の。お手にか、つて一歩様に刻れたいが。痛手にてましませはもふそれも叶ふま  
い。此罪なんで亡さふぞ。御生キ顔さへ拝せぬ。エッエ恨めしい雀目やと。まぶたをむしりじだんだ踏。悔み歎けば女房  
も只伏しづむ計也。

深手によはる。梅若君。くるしき息の下よりも。扱はそなたは。三郎の内義かいなふ。皆弟松若の為思ふての(二十五ウ)  
間違なれば。恨も。残らぬ悔んでたもんな夫婦の衆。おりや人買の手に入と。どうで命はつぐまいと。とふから覚悟

極メて居る。身の上は明らめても。只忘れぬは。父の御運の拙き悲しさ。此間かふくる道く。見上けて通りし。富士のお山は権現様。一度禪定する者は。七難即滅疑ひなしと。人の噂身にしみく。哀れ我れもお山へのほり。父上の讒者の災難滅したやと。思ふにかいなく。剩此有様。死で冥途の迷ひとなるは是計り。三郎頼む。コレ此肌にかけし守りの内には我産髪。是をお山へ納てたもれば。おれが禪定する同然。父上の汚名を清め吉田の家を引おこし。松若を世に立てたも。草のかげから悦ばん。

我亡骸は都の人の足(二十六オ)手影もなつかしければ。此川渡しの上り場の街に埋み。最前の者共が。打立来りし柳の枝は古郷の庭木。塚の印に植てたも。誠や旅をする者には。河辺に柳を結て寿き送ると聞ケど。我れは戻らぬ死出の旅。生所を去つて此川の。道の辺の土と成ル。浅ましの身の果や。ア、恋しの父上。名残おしの母うへ様。床しと思ふ松若の顔ばせ。たつた一ト目見て死たい。言置キもしたけれど。もふ目がくらんでくと。舌もつれ目の色かはればお熊が抱しめ。コレのお申若君様。梅若様と。惜むかいなき春の夜の。短き夢と消給ふハア。悲しや最早お息がせぬはいのふと。歎けば夫とは立たり居たり面目。涙の声を上。

エ、悔しい女房共。(二十六ウ)そなたが常々大事が出来ふ。あぶない渡世。止てくれと異見せしは幾度。今といふ今身にむ様な此三郎。せめて腹切り冥途のお供と。刀をさぐつて取手にすぎり。コレこなたが死んで松若様は誰レが見育御代に立る。殊に今梅若君末期の仰の此お守り。富士のお山へ。おさめに登らふと思ふ心はないか。御遺言迄無にせふとは。エ、いひがないお人やと。恥しめ拔身をもぎとれば。すりや死ぬるにもしなれぬか。ハア。はつと計に五体も痿。どふとまるべは女

房も。わつと一どにひれふして。歎く涙に隅田川の水がさ。増る計也。

既に其夜も明ヶがたの空定メなきうろ／＼眼。立帰る駒太郎鬼四郎。コリヤ／＼山三ぶ。まだそこに(二十七才)いるかい。

先にかへためらうめを。駒太郎がだいてねると。宿屋で縄ときじやらつきおる間につ、走ッて行衛がしれぬ。わつばを戻してもらふかい。イヤさあこつちにも其わつばは。是見よ此通りについ殺してのけた。先のめろは府中へいなししてくれとと

へたでないか。ぼつかけて連れていね。イヤべん／＼と駿河迄行ふより。鼻の先の此お熊。わつばが代りにこつちへおこせと。

取つく腕先もぎ放せば。ヤア眼も見へぬさまをしてほでんがうと。後へ廻つて鬼四郎。三ぶが足かきうんとのめらせ乗ッ

かくる。こりやどうしやるとすがる女房をつきのけはねのけ。ぶつたり踏だりさいなめ共。手むかひならぬ雀目の悲しさ。

ぜひもなんぎの(二十七ウ)まつ最中。ごん／＼ひゞく野寺のかねに夜はほの／＼。

眼は見ゆるぞ女房悦べもふ楽じやと。いひさま二人をはねかへし。ふみ付／＼篠目に。雀目の返報こたへたかと。なげ込

りこむ隅田の川瀬。うかれたゞよふどろぼう共底はかとなく流行。

ラ、危い所で夜が明たと。胸なでおろせは。ヤア女房。おりや夜が明ケてあのお姿。どふも目当て見ていられぬと悔み歎けば

ア、是々。いつ迄いふてもかへらぬ諄。お佐は富士の権現様へ禪定してさんげ有レ。先ッ人目より朝日におそれ。葬が亡

目のお為とせり立られて。

ぜひ泣々立より夫トがかき上る。梅若君の亡骸に囁。てんがいと女房がかさす柳の一ト枝は。塚の印シに有縁無縁のゑかうの

種。(二十八才)黎明のからすかはい。／＼の声につれ泣こが。れてぞ三重へたどり行。

時<sup>ウキン</sup>しらぬ。雪<sup>ハル</sup>の高根<sup>ハル</sup>やふもと迄<sup>中</sup>。雪かとまがふ夜<sup>ウ</sup>ルのながめの遅<sup>フシ</sup>桜<sup>サクラ</sup>。

地<sup>地</sup>松井<sup>ハル</sup>の源五<sup>ハル</sup>兼俊<sup>ハル</sup>が。御台所<sup>ウ</sup>を背<sup>ウ</sup>にしつかと奥州<sup>ハル</sup>さして御<sup>中</sup>供<sup>中</sup>と敵<sup>ウ</sup>の。討手<sup>ウ</sup>をよくれは迷<sup>ハル</sup>ふ夜<sup>ハル</sup>の道<sup>フ</sup>富士<sup>中</sup>の裾野<sup>スソ</sup>に着<sup>ス</sup>にけり。

地<sup>地</sup>桔梗<sup>ハル</sup>の前<sup>ハル</sup>おり立<sup>ハル</sup>給<sup>ハル</sup>ひ。都<sup>都</sup>北野<sup>ハル</sup>へ尋<sup>ハル</sup>行<sup>ハル</sup>しに。梅<sup>梅</sup>若丸<sup>ハル</sup>の行衛<sup>ハル</sup>しれず。君<sup>君</sup>のゆかりの国<sup>ハル</sup>なれば。奥州<sup>ハル</sup>へと思<sup>ハル</sup>ひ立<sup>ハル</sup>。跡<sup>地</sup>よりかゝる

討手<sup>ウ</sup>を遁<sup>ハル</sup>れ。此<sup>此</sup>所<sup>中</sup>迄<sup>中</sup>来<sup>ハル</sup>りしは源五<sup>ハル</sup>の忠<sup>忠</sup>節<sup>ハル</sup>。何<sup>何</sup>とぞ夫<sup>夫</sup>の少<sup>少</sup>将<sup>中</sup>様に廻<sup>ハル</sup>り合<sup>ハル</sup>たいくと。思<sup>ハル</sup>ふ一<sup>一</sup>途<sup>ハル</sup>に氣<sup>ハル</sup>もせかれ。名<sup>名</sup>所<sup>中</sup>古<sup>古</sup>跡<sup>ハル</sup>に目<sup>目</sup>は

付<sup>付</sup>かねど。問<sup>地</sup>ねどそれと白雪<sup>ハル</sup>の。高根<sup>ハル</sup>はふじの山<sup>山</sup>成<sup>中</sup>ルかと暫<sup>フシ</sup>し見<sup>見</sup>とれておはすれば。

地<sup>地</sup>源五<sup>ハル</sup>も俱<sup>ハル</sup>に打<sup>打</sup>ながめ。夜<sup>夜</sup>目<sup>中</sup>にさへあの風景<sup>江</sup>。御<sup>江</sup>らん(二十八ウ)遊<sup>遊</sup>せ山<sup>山</sup>の腰<sup>ハル</sup>を廻<sup>ハル</sup>る雲<sup>雲</sup>の帯<sup>ハル</sup>。霞<sup>霞</sup>の衣<sup>ハル</sup>裾<sup>ハル</sup>ながく。足<sup>足</sup>高山<sup>ハル</sup>。

地<sup>地</sup>鋸<sup>ハル</sup>が嵩<sup>ハル</sup>。ひくにひかれぬ弓<sup>弓</sup>矢<sup>ハル</sup>の習<sup>ハル</sup>。又<sup>又</sup>もや討手<sup>ウ</sup>がかゝりなば。此<sup>此</sup>所<sup>中</sup>にて防<sup>ハル</sup>べし先<sup>ハル</sup>ッ。それ迄<sup>ハル</sup>はお勞<sup>ハル</sup>ばらし。是<sup>是</sup>なる桜<sup>ハル</sup>

の木<sup>木</sup>陰<sup>ハル</sup>に立<sup>立</sup>寄<sup>ハル</sup>り休<sup>ハル</sup>ませ給<sup>ハル</sup>へと。申<sup>申</sup>上<sup>ハル</sup>れはいやとよ源五<sup>源</sup>。敵<sup>敵</sup>右<sup>右</sup>大<sup>大</sup>将<sup>中</sup>親<sup>ハル</sup>平<sup>ハル</sup>より。諸<sup>諸</sup>方<sup>ハル</sup>へ討手<sup>ウ</sup>をかけぬれば。若<sup>若</sup>もやさがし出<sup>ハル</sup>され

ん。其<sup>其</sup>悲<sup>ハル</sup>しさにくらぶれば。野<sup>野</sup>山<sup>ハル</sup>にふす共<sup>中</sup>うしと思<sup>ハル</sup>はじ。しぬる共<sup>共</sup>花<sup>ハル</sup>の陰<sup>ハル</sup>にかくれんと。歌<sup>歌</sup>にも詠<sup>ハル</sup>ば。

地<sup>地</sup>咲<sup>ハル</sup>キもおくれすちりも始<sup>ハル</sup>めぬ。花<sup>花</sup>を主<sup>主</sup>に草<sup>草</sup>枕<sup>ハル</sup>と袖<sup>袖</sup>をかたしきふし給<sup>ハル</sup>ふ。

同<sup>同</sup>し類<sup>ハル</sup>の落<sup>落</sup>人<sup>ハル</sup>すがた。親<sup>ウ</sup>子<sup>子</sup>ト思<sup>思</sup>しき女<sup>女</sup>どし。アレくあそこへ人<sup>中</sup>かい共<sup>中</sup>がおはへてくる。かゝさん早<sup>早</sup>ふと手<sup>手</sup>を引<sup>引</sup>て。か<sup>ハル</sup>しこの

こかげに隠<sup>ハル</sup>るれは。

跡<sup>地</sup>より追<sup>追</sup>々<sup>ハル</sup>おつかけきたる二人<sup>二</sup>の人<sup>人</sup>買<sup>ハル</sup>。ほくそ頭<sup>頭</sup>巾<sup>ハル</sup>に目<sup>目</sup>をひからし御<sup>中</sup>台<sup>ハル</sup>を(二十九オ)見<sup>ハル</sup>るより。コリヤく爰<sup>爰</sup>にけつかるは

と。一<sup>地</sup>度<sup>ハル</sup>にかゝるを松井<sup>ハル</sup>の源五<sup>ハル</sup>ありかみつかんで打<sup>ウ</sup>付<sup>ハル</sup>く御<sup>中</sup>台<sup>ハル</sup>をかこふてつゝ立<sup>ハル</sup>ば。あいたくと頬<sup>頬</sup>をしかめて起<sup>ハル</sup>上<sup>ハル</sup>り。お

れ共<sup>共</sup>は奥州<sup>奥</sup>の駒<sup>ハル</sup>太郎<sup>ハル</sup>。ゑぞが島<sup>島</sup>の鬼<sup>鬼</sup>四<sup>四</sup>郎<sup>ハル</sup>といふ人<sup>人</sup>かい。取<sup>取</sup>にがしたあめらう。貯<sup>貯</sup>だてしやるかと。ぎしみかゝるをはつ



たとねめ付こケ。是詞は身が主君。人たがいして必跡むじこで侘言わひことすなよと。いふに二人は桔梗ききやうの前の御顔を。夜陰よかげにすかしてとつく  
と見。ヤ詞アほんに是は人たがひ。廿日はつか計りいぜん。隅田川で取にがした女め付シケ込シだは此道筋。遠地ハルくは行まじサアこいと。か  
け出すを引ずり戻してもんどりうたせ。

臂地ニもおれよとふみ付色く。四民詞を離はなれ。非道しやうばいの商売しやうばい働く儕等おのれら。ふち放すは諸人しよじんの為と。反打ち（二十九ウ）かくれはア、  
是々源五。奥州詞の人商人あきびとと有レは。我夫つまのゆかりの国のもの。命地ウを助てやつたもと。情ハルも深き仰にはつと引立色く。工詞、命  
冥加めうがな儕等おのれら。早く此場をなくなれと。首地ハルすじ擱つかんで狗投あごころなげ。ころころくと人買共。命地ウからシ逃にけちつたり。

桜地色ハルの陰より母娘。走り出て手をつかへ。となたかは存じませぬが。わらはが娘が人買の手に渡るを。救すくせ給ふお侍さむらい様は。  
神か仏か目ざましい今のお働中キ忝かたじけなくふござります。ヲ、悦地ウびは理り。見れは由ある人ハルそふなに。何として人買の手に渡られしと。  
尋給へは娘は顔を打赤め。はづかしながらわたしは。美濃の国がみの廓くわくのけいせい。様子有つとめッて勤を遁地中し。親里へ帰る  
旅の空。風の心地こころちとか、さんの大煩わづらひ。此駿河の府中ふちうに逗留ハルしている内に。人詞かい（三十オ）に勾引かひかきれ。すつての事に奥  
州のかたへ連シれ行シクを。勤シメせし身の一徳。色地ウでたらしめて府中の町へにけ戻り。病上やみりの母様をつれまして。古郷のかたへ趣  
クを又人か色いに見付シられ。危あやうい所を助りし。おれは申つく尽されぬと悦シふ事は限りなし。

ム、野上のののくるわで勤をせし人と有レしば。よしだの少将これまた惟貞卿これまたに。ふかく思はれ参らせし。斑女地中花子とて名高うキ二人の遊君あそぶん  
も。定ハルし近付きだめで有色ふの。扱詞つても委くわしい訳わけをよふ御ぞんし。其花子と申は私わたしが事。姉女郎の斑女ハルさんにぎり立て。少将様  
ンと縁を切り。親地ウもとへいぬるもつらし。添つにもそはれぬ心のほいなさ。御推量ウすいりやうなさんせと。涙シにくれていひければ。

ヤア扱は聞及ぶ。おけいせいの花子殿か是こそはよしだの少将惟貞卿のみだい所。かくいふ某は松井の源五兼俊。エ、。是はまあく。御台様共しらず最前よりのおしつけ。(三十ウ) 御ゆるされて下さりませと母諸共に敬へは。

何んのいの。しらぬ事なればおしつけはたがひに有りうち。京の九条よりふかきなじみの花子の前。十二年いぜん夫の少将殿。奥州下の折から野上の宿迄したい行キ。それよりすぐに斑女諸共かの里に勤メして。久しぶりにて我君の。お目にかゝりし二人りの衆にはあやかり物。自は今度の騒動に。思ひ子の梅若には離れく。夫は野上の廓より。奥州のかたへ落行給ふとの取ざた。お行衛を知ルものはそもしならで外にはない。教てたべと計りにて。託給へはお道理様やと。花子も母も諸共にとかふ。諾も泣キ居たる。

源五重て某は元ト江州高島の与惣と申て斑女が兄。子細有て今度松井の兵衛殿の養子と成り。御台所桔梗の前様を預り。此所迄(三十一オ) 御供申旁に出合しは。天道の引合セ。我君の御在家を。しらしてたべ花子殿。お袋と思ひ入て頼ムにぞ。サイナ殿さんの御有かを知つたら。何んのかくしやんしよ。不破の関で別しが我君様のお顔の見おさめ。あれ程迄斑女さんへのほり詰めてい給へは。奥州へなんのお下りなされふぞ。少将様に仕へては。わたしら親子が心のすまぬ訳も有り。御台様に廻り合しこそ幸イ。吉田のお家へ忠義か立たたふござんすと。いふに母は打點き。イヤのふ花子。そなたに忠義を立さすよい思案しておいた。御台様。源五殿にもお聞なされて下さりませ。もと此母は吉田のお家に仕へし竊の者。伊賀の平次成澄が娘濫町とて。十六七のうはき盛。いひかはした夫と。都を立退キしは卅年いぜん。連合イも(三十一ウ) 元トはよし有ル人なれ共。今は江戸に住所して。照降町の雪踏屋又右衛門と申ます。惣領息子は豆蔵とて。一ト器量ある者。一生町

人で朽果<sup>くちくた</sup>ん事を悲しみ。武者修行<sup>しゆぎやう</sup>に出て行衛<sup>ぎ</sup>がしれねは。妹<sup>いもうと</sup> 娘<sup>むすめ</sup>の此花子<sup>このはなこ</sup>に申付<sup>まう</sup>ケ。今にても敵の大勢<sup>てきのだいせい</sup>が寄せかけなば。  
ゆゝしき忠義<sup>ちゆうぎ</sup>立させてお目にかけふ。アノかゝさんのつがもない事はつかり。うつての大ぜいを引受<sup>ひきう</sup>て娘ごぜの身で何<sup>なん</sup>シとま  
あ。サアそこが母<sup>はは</sup>が一ッ<sup>いっ</sup>の工夫<sup>くふう</sup>。松井殿<sup>まつゐのどの</sup>のお手に餘<sup>あま</sup>る大勢<sup>だいせい</sup>を。ひがいすなそなたに防<sup>ふせが</sup>する。思案<sup>しやん</sup>もすれは有<sup>あ</sup>ルものと。いふ  
まもあらせず間遠<sup>まどお</sup>に聞ゆる人馬<sup>じんば</sup>の音<sup>おと</sup>。源五<sup>げんご</sup>驚<sup>おどろ</sup>きヤア。あの人音<sup>ひとおと</sup>トは敵<sup>てき</sup>の討手<sup>うちで</sup>。濳<sup>ひそ</sup>町殿<sup>まちのどの</sup>親子<sup>おやこ</sup>は御台所<sup>ごだいじよ</sup>を伴<sup>ともな</sup>ふて。あれなる桜<sup>さくら</sup>の  
こかげへと。すゝめやれば。

討手<sup>うちで</sup>の大将<sup>だいしやう</sup>。内記<sup>ないぎ</sup>左衛門氏<sup>ざゑもんぢ</sup>廣大勢<sup>ひろだいせい</sup>引ぐし。鎧<sup>よろい</sup>ふんばり大おん上<sup>だいおんじやう</sup>。ヤアゝそれなるは吉田<sup>きちだ</sup>の家<sup>いへ</sup>(三十二才)の今参<sup>いままゐ</sup>り。松井の  
源五<sup>げんご</sup>と見たはひが目か。高階<sup>たかひしな</sup>の右大将<sup>みぎだいしやう</sup>親平公<sup>ちかひらこう</sup>見ぬ恋にあこがれ給<sup>たま</sup>ふ。桔梗<sup>ききやう</sup>の前<sup>まえ</sup>を召<sup>め</sup>つれて。汝<sup>なんぢ</sup>も俱<sup>とも</sup>に降参<sup>かうさん</sup>せよ。りくつばる  
と氏廣<sup>ぢひろ</sup>が。鎧<sup>よろい</sup>にかくるが何<sup>なん</sup>シとく<sup>く</sup>と片手<sup>かたて</sup>矢<sup>や</sup>はげて匄<sup>ひしつ</sup>たり。

エゝさもしき氏廣<sup>ぢひろ</sup>。某<sup>なん</sup>たゝ一人に手おちして飛道<sup>とびみち</sup>具<sup>ぐ</sup>にて向<sup>むか</sup>ひしか。非道<sup>ひだう</sup>のさび矢<sup>や</sup>千筋<sup>せんしん</sup>万<sup>まん</sup>すじいかへる共<sup>ども</sup>。切<sup>き</sup>つてく<sup>く</sup>切<sup>き</sup>払<sup>は</sup>ひ。  
汝<sup>なんぢ</sup>がそつ首<sup>くび</sup>さらへ落<sup>お</sup>すはたつた今<sup>いま</sup>と。刀打<sup>たち</sup>ふり立<sup>た</sup>たる所<sup>ところ</sup>へ。コレのお早<sup>はや</sup>まるまいぞ桔梗<sup>ききやう</sup>の前<sup>まえ</sup>が出るからは。松井<sup>まつゐ</sup>の源五<sup>げんご</sup>に科<sup>か</sup>  
はないと。走<sup>はし</sup>りいづるは御台<sup>ごだい</sup>にあらず。思<sup>おも</sup>ひがけなきけいせい花子<sup>はなこ</sup>。さしもの源五<sup>げんご</sup>もはつと計<sup>はかり</sup>り。扱<sup>つか</sup>は最前<sup>さいぜん</sup>母親<sup>ぼてい</sup>が娘<sup>むすめ</sup>に忠義<sup>ちゆうぎ</sup>  
を立<sup>た</sup>さする。思案<sup>しやん</sup>といひしは是<sup>こゝ</sup>なるかと。女心<sup>おんなこころ</sup>のけなげさを。かんじてとかふの詞<sup>ことば</sup>なし。

内記<sup>ないぎ</sup>左衛門駒<sup>さゑもんこま</sup>のりはなし花子<sup>はなこ</sup>が前に(三十二才)立<sup>た</sup>よつて。吉田<sup>きちだ</sup>家の御台<sup>ごだい</sup>顔<sup>がほ</sup>なさつても。主君<sup>しゅきみ</sup>右大将<sup>みぎだいしやう</sup>殿<sup>のどの</sup>の御あせいには。  
とて迎<sup>むか</sup>ふ叶<sup>は</sup>はぬと思<sup>おも</sup>ひ居膳<sup>いぜん</sup>とはよい御思案<sup>ごしやん</sup>と。したり顔<sup>けん</sup>なる権柄<sup>けんぺい</sup>不礼<sup>ふれい</sup>。源五<sup>げんご</sup>は聞<sup>き</sup>かね舌<sup>した</sup>の根切<sup>ねきり</sup>て切<sup>き</sup>さげんと。飛<sup>は</sup>しでかゝるを花  
子<sup>こ</sup>せいでコリやく源五<sup>げんご</sup>。自<sup>みづか</sup>が是<sup>こゝ</sup>へ名乗<sup>なを</sup>りて出<sup>で</sup>たのに。家来<sup>けらい</sup>のそちが何<sup>なん</sup>しつて。氏廣<sup>ぢひろ</sup>へ慮<sup>りよ</sup>外<sup>がい</sup>すなと。詞<sup>ことば</sup>つかひも勿体<sup>もったい</sup>も。廓<sup>くわく</sup>

のふうを引かへて。御台所に似紫桔梗の前にまがふらん。

地色ハル 蒔町御台の上着の小袖たづさへ出。申桔梗の前様。とくよりも右大将様のお心に随ひ給へは。此うばが在所の爰迄。遙々お

出なされいでもよい物を。ちぶさの親の私が。手づから着ます此袍。記念と思ふて召ませと。きすれは花子はかきくもり。

今の別レに親と子の。詞はなくて袖しぼる。小袖はすぐに（三十三才）母の衣。ほろと互イに泣ク涙。心ぞ思ひやられたり。

詞ホ、うばめがさしづで袍を召つたれば又見事。コリヤ成上りの御からう。桔梗の前と俱に降参する気はないか。とつくりと

思案して。跡の宿の本陣返事をしろ。某は御台所を御供申す。早くござれとあらけなく。けいせい花子を引立させ。雑

人引つれ内記左衛門本陣へさして立帰る。

色コレのお待ツと。桔梗の前は後手に。縛られながら走り出させ給ふにぞ。源五見るより。ヤア何故にコ、此有様と。かけ寄り

いましめ引ほどけはわつとなき。自を爰へ出すまいと。あの蒔町の情の縄のか、へ帯。く、りつきやつた桜の枝が。まちつ

と早ふ折れるなら。花子の前を身代りに敵の手へはやるまい物。我夫のお情をかけられしあの（三十三才）人になんぎさせ。

何シとながらへ居られふぞ。是迄也と隨身の一腰に。手をかけ給ふをコハ御短慮と。とゝむる二人をつきのけく。どふ有て

も。花子の前を取戻さねば。本妻妾の義理た、ずと一途にせまる。仰に源五思案を究め。ハ、いかにもそふじや。御台所の

御生害を止んには。内記左衛門がすゝめに任せ。某が降参して。折をもつて花子の前を。取かへすこそ忠義なれ。主君少

将殿に廻り合るゝ、それ迄は。蒔町殿心底見込で。御台所の御身のうへを。頼ミ申といひすてゝ。一ツ走にかけ行ケば

コレのふしはし源五殿。娘が命は数ならず。返忠降参の。悪名取てよいかいのと。かけ出しては立戻り。御台様たゞ独。

こゝに残して行にもゆかれず。ハア何とせんぜひもなやと。思ひ止まる（三十四才）時しもあれ。富士の高根の霞のまに  
くちらめく火影。あれを見や瀧町。ほんになあ。あれはどうでも此お山へ。禪定する行者の炬。御らんぜ最早夜明ヶ  
にちかいやら。火かけはうすく人かげはありくと。白装束で坂を下りにいざつておる。ほんにそなたのいやる通り。  
ふじせんげんの行人に究つた。ヨ、あぶな。あれく。先へ二人跡から三人。ひよつと独がこけたなら。同行五人が。  
将基たをしじや有ルまいか。遠目に見てさへひやいなもの。睨うちに残らずふもとの。桜のかげへ隠たと。いふに御台  
は。御手を合せ遙拝有。なむや。富士浅間大ごんげん。行衛知しる夫の少将。我子梅若丸に廻り合せてたび給へ。自  
山へ禪定と。御祈願あれば。是申。いかに殿御のお為じや（三十四ウ）とて。富士のお山へ女子はきんぜい。それく  
そこへ。今の行者がくるはいなど。いふま程なくほらがいの声喧く。檜の笠に金剛杖。ふじを画し白き行衣の二人つれ。  
瀧町ちかづきノフ行者達。富士禪定は水無月の朔日よりと聞つるに。扱つても早い御さんけい。ヨ、ませた事を尋る女中。六  
月の朔日からは余国のもの、参詣。忝くも此親仁は。江州矢橋の次郎兵衛法印といふ先達。おらが国からは。百日の行もせ  
す春山より参詣する。謂は昔く。近江の湖が一夜にほれて。此富士山に成たげな。もとがこちの国の土じやによつて。  
ついそお山にけさ、の有た例はないが。今度はひよんな邪客を連れ立たれは作左。小きみが悪かつたのふ。ヨ、こきみのわ  
るい段かいの。なんぼこちの国の者でもとが（三十五才）人買の山田の三郎。なしおいた悪業でひよつと嵐にとられふか。  
狗賓殿にかけられふかと案じたに。同行五人が。無事で下向しました。有がたい事じやこんせぬかと。聞クに御台も瀧町も  
お山のかたをながむれば山伏一人驚直に。矢をいるやうにおりるのは。あれもお国の人なるかと。問れて二人はかぶりふ

り。イヤ／＼今の山伏は此ふもとの村山。一本杉の降寂院とて。こちらが宿坊じやが。何事なれは早い下山。ヤアあれ／＼。あれなる桜のしげみ。風もふかぬにさはめくは。跡に残った同行共に。けさ、はないかと二人はあぶ／＼。見やるあなただの遅桜。はげしき富士の山風ちるは風か。ぐひんのわざかと氣をもみ。あせる其所へ。

同行老人かけ来り／＼おそろしや先達殿。宿坊の降寂院がお山より追かけて。邪客の山田の（三十五ウ）三郎を。主の敵じやとて。打合ッやら切合ッやら。夢見たやふな大騒動と。聞より驚き。ヒヤアこんな時は同行も我レ一に身ざんまいと。逃る所へ／＼と。跡に残りし同行片息になつて馳付キ。なんなく山田の三郎は。降寂院に深手をおふて鬻ちんがい。どうで命は有まい。／＼おそろしやべらついて。しでの山田の三郎が。供をせふよりみなこいと。逃るも先達足早に。蜘蛛の子ちらすごとく也。

瀧町御台を後にかこい。見やるそなたへ山田の三郎。白き行衣を。朱になしてにげ来り。

ヤア／＼女中さはがれそ頼たき事有り。拙者は。身に覚ある敵討にて。かくのごとく深手をおい逃隠る。其子細は。国本トに世になき主人をかくまふてゐる某。此場の命助りたい。敵がおつかけ来る共穴かしこ。我在家を人にもらして給はるな。（三十六オ）ヤ、女ふぜいに事を分けてのお頼み。何しに人に洩そふぞ。いづくへ成共はや落給へ。

ハ、ア忝し。御らんのごとく急所の深疵。にげ延ん事思ひもよらずと。たすきにかけし白布ほどいて髑の。手疵を押巻ひん結び。是なる桜に身を忍んと。諸手をかけて飛上り。枝より。枝によちのほれは。飛ちる桜の花の雪。ふりかへりみる向の峽より。かけつてくる山伏姿。そりやこそきたはと。御台瀧町叢に深く。忍へは三郎が。身はしよんぼりと白さぎの。

獵師れうしの鎬やさきを遁ウれんと梢フシに忍フふぜい也。

降寂院げじやくは拔身はくしんを血汐ちほにそみかくだの。露分衣つめわけんすゞかけや。頭巾とぎんに頤しやうふりみだき。山田やまだが行衛かうゑを爰かしこよ。彼かと。尋フシさがすを。

瀧町たきが見るに驚ハルき走り出ナフ。おまへは我父わふちいがの平次へいじ。成澄なるすみ（三十六ウ）様ではないかいのとすがり。付スエテケは

ヤア汝アは我娘わがむすめ。瀧町たきなるかといはんとせしが。取ツてつきのけ。又またかけ出でせは御台所ごだいしよ。草ウかきわけて立出たてで給たまひノウ聞きこ及およぶ。伊賀いの平次へいじ成澄なるすみなるか。自みづからこそ少将せうしやうのつま桔梗ききやうの前まへ。忠義ちうぎある瀧町たきなれば親子おやこのたいめんしてたもと。仰ウもあへぬにハ、はつと飛としされは。梢こしに忍にぶ三郎さんじやうも共に驚ハルク心を鎮しづめ。しづうをとつくととき、いたる。

降寂院げじやくのりおしぬぐひ刀はをおさめ。我わカ事は少将せうしやう殿だんの御父ごふち。吉田きちだの前生ぜんじやう秋貞公あきさだに仕しへし竊しのひの者ものなりしが。あれなる娘むすめ瀧町たきは。密夫みつぶと立退たてひき不所存ふしよんもの。伊賀流いけりうの竊しのひの術じゆつは血筋ちぢんの外ほか。他人たにんに相伝さうでんせざる家いへの掟おきて。外ほかに伝つたふる妨せがれなければ。行末ぎやうまつあち

きなく思おもひ切り出で家いへせんとは思おもへ共とも。世よに捨すられ坊主ぼくしと。人ひとに笑わられんも口惜くちやくく。当所村たうしよむら（三十七オ）山やまに身みをよせ卅年来しやうねん。

ふじ禅定ぜんぢやうの修験者しゆげんぢやとなつて罷有る所に。今度こんど右大将みぎだいしやう親平おんへいの悪逆あくぎやくにてお家の乱うれし折をりから。娘むすめめが忠義ちうぎを尽つくせりと。御台所ごだいしよの仰うにめんじ。昔むかしの誤ごをゆるしてこます。去こながら。聲こゑの小豊治こぶんぢは。もと敵右大将てきみだいしやうがけらい。今牟人かうにんの身みと成なても。古主ふるぬしを

したふかしたはぬか。夫うトか心底しんていしつづらめ。有あり様に申まをせ聞きこんと詰しづめかくれは。瀧町たき涙なみだの顔うふり上あ其そのお答こたへは御尤ごより。最前さいぜんより御台様ごだいさまに。連合れんがの本名ほんなをかくしたも。お心こころをおかしますまいため計はかりり。たとひ夫うトは。古主ふるぬし右大将みぎだいしやう殿だんへ志しが有あるにもせよ。

一つになるやうな。さもししい心こころではござりませぬ。ヲ、何なにシのいの。たつた今娘こんむすめの花子はなこを自みづから。代かりにやりやつた忠義ちうぎを見みて。疑うふてよい物ものかいの。ヤア汝アは我孫わその花子はなこは。敵てきの虜とらとなり（三十七ウ）つるか。いふに瀧町たききよつとして。おまへ

はどふして。花子が事御存じ。ヲ、知ルこそ詔有。御台所にも聞し召れ下されよ。近曾村山の我庵リへ。花子が兄の豆蔵といふ者来つて。此降寂院を祖父共しらず。武士の果と見込で。武芸のしなん頼ミたしと。町人に似合ざる望。根をたんだゆれは江戸の町。照降町の雪踏屋の舂。父が本名は加藤小豊治祐隆と申せし京家の武士。其むかしを忘れず。何とぞ侍に成りたきゆへ。武者修行に出て候と。彼が委き咄はすぐに。富士ごんけんの御告。互いにしらぬちい孫を引合せ給ふと有難くて。伊賀流の竊の極意を相伝して。羚羊の裘とて家に伝はる。竊の装束迄をあたへたり。是は唐の羚羊といふもの。血を取て染たる裘。其色赤けれ共（三十八才）忍ぶに人の目にたゝずしんたい。かけ引自然と身がるに成ル事は家の妙術。羚羊の獸は宿する時に木の枝に。角をかけて其形。ちいさくなれば。人の眼に。見へかたし去ルによつて詩を作るにも心ふかく。其意知しがたきを羚羊の。角に論るも此謂ぞや。ひでんをもつて彼裘を着すれば。六尺ゆたかの豆蔵が形チ。忽ちいさく見ゆる事一尺計。かゝる竊の術を授たる折から。吉田の家の騒動と街の風聞。すぐに豆蔵は美濃国へつかはし。我は主君少将殿御利運の折の為。いつくよりもお山へ早く禪定せしに。近江の国より上りし行人の内に。山田の三郎といふもの。一ッの守袋をふじの八葉におさめ。是は不慮の義有つて。我手にかけてし主人の遺物と。身のざいごうをさんげし。禁へ（三十八ウ）下カリし跡にて。其守袋を披見て。三郎が我カ君を。手にかけてし事露顕せりと。跡は詞も。涙ぐむ。

あらかきづかひや三郎が手にかけてしとは誰なるぞと。梅若丸の御さいごをしらぬ母君濫町より。しげる梢に身を忍ぶ。山田が思ひぞせつなけれ。歎キをかけじと自らに隠しやつてもどうではしれる。殺され給ふは夫の少将殿かいの。若は梅若



様かいなど。あせる二人が天窓の上から。ヲ、其證跡は某。直に白状せんと。ひつくりかへつて梢から。おつればばつとちる花よりはやきたそくの降寂院。山田が簀に打跨し其勢ひ。天邪鬼を組ふせ給ふ毘沙門の座像を見るもかくやらん。反打かけてみだい所。詰寄給へはヤア濠町あれ止よ。誰が敵共聞定メず早まり給ふな。かくのごとく（三十九才）降寂院が。膝の下タにひしぎ付けたる三郎めは。ぢごくおとしの鼠も同前。かれがお山へ納たる。守袋は是也と。懷中より取出せは朝日にかゝやく蜀江の。錦のまやうを御台所。ノウそこそは我子梅若か。産髪入し守袋。扱は其。三郎が手にかけて殺したるか。憎や悲しとかつばとふし。我子をかへせ梅若戻せと。三郎が身をかきむしり狂気のごとくせんご。ふかくの御歎き。

降寂院涙にうるむ大の眼に角を立。ヤイ三郎。儕お山でさんげの時。御主人を手にかけてとぬかしたれば本名はしらね共。吉田のお家の。御けらいすじに極つた。主殺しの悪罪人。一思ひに殺んより。梅若君御さいごの有様。望に任せ白状さする。早立上れと。誓をつかんで引おこせは。わるびれたるけしきもなく。誠に膽婆城の鴿は。（三十九才）八万劫が其間タ。猶はとのすがたをかへずとは。山田三郎が。事なるぞや。人かいの悪業いく万劫をふるとても。遁る、時節の有べきか。一ト度都にて。梅若君の御けらいと成つたれば。三郎がつらをよく御存し有ながら。若君猿轡にて物の給ふ事叶はず。我レは雀目で眼見へねば。主共白刃のおどしの割打。手の廻りしがいんぐのは始メ。そくじに腹切つて。めいどへの御供と思ひしが。若宮いまはの仰には。御父少将殿。御運の披るべき祈りのため。富士ごんげんへ大願をかけ置たれば。梅若に代て禪定し。肌守りの産髪をふじのお山へ。納メてくれよとの御遺言背ば不忠の上塗と。我女房が。切ッなるいさめに命

を延はり。すまぬ心を隅田川の片辺りに御しがいを葬て候と。語りもはかなき梅若のさいごのしだいを。聞けば聞くほど御母みだいの瀧町も。悲しさかうじて詞も出ず。きへ入ル計に歎るゝ。ヤア三郎。さほど（四十才）けつぱくなる性根ならば。梅若君の。御ゆいげんを立たるこそ幸イ。なぜ潔相手にならぬ。サア立上つて勝負くゝと三人が。鼎になつて詰かくれは。ア、暫ク御待下さるべし。吉田のお家へ忠義のすじ。今一言申たしと。聞よりさしもの降寂院。お家へ忠義のすじと有レば。みだい様御ひかへ。娘もせくなとおしとめ。刃をふせてひかへける。

手おいの三郎ためいきをほつとつぎ。我レはみのゝくに野上の長が弟。野上の藤太といつし者。けいせい斑女のはらに御出。生有し。吉田の少将殿の御次男。松若丸様をわらのうへより。里に取つて我子となし。十一年此かた養育奉り。御成人有ルに随ひ。何とぞひんくをおめにかげじと思ふから。わるい事と知りながら人かいを渡世にして。多の人の子に。うきめを見せ剩へ。主殺しと成たる極重悪人。ふじ禪定するならば。このは天狗の。距にかゝつて引（四十ウ）さかれんは必定と。かくごせしにはからずも。旁に出合イ首とらるゝは。我カ身に取ての此世の面目。みらいにまします梅若君の。御うつぶんもはるゝ道理なれ共。我死ンでは。年よつた姑や女房がいかでか松若君を。見そだつべきと心がひかされ。最前のやうに逃かくれしを。比興みれんと旁の。思れん手前も面目ない。降寂院殿。御辺がおつかけ。主の敵と切かけられし。其時いまだ夜は明ケやらず。やつぱり雀目とほくせは。一ト思ひに殺るゝて有ふつ物。なまなか眼病がなかつて爰迄にげのび。生恥さらす主殺しの大罪人。竹鋸。逆櫟におこなはるゝとて。更々恨と思ふまじ。其かはりに。江州山田に。かくまい置いたる松若丸の。御先途を見つけて給はれ。頼おくは是計と涙ながらに手を合せ。深手にくるしむいま

はの願<sup>イ</sup>。ことほりきいて三人は。(四十一オ) 山田が心の不便<sup>ウ</sup>さに。しばしいらへもなかりしが。

涙<sup>地色中</sup>のひまより桔梗<sup>ウ</sup>の前扱<sup>ウ</sup>はのがみの藤太とは。三郎そなたの事かいの。わらはが為<sup>ウ</sup>には義理<sup>ウ</sup>有<sup>ウ</sup>まつわか。忠義<sup>ウ</sup>ふかき人なれば恨<sup>ハル</sup>は残<sup>ハル</sup>らぬくと。蒔町<sup>ウ</sup>諸共さしよつて。介抱<sup>カイホウ</sup>有<sup>レ</sup>は降寂院<sup>色</sup>。さばかり忠義<sup>有</sup>。御刃<sup>ウ</sup>としらず手<sup>ウ</sup>にかけて今<sup>コウ</sup>の後悔<sup>ハル</sup>。七十に餘<sup>あま</sup>る此<sup>ウ</sup>おいはれ。何<sup>シ</sup>のやくに立<sup>レ</sup>べきぞ。吉田<sup>地ウ</sup>のお家の為<sup>ウ</sup>と思<sup>ハル</sup>ひ。三郎<sup>ウ</sup>しんではしおくりやるなど。しほれぬかほにちる涙<sup>ウ</sup>。何<sup>ニ</sup>にたとへんいがぐりに露<sup>ウ</sup>をそ、ぎしごとく也。

山田<sup>訓</sup>はいらつて。ヤアかゝるいたでに五<sup>ウ</sup>ざうをもみ。此上<sup>ウ</sup>に命<sup>ウ</sup>がつくべきか。いか程に頼<sup>ム</sup>共。いづれもの御手<sup>ウ</sup>にかけては給<sup>ハル</sup>はるまじ。逆<sup>地色中</sup>ものがれぬ必死<sup>必シ</sup>の深手<sup>ウ</sup>。たとへ骸<sup>カラダ</sup>は膺<sup>ウシクハ</sup>になるとも。魂<sup>タマシ</sup>はいつかなしなぬ。忠信<sup>ウ</sup>の一念<sup>ハル</sup>は。鬼<sup>キ</sup>となりしんと成<sup>ウ</sup>つて。松若<sup>ウ</sup>君のまさかの御用<sup>ウ</sup>にた、んづ物と。天<sup>ハル</sup>に。むかつて(四十一ウ) 誓<sup>チカヒ</sup>の詞<sup>ウ</sup>。手疵<sup>テヅキ</sup>を包<sup>ウ</sup>し布<sup>フ</sup>ひつぽどき。くびにまとい諸手<sup>ハル</sup>をはつてぐつとしめ。両眼<sup>ウ</sup>ありく見聞<sup>ミヒラキ</sup>ながら。いき引取<sup>ウ</sup>てふじの、に。はかなきさいごぞせひもなし。軀<sup>地ハル</sup>に取<sup>ウ</sup>つきみだい蒔町<sup>上</sup>。おしやむざんとなげかる、をひきのけく。ヤアく娘<sup>メ</sup>。主君<sup>ウ</sup>少将殿<sup>ウ</sup>。御出世<sup>ウ</sup>迄<sup>シメツセ</sup>はみだい所の御か<sup>ハル</sup>いほう。汝<sup>ウ</sup>に任<sup>ウ</sup>する早々<sup>ウ</sup>御供仕<sup>ウ</sup>れ。降寂院<sup>地ウ</sup>は三郎<sup>ウ</sup>が亡骸<sup>ナマカ</sup>を。此御山<sup>ウ</sup>に取<sup>ウ</sup>おさめ。跡懇<sup>ウ</sup>に弔<sup>ハル</sup>ふべしと。しがいを抱<sup>ウ</sup>き立<sup>ハル</sup>上<sup>ハル</sup>。れは。桔梗<sup>中</sup>の前も蒔町<sup>ウ</sup>も。ゑかうをなして。別<sup>ハル</sup>し行<sup>ウ</sup>。涙<sup>中</sup>の雨<sup>ウ</sup>の花<sup>フシ</sup>くもり。無常<sup>ハル</sup>をしめす。ひがん桜<sup>色</sup>やふげんざう。妙<sup>中</sup>なる御手<sup>ウ</sup>の糸桜<sup>ミ</sup>むすび。とめぬ別路<sup>ハル</sup>に。名残<sup>ウ</sup>かずく有明<sup>ウ</sup>さくら単紅<sup>カ</sup>あさぎ。立<sup>ウ</sup>かへりてはいざさらは。さらはくと。招<sup>メ</sup>く袂<sup>ウ</sup>の墨染<sup>ハル</sup>桜<sup>ウ</sup>そでざくら。影<sup>ウ</sup>も姿<sup>ハル</sup>も隔<sup>ハル</sup>りていく。山桜<sup>ウ</sup>の霧<sup>キリ</sup>に。ほのくこが<sup>ウ</sup>くて別<sup>ハル</sup>く成<sup>ウ</sup>にけり(四十二オ)

## 第三

己<sup>おのれ</sup>を貴<sup>たか</sup>んで人をいやしめ。君<sup>ウ</sup>を侍<sup>たの</sup>んで威<sup>ゐ</sup>をうばふものは銚<sup>ぼこ</sup>をふむ虎<sup>とら</sup>のごとしとかや。美濃<sup>ウ</sup>近江<sup>ウ</sup>両<sup>ウ</sup>国の按察使<sup>あぜつし</sup>高階<sup>こうかい</sup>の右大將<sup>みぎだいしやう</sup>親平<sup>しんへい</sup>は。恋<sup>ウ</sup>の意趣<sup>いしゆ</sup>より吉田<sup>ウ</sup>の少將<sup>せんしやう</sup>を讒言<sup>ざんげん</sup>し。所領<sup>ウ</sup>残<sup>ざん</sup>らす没収<sup>もつしゆ</sup>して。猶<sup>ウ</sup>も吉田<sup>ウ</sup>の一門<sup>いっもん</sup>の行衛<sup>ぎやうゑ</sup>をさがし。後難<sup>こうなん</sup>をのがれんと心を屈<sup>くつ</sup>す美濃<sup>ウ</sup>の国。苗木<sup>なぐぎ</sup>の館<sup>やかた</sup>に近臣<sup>きんしん</sup>を召あつめ日夜<sup>フシ</sup>にせんぎ区<sup>まちく</sup>也。

取次<sup>地色ハル</sup>キの侍<sup>地色</sup>罷出<sup>し</sup>。御領<sup>御</sup>分近江<sup>御</sup>の国韃崎<sup>びださき</sup>八まんぐうの神職<sup>しんしやく</sup>。御ちうしんの義<sup>ぎ</sup>に付。只今<sup>地中</sup>是<sup>は</sup>へと。披露<sup>ひきう</sup>に程<sup>ほど</sup>なく。神主<sup>かんぬし</sup>式部<sup>しきぶ</sup>松をゑがきし絵馬<sup>えま</sup>をたづさへ。御前<sup>ごぜん</sup>にさ、げ謹<sup>つしん</sup>で。御らんのごとく此<sup>こ</sup>絵馬<sup>えま</sup>に。願<sup>くは</sup>主松<sup>しゆまつ</sup>若<sup>わ</sup>十一才<sup>じふいちさい</sup>と記<sup>し</sup>せしは。(四十二ウ)疑

イもなき吉田<sup>地ウ</sup>の次男<sup>じなん</sup>。もし御せんぎの手かゝりにも成<sup>な</sup>べきかと。早速<sup>さつそく</sup>うつたへ候<sup>こう</sup>と言上<sup>ごんじやう</sup>すれは。

右大將<sup>地ウ</sup>くはんくと打<sup>う</sup>ながめ。ホ、ウ是<sup>こ</sup>尋<sup>たづ</sup>る少將<sup>せんしやう</sup>が舩<sup>せふね</sup>松若<sup>まつわく</sup>。韃崎<sup>びださき</sup>へ其<sup>その</sup>絵馬<sup>えま</sup>を奉納<sup>ほうのう</sup>すれは。彼<sup>か</sup>近辺<sup>きんぺん</sup>に忍<sup>しの</sup>びいるに疑<sup>ぎ</sup>なし。うろんなるもの徘徊<sup>はいかい</sup>せは搦<sup>からめ</sup>とつて出<sup>で</sup>すべし。人違<sup>ウ</sup>イでも大<sup>お</sup>事<sup>じ</sup>ない。必<sup>かならず</sup>ぬかるな罷立<sup>はだち</sup>と仰<sup>おほ</sup>にはつと領掌<sup>りやうじやう</sup>し。宮居<sup>みやゐ</sup>をさして歸<sup>かへ</sup>りける。

折<sup>地中</sup>もこそ有<sup>あ</sup>執權<sup>しつけん</sup>内記<sup>ないき</sup>左衛門氏<sup>さゑもんし</sup>廣罷出<sup>ひろし</sup>。此間<sup>こゝ</sup>方々と落人<sup>おちうど</sup>をさがす所。駿河<sup>しゆんが</sup>の国<sup>くに</sup>にて少將<sup>せんしやう</sup>の御台<sup>ごだい</sup>桔梗<sup>ききやう</sup>の前<sup>まえ</sup>。家来<sup>けらい</sup>松井<sup>まつい</sup>ノ源五<sup>げんご</sup>を見付<sup>みづ</sup>け。我働<sup>われはたら</sup>キにてみだい所<sup>ところ</sup>を召<sup>め</sup>とり。源五<sup>げんご</sup>にも降参<sup>かうさん</sup>致<sup>いた</sup>させ。是<sup>こゝ</sup>へ召連<sup>めいれん</sup>候<sup>こう</sup>としたり顔<sup>かほ</sup>に相述<sup>あいゆ</sup>れは。

ホ、桔梗<sup>地中</sup>の前<sup>まえ</sup>を手<sup>て</sup>に入<sup>い</sup>れるといひ。松井<sup>まつい</sup>の源五<sup>げんご</sup>に降参<sup>かうさん</sup>させ。召<sup>め</sup>つれ帰<sup>かへ</sup>る事<sup>こと</sup>拔群<sup>はつぐん</sup>の働<sup>はたら</sup>き。此年<sup>このとし</sup>月見<sup>つきみ</sup>ぬ(四十三才)恋<sup>こひ</sup>にこがれし桔梗<sup>ききやう</sup>の前<sup>まえ</sup>が顔<sup>かほ</sup>見たし。サアく是<sup>こゝ</sup>への仰<sup>おほ</sup>にそれと呼<sup>よ</sup>つたふ。声<sup>こゑ</sup>をしるべに。立出<sup>たち</sup>る姿<sup>すがた</sup>の立木<sup>たちき</sup>里<sup>さと</sup>なれて色<sup>いろ</sup>と情<sup>なさけ</sup>を咲<sup>は</sup>き分<sup>わ</sup>し。花子<sup>はなこ</sup>も今はぎり故<sup>ゆゑ</sup>に桔梗<sup>ききやう</sup>の前<sup>まえ</sup>になりふりをうつせばうつす袍<sup>うわぎ</sup>も裏表<sup>うらおもて</sup>有<sup>あ</sup>ル身<sup>み</sup>の上<sup>うへ</sup>を。若<sup>も</sup>もそれぞとしられんかと薄氷<sup>はくひやう</sup>をふむ思<sup>おも</sup>ひ

ひにて。松井ハルの源五諸共ハルに御前マシ間マシ近くカシ畏こる。

右大将地色ウにつこと打サテゑみ見事詞。聞マシしに増マシる桔梗ハルの前マシ。其美うつくしい形ハルチに似ニ合ハルぬどうよくな心しん底てい覺い有あふ。某ばうが謀うけい計けいにて少將ハルを

おい失うしなひしも。そちを我手ハルに入ハルんため。是こはい事こともなんにもないちかふまねと招まねけ共ハル。顔ハルを背そむけて涙中ぐみ。コリヤ源五

主おんの恩おんを打忘ハルれかうさんして自みづか迄ハル。かゝるうきめを見ウする事ハル。うらめしい口ハルおしい。是ハルでもハル（四十三ウ）武士まじいか侍ハルか。

エ、恥はぢしらず人ハルでなしと。みだいの思ハルひ身ハルに受ハルて託かち歎ちくぞ誠ハルなる。ヤアかへらぬ諄くりこと聞ハルたふない。先達ハルて野上ハルのけいせい。斑

女ハルを呼ハルよせ置ハルたれは。拷問かうもんして少將ハル親子ハルが行衛ハルを白ハル状ハルさせ首打ハルはたつた今ハル。とても叶ハルはぬふつつりと思ハルひ切我心しだがに従したがひ

めさ。それ地色中く源五ウとくと合点がてんのゆくやう。おくへ連ハルし行ハルいひ聞ハルせよ。君臣くんしん夫婦ふふの盃さかづき今日けふ一いつ所に取結むすばん。早ハルとくくハルと

有ハルければ。

サアみだい様ハルお立ハルなされ。ア、さりとハルはわるい御ハルがてん。今親平公ハルの仰ハルらる、通ハルり。万ハル事はハルお前ハルに御執心しやくしんからハルおこつて吉田ハルの

家のめつぼう。今さつはりと御心ハルに従したがひ給たまは、惟貞卿これまたのせんぎもそれ也ハルけりに成ハルルまい物ハルでもない。アレまた泣ハルいて計はかりござ

つては事がすまぬ。さあく奥地中へお立ハルくとす、む詞ことにぜひ泣ハル々ハル。花子ハルは（四十四オ）源五ハルに誘さそはれてこそ人ハルにけり。

蔵人地ウ立ハルてヤアハルのがみの里ハルの名主町人ハル。けいせい斑女ハルを召ハルつれ急ハルいで参ハルれ出ハルませいと。よばれて出ハルる。八ハルもんじ。おめず場ば

うてずおぢけなくかい。する身中も恋風ハルは。いつも。廓くわにこがる、殿ハルを。留木地ハルの衣きぬのうつり香がも。余所よそにしられじ白ハルたへ

や。雪ゆきの素足すあしの玉鉾たまぼこに。庭にはの千草ちくさも色失ハルて。花ハルも妬ねたるふぜい也。

申ハルシ太夫さんへ。爰ハルはまあ何ハルシといふ揚屋あげじやへ。べうくと取ハルじめもない座敷ハルにつくくと。かはつた形かたちなおさんばつか

り。どうも合点がいかなぬはいな。コレオ二郎。麿相いやんな。あのまん中なは大尽さん。側にござるが末社じやはいの。ホンニ大きな口舌のあげくやら。皆こはい顔して居さんすと。禿があだ口名主町人しいくと旬しかたで笑止がる。

内記左衛門目に角立。ヤイ町人（四十四ウ）共。斑女を召出さるゝは少将父子が在家を御せんぎの為なるに。びろう至極なこりや何んじや。イヤ是は厚見の藏人様の御内意。お上ミのお慰に成様に。揚屋入のていにて参れと有ルゆへ。あのこく長持迄もたせ。まだ幫閑も召連お次キにひかへさせましたが。サア此たいこが異者。名は豆蔵と申まして。ヤアばかを尽しおる。御せんぎの邪魔飛しされと。叱付れは右大将。イヤ内記左衛門そりやかたい。藏人が物好き時に取ての一興。其豆蔵といふ幫閑。せいは一尺二三寸有ルといふ事聞及ぶ。早く出せと有ければ。藏人はつと承り。豆蔵参れとよぶ声に編笠手にさけ。赤イ物さてちよこく。ちよつこりちよつとすはつた豆蔵。目にも入べきふぜい也。

右大将遙に見やり。ホ、き、しよりちいさい奴（四十五オ）小人国に生るゝ者は身のたけ一尺二寸といへ共。いまだ日本に出生したる例を聞ず。おのれが出所はいづいかなる者。かたちのちいさきには子細が有か語れ。聞んと有ければ。あらむつかしのお尋や。先拙者めが親父は花のお江戸に隠れもない。照降町の雪踏屋又右衛門と申者。ちと色すじにかゝつて此豆蔵はかり切にたつた七しやうのかんどう受々。うつらくと都のかたへ趣キしに。大津の町で茶碗酒一ぱいぐつとひつかけたが。サア有ふ事の。大事の親の命日をすてんと打忘れ。あびを肴にくふやいな。六尺ゆたかな骸がじつとしまつてくる程に。目ふる間にぐしやくく。ちよくくく。ちよつぱりといひ此様に成たも道理惣領てなし末子てなし。我れ等の中に生れたりや。（四十五ウ）中のく小仏は。なぜにせいがひくいぞ。親の日にあびくふてそれでせい

へ、へ、へ。かふ縮んだで。ござりますと申上れば。せいのひくいひは聞へたが。見れば手足も相応にちいさい。イヤこりやあみ塩辛くふたさかいで。へ、へ、へはれ口賢いやつ。して其様にちいさく成って何ぞ調法が有かい。アイあの人の骸のちいさい調法は。おつ取て恋の媒かよはせ文の取遣。此斑女が度々頼んで覚がござんす。行かれぬ所を行が得物。いかにもく太夫子のいはんす通り。窓からくぐる筈からぬける。鼠穴でも蟻穴でも。穴さへ有ればどこ迄もぐすくといはる男。でんてれつくの幫閑じやともてはやさる、はよけれ共。かはひや国本トのか、めか。海老くふた報イとは夢にもしらず。こ(四十六オ)もかしこもちいさふなつたを見おつたら。無力をおとしましよ。是がふびんにござりますと涙ましくら嘸まじくら。口に任る身の上。かいつまんたるちつくり男。稚子供の持遊び。小指の先きに載る、まめな豆蔵又右衛門扱もまめなが一文と。今の世迄も形チをうつし。父子が名代を残しける。

ハ、ハ、ハ、我カ前共おそれず。幫閑めを相手にあだ口きいて。少将がせんぎを脇道へやらんとはのぶとい斑女。かれがせんぎは内記左衛門に申付る。白状せずんは水くらはせよ。豆蔵には酒くらはして慰まん。蔵人其旨心得よいさふれやつと皆引つれておくに入る。跡にはのがみの町人共せ、くりよつてナント名主殿。あの憎てらしいお根性から。少将様をざんげんし(四十六ウ)てほつばらい。跡から跡迄せんぎくと。こりやまあどうなる事ぞいの。ハテ天道が明らか。誠有ル少将様は。追付ヶ世に出ややつて。終には亡る右大将。物は長ふ見たがよいとそしる後へ松井の源五装束改め。しづくと立出。コリヤい。廊の者共そりや何をぬかす。吉田の家につかへ。忠臣と呼ばれし此源五さへ時に随ひ。古主のみだいい桔梗の前を親公の御手に渡し降参したれはこそ此如く。衣類大小迄改め時の間に身の出世。御恩の主人右大将殿を悪くさす

る横道<sup>わやうだう</sup>もの。赦<sup>ゆる</sup>されぬやつなれ共。今は了簡<sup>りやうかん</sup>立てかへれと叱<sup>しか</sup>られて。なむ三<sup>さん</sup>是<sup>こゝ</sup>も大<sup>おほ</sup>かんしやく。重<sup>おも</sup>てふつ、と申<sup>まう</sup>すまい虫<sup>むし</sup>をしづめて下<sup>くだ</sup>さんせとはう<sup>う</sup>くに<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>げて帰<sup>かへ</sup>りける。

しづうの様子を長持<sup>ながぢ</sup>に伺<sup>うかが</sup>ひ給<sup>たま</sup>ふよしの少将<sup>しょうしょう</sup>。たまり（四十七オ）かねて飛<sup>と</sup>で出<sup>で</sup>。源五<sup>げんご</sup>が胸<sup>むね</sup>ぐら取<sup>と</sup>つて捻<sup>ね</sup>すへ。コリヤ儕<sup>おのれ</sup>が妹<sup>いもうと</sup>の斑女<sup>はんめ</sup>に様子を聞<sup>き</sup>ケば。好<sup>こう</sup>んで松井<sup>まつい</sup>の兵衛<sup>べゐ</sup>が養子<sup>ようし</sup>と成<sup>なり</sup>り。一旦<sup>いつたん</sup>此少将<sup>このしょうしょう</sup>へ忠義<sup>ちゅうぎ</sup>と見<sup>み</sup>せ。右大将<sup>みぎだいしょう</sup>に降参<sup>かうさん</sup>し。よつく桔梗<sup>ききやう</sup>の前<sup>まえ</sup>を渡<sup>わ</sup>したなあ。割<sup>き</sup>でも飽<sup>あ</sup>たらぬ人畜<sup>じんちく</sup>めと。指添<sup>さしぞへ</sup>ぬいてさや口に。ぱつしくと打<sup>う</sup>すへく怒<sup>いか</sup>の涙<sup>なみだ</sup>にくれ給<sup>たま</sup>ふ。

ホ、御腹立<sup>ごはらだて</sup>は御尤<sup>ごよう</sup>。妹斑女<sup>いもうとはんめ</sup>がもとへ書通<sup>しよつう</sup>にて我身<sup>われみ</sup>のうへを申<sup>まう</sup>やり。それより御台所<sup>ごだいしよ</sup>の御供申<sup>ごこうまう</sup>。君<sup>きみ</sup>の御行衛<sup>ごぎやゑ</sup>を尋<sup>たず</sup>んため。東国<sup>とうこく</sup>へ趣<sup>おもむ</sup>き。しさいござつて降参<sup>かうさん</sup>と。聞<sup>き</sup>もあへずナシノ子細<sup>こさい</sup>。今迄<sup>いま</sup>此少将<sup>このしょうしょう</sup>は斑女<sup>はんめ</sup>がせわに成<sup>なり</sup>。のがみの廓<sup>くわく</sup>にかくれ居<sup>ゐ</sup>る口おしさに。あの長持<sup>ながぢ</sup>に忍<sup>しの</sup>び入<sup>い</sup>り右大将<sup>みぎだいしょう</sup>に近<sup>き</sup>よつて。一<sup>ひと</sup>たちうらみ鬱憤<sup>うつふん</sup>をはらすかくご。手始<sup>てし</sup>メに儕<sup>おのれ</sup>をと切<sup>き</sup>かけ給<sup>たま</sup>へはかいぐり。

ア、是々聊爾<sup>れうじ</sup>なされなど。あしらひかねて見<sup>み</sup>へたる所<sup>ところ</sup>へ。

是<sup>こゝ</sup>（四十七ウ）待<sup>まち</sup>て下<sup>くだ</sup>さんせと。奥<sup>おく</sup>よりかけ出<sup>で</sup>る顔<sup>かほ</sup>と顔<sup>かほ</sup>。少将<sup>しょうしょう</sup>さんお久<sup>ひさ</sup>しや。ヤア花子<sup>はなこ</sup>そちや何<sup>なん</sup>として此所<sup>このところ</sup>へ。サイナ。

わたしがきたも源五殿<sup>げんごだん</sup>の降参<sup>かうさん</sup>も深い思案<sup>しあん</sup>。桔梗<sup>ききやう</sup>の前<sup>まえ</sup>様とはわたしじや。ハテ此花子<sup>このはなこ</sup>がこつちやはいな。ヤ、とは又どふしてサア。誠<sup>まこと</sup>のみだい様はわたしが母<sup>はは</sup>の蒨町<sup>しんまち</sup>へ預<sup>あづか</sup>け。ム聞<sup>き</sup>へた。扱<sup>あ</sup>はそちを桔梗<sup>ききやう</sup>の前<sup>まえ</sup>にして入<sup>い</sup>込<sup>こ</sup>ミ。右大将<sup>みぎだいしょう</sup>があ<sup>の</sup>首<sup>くび</sup>を。シイ高<sup>たか</sup>いぐ。御疑<sup>ごぎ</sup>いはれし上<sup>うへ</sup>はいさい申<sup>まう</sup>に及<sup>およ</sup>ばず。扱<sup>あ</sup>おくにて承<sup>うけ</sup>れば。豆蔵<sup>まめぞう</sup>と申<sup>まう</sup>す幫閑<sup>はうかん</sup>は。則<sup>すなは</sup>ち是<sup>こゝ</sup>なる花子殿<sup>はなこだん</sup>の兄<sup>あに</sup>。吉田<sup>きちだ</sup>のお家の竊<sup>しか</sup>の役人<sup>やくにん</sup>。いがの平次<sup>へいじ</sup>が為<sup>ため</sup>には孫<sup>まご</sup>。竊<sup>しか</sup>の術<sup>じゆつ</sup>にて形<sup>かたち</sup>をちいさく見<sup>み</sup>せ。是<sup>こゝ</sup>へ参<sup>まゐ</sup>りしも敵<sup>てき</sup>に心<sup>こゝろ</sup>を赦<sup>ゆる</sup>させん謀<sup>はかりごと</sup>。門内<sup>かどうち</sup>よりじゆうに出<sup>で</sup>るはいが流<sup>りう</sup>の竊<sup>しか</sup>の妙術<sup>めうじゆつ</sup>。ひそかに彼<sup>かれ</sup>を召<sup>よ</sup>つられ。先々<sup>さきさき</sup>此場<sup>このば</sup>を立<sup>た</sup>のき給<sup>たま</sup>へ。アレくおくは酒宴<sup>しゆえん</sup>の最中<sup>さいちゆう</sup>。豆蔵<sup>まめぞう</sup>をはずさし



(四十八オ) てどふぞ爰へ出したいもの。人音<sup>ウ</sup>せば我君<sup>ハル</sup>は。もとの長持<sup>フシ</sup>へ忍ばせ給へといひ捨<sup>すて</sup>おくに入<sup>い</sup>ければ。

花子<sup>地中</sup>の前は少将<sup>少将</sup>の。御手<sup>御手</sup>を取<sup>と</sup>て涙<sup>なみだ</sup>ぐみ。ホニニおまへとはどうした深いゑんじややら。都九条<sup>つみあ</sup>に勤<sup>つとめ</sup>し時より。つい仮初<sup>かりそめ</sup>のお

情。身にしみぐと忘<sup>わす</sup>れられず。野上<sup>地中</sup>の廓<sup>くわく</sup>へ売渡<sup>うり</sup>され。はん女<sup>おんな</sup>さんに廻<sup>まわ</sup>り合<sup>あ</sup>ひ。勤<sup>つとめ</sup>の内にぎりが出来<sup>でき</sup>。少将<sup>少将</sup>様の事ふつ、りと。

思<sup>おも</sup>ひ切<sup>き</sup>ふといふてのけて。今お目<sup>め</sup>にかゝつたとて。何<sup>なん</sup>のせんない身<sup>み</sup>のうへと悔<sup>スエテ</sup>歎<sup>なげ</sup>ば。

イヤくそれは悪いがてん。桔梗<sup>ききやう</sup>の前<sup>まえ</sup>が代<sup>しろ</sup>りにたつたそなた。花子<sup>花子</sup>ではない此少将<sup>此少将</sup>がみだい様。ホニニそふじやとひつたりだき

つく後<sup>うしろ</sup>に斑女<sup>はんにょ</sup>。ハアひよんな所<sup>ところ</sup>へきたそふなど。いふに二人<sup>ふたり</sup>ははつと計<sup>けい</sup>。赤<sup>あか</sup>らむ顔<sup>かほ</sup>は恥<sup>はぢ</sup>紅<sup>もみぢ</sup>葉<sup>は</sup>。てもちぶさたに見<sup>み</sup>へければ。

ハアテ初心<sup>しんしん</sup>驚<sup>おどろ</sup>く事<sup>こと</sup>はないはいな。少将<sup>少将</sup>さんの事ふつ、りと思<sup>おも</sup>ひ切<sup>き</sup>ルと。ナ。いはしやんした(四十八ウ)は此斑女<sup>此斑女</sup>に当座<sup>とうざ</sup>のぬ

け句<sup>く</sup>と。わしが了簡<sup>りやうけん</sup>すりやすむじやないか。イヤもふ其様<sup>そのさま</sup>に了簡<sup>りやうけん</sup>がしでいためず共。まあ一通<sup>いっとう</sup>りを聞<sup>き</sup>いてたも。いつぞや

の騒動<sup>さうどう</sup>に不破<sup>ふは</sup>の関<sup>せき</sup>を。右大将<sup>みぎだいしやう</sup>がけらい武者<sup>ぶしや</sup>之介<sup>しのかい</sup>が固<sup>かため</sup>し故某<sup>ゆへ</sup>が一生<sup>いっしやう</sup>けんめいの場所<sup>ばしよ</sup>を。此花子<sup>このはなこ</sup>が働<sup>はたら</sup>きに<sup>やうく</sup>漸<sup>やうく</sup>のがれて。又

もやのがみの里<sup>さと</sup>に忍<sup>しの</sup>び。けふ迄<sup>けふ</sup>斑女<sup>はんにょ</sup>そなたに添<sup>そふ</sup>ていたは。是皆<sup>これみな</sup>あの花子<sup>このはなこ</sup>が影<sup>かげ</sup>と思<sup>おも</sup>ひなをして。ちやつときげんなをしやいの。

イヤなんぼどういふたとて斑女<sup>はんにょ</sup>さんの。よもや誠<sup>まこと</sup>にさしやんすまい。是からきつと改<sup>かへ</sup>めます。元来<sup>もとより</sup>わたしがか、さんは吉田<sup>きちだ</sup>の

お家の御<sup>ご</sup>けらいすじ。御台所<sup>ごだいしよ</sup>へぎりがた、ぬ。少将<sup>少将</sup>さんと縁<sup>ゆかり</sup>きれとかたい言<sup>いひ</sup>付<sup>つけ</sup>。思<sup>おも</sup>ひ切<sup>き</sup>れば母様<sup>ははさま</sup>への孝<sup>かう</sup>も立<sup>た</sup>。斑女<sup>はんにょ</sup>さんへの

ぎりもたつ。モ、せいもんくつされ今改<sup>かへ</sup>め。殿<sup>とん</sup>さんに暇<sup>いま</sup>を取<sup>と</sup>た證<sup>しやう</sup>拠<sup>こ</sup>に(四十九オ)は。詞<sup>ことば</sup>をまかはすまい。是にちが

は、古郷<sup>こきやう</sup>のと、さんか、さんを。生<sup>な</sup>きながら奈落<sup>ならく</sup>へ沈<sup>しづ</sup>める法<sup>はう</sup>も有<sup>あ</sup>れ物<sup>もの</sup>いふまい。疑<sup>ぎ</sup>いはらして下<sup>くだ</sup>さんせと涙<sup>なみだ</sup>と共に侘<sup>わ</sup>け中<sup>ちゆう</sup>は。

ア、是<sup>こ</sup>はわつけもない事<sup>こと</sup>計<sup>けい</sup>り。此斑女<sup>此斑女</sup>が御本<sup>ごほん</sup>さいといふではなし。勿<sup>もつ</sup>躰<sup>たい</sup>ないせいごん立<sup>た</sup>テ。イエくそれでも少将<sup>少将</sup>さんにつな

がつてはわたしが心がすまぬはいな。とにもかくにもうすき縁。きりにせまつてちり行ク花子が身の上を。思ひやつてと計中ノルにふししづむこそ道理なる。

切ッなる思ひに少将もや、打しはれおはせしが。はつと心を取なをし。所こそ有れよしなき事に隙どつて。事顕れなば先非

をくいてもかい有まじ。右大将が首とるか。我うたる、か互いのうんづく。遁じ物と身づくろい。かけ込給へは。ア、是

申。まあく待ッて下さんせと。斑女花子が声々に。あやうさ(四十九ウ)こはさ我れ先きに。跡をしたふて三重へおく深き。

館を遙のきのつま。白芽ふくてふ楼に。竹林亭と額を打ち。庭一色に打はへて。樹木を交ず作り竹。あだは榮てせい

くと。いくよを込めし千尋のかげ。此君と名付け愛したる王子猷が樂を。爰にうつせる酒宴の興。

たいこ禿も酌取々。お髭のちりとる蔵人が。爰でこそ御慰と。大盃を御前にすへさせ。恐れながら是にてひとつ召上ら

れ。豆蔵めに下されなば。有がたく存べしと。申上れば右大将。快げに打點き。ヤイ豆蔵。我れも数盃傾たれ共此盃で

今一こん。つづけくと丁ど受けてつ、とほし。ソレくれる呑おろふ。ハット頂戴是はく。めうが至極もない有がたい忝い

といひたいが。ちつぽけな此骸。大かた酒のはいる積が有る物。どめつそふな大(五十オ)盃。中へつかつて行水せふ

事はしらず。是でのもんでたまる物か。ホ、其たまらぬ所が我君の御なぐさみ。コリヤ蔵人が酌小言はいはせぬ迷惑。と

いふも無念口おしい。ア、ま、よやつてくりよと。引うけてぐつと一息つていびつしやり。ホウ扱ッてもこたへるは。こ

たへる所でそれ着と。用意の大蛸さし付れはばいと飛のき。コリヤどうじゃ。ゆでくの蛸坊主。こりや手にもつても戴

れず。いつそ天窓へかふかづき。まつかにゆでたる法師武者は。龍宮城にかくれもなき。木こりのりつしと申スもの。い

でく御前で一さしまはんと。扇ひらいて立たる後へ。

君のひさうの虎毛の猫。ちよいと飛付キ蛸ひつくはへて。逃るをやらじと豆蔵が。つゝいておくにかけ入れば。

有合フ人々あれく。それく（五十ウ）そちらへ隠れたにげたと騒うち。猫はお庭へかけ出て蛸を大事にかくれんと。竹のしけみに飛こむ向ふへ豆蔵が。によつこりによつと顕れ出。こりやくく。ありやくくく引つ。しやくつ。

こぶしをかため。はつしと打テば口あんごり。サアしてやつたと蛸ひつたくり。竹の枝に打かくれば。透さずかくる猫の前足

両手に取てゑいくく。捻合もみ合へいどみしが。透をうかゝい。猫はちよろりと蛸ひつくはへかけ出せば。なむ三し

おつたどうずりめ。いづく迄もと大手をひろげ追てゆく。人々どつと打笑へは。右大將眉をしはめ。ヤア蔵人。あのごとく

ばかつくす豆蔵めは。正しく伊賀流の竊の者。少将にかたんし。此親平を討ん方便と覺たり。駈出して搦とれど。座を立

おくに入れば。（五十一オ）

厚見ノ蔵人下部に下知し。さがせくとよばゝるにぞ。かけ入く打合イ切合フつばおと刃音トヤア編笠すつぽり赤い物きたち

よつぽりめ。遁すなやるなと尋さがせはちよいと乗たる石どうろ。イヤ高上りはこつちのかつて。串刺にしてこませと。左右

一度につゝ、かくる。鍵のしほくび両手に握。じつと上ればぶらくく。ぶらりとさがる下部がおもりの釣合イかね合ちが

はぬ豆蔵。造付たることく也。エ、めんどうなつくねめら。おもりに成ッた返報に。一々暇とらせんと。ひらりと飛シだる

軽わざ早わざ。手なみにたまらず下部共。むらくはつと。逃ちる所へ。

おくより少将かけ出給ひ。ヤア汝は花子が兄の豆蔵なるか。ハハ拙者が身の上はおつての事。君御忍びまします事。敵がし

らぬは是<sup>こゝろ</sup>究<sup>きやう</sup>(五十一ウ) 竟<sup>きやう</sup>。しづうは最前源五にしめし合せたり。はや御出と引立<sup>うら</sup>く裏道<sup>うらみち</sup>さして落て行<sup>く</sup>。

花子<sup>地中</sup>の前はきもわくせく。少将<sup>ウ</sup>様斑女様。此間<sup>ウ</sup>に早ふおとしたいが。どこにござると尋る所へ松井ノ源五。ノ<sup>詞</sup>花子殿。少将

様は豆蔵がお供して早立のいた。サアこなたも早ふにげたく。イエわたしよりまあ斑女様を。ハチさてこなたにみぢんけがで

も有<sup>あ</sup>つては。みだい様へ此源五が言<sup>い</sup>訳た、ぬ。とかふする間も<sup>あやうい</sup>危<sup>あやうい</sup>とせり立られ。小づま引上<sup>地</sup>ケおび引しめ足<sup>フシ</sup>もしどろに走

り行<sup>ホ、詞</sup>。先はあんど是から何とぞ妹をおとしやらんとふりかへれは。お<sup>地</sup>くより逃出る斑女をおつかかけ右大将。内記蔵人引<sup>ウ</sup>く

して出来り目通<sup>ウ</sup>りへ引<sup>色</sup>ツすへさせ。ヤア<sup>詞</sup>につくき女め。桔梗の前豆蔵を落したは皆<sup>あ</sup>儕<sup>れ</sup>がわざしやな。蔵人は両人が討<sup>う</sup>て手に向

へ。(五十二オ) 松若丸が隠<sup>かくれ</sup>家は大かた江州<sup>へん</sup>鞭崎<sup>むちざき</sup>の辺。三日のうちに名乗て出ずんは。斑女を殺すと諸方へ高札を立させ。

鞭崎<sup>やしろ</sup>の社<sup>ちき</sup>へ直に向つてせんぎせん。内記源五。けいせい斑女をひつ立来れと。下知<sup>けち</sup>に随<sup>したが</sup>ふしはり繩<sup>なわ</sup>か、るうきめに逢<sup>あ</sup>事<sup>ふ</sup>も。

夫<sup>ハル</sup>と我子を跡や先<sup>つま</sup>き思<sup>おも</sup>ひ。廻<sup>クル</sup>せば危<sup>あやう</sup>さの。胸<sup>むね</sup>もはりさく悲しみに。ひま行駒や鞭崎<sup>ウ</sup>の社<sup>ちき</sup>を。さして三重へ急ぎ行

さんけく六こん罪障<sup>さいしやう</sup>。おしめに八大金剛<sup>ハル</sup>どうじ。一に礼拜<sup>らいはい</sup>大霊<sup>だいれい</sup>ごんげん。本地<sup>ちきん</sup>は大日。ふじはせんけん。なむ婦命<sup>きめう</sup>大菩<sup>ぼ</sup>

薩<sup>さつ</sup>。さらくくといら高殊数<sup>じゆず</sup>。ちり、んちん鈴<sup>れい</sup>ふりならし。

七<sup>地ハル</sup>なんそくめつ家内繁昌<sup>はんじやう</sup>ゑんめいと信心<sup>しん</sup>心<sup>しん</sup>。けんごの富士<sup>し</sup>同行。思<sup>おも</sup>ひ近江<sup>う</sup>の山田村三郎<sup>う</sup>が庭<sup>う</sup>の一<sup>ハル</sup>木。杉<sup>ハル</sup>にしめ縄<sup>なわ</sup>高々と。

念誦<sup>ねんじゆ</sup>の声も殊勝<sup>しゆしやう</sup>也。

勤<sup>地色中</sup>おはれは先達<sup>う</sup>の次郎兵衛法印<sup>ハル</sup>。(五十二ウ) ノ<sup>詞</sup>ういづれも。ふじごんげんの御利生。有<sup>あ</sup>がたいとは思はしやれぬか。此国

のひらが嵩<sup>たけ</sup>の犬<sup>いぬ</sup>様。毎日<sup>まい</sup>富士<sup>ふじ</sup>禪定<sup>ぜんぢやう</sup>なされ。下向<sup>げ</sup>の節はいつでも。此杉の木に。暫<sup>しば</sup>くお休<sup>やす</sup>みなさる、と昔<sup>むかし</sup>からの語<sup>かた</sup>りつた

へ。それ故に此木を。羽がよい休めの杉といふ。イヤはがよい休めのついでに。休んでいらるゝ是の三郎は。此月当家でいながら。持病とやら作病とやら。起られぬが定かいの。ホンニそれよ。どんなこつちやおじや見てこふと。いふまもなんどののれんおし上ヶ立出る。

主 山田ノ三郎。コレハくもふお仕働か。けふは当国の御領主。高階の右大將殿鞭崎の社へお出。公用すじで呼にきたれ共。

姑 ばさまを代りにやり。垢離を取て勤ふと思ふ内。持病のづゝうでこまつた所を此ごとく。頭巾すゝかけを戴いたりや。さつぱりとさめまし(五十三才)た富士ごんげんの御利生で。雀目さへ直つた貴様。づゝうぐらひは手間隙入ルまい。其上におみきをやつたら猶よかる。市松早ふ。アイと立て廣庭の。杉に供しみきどくり。茶碗をそへてさし出せは。

三郎 いたゞきずつとほし。先達にさしければ。ドリヤ戴こかい。扱つてもうまし。ソレ作左へ廻しましよ。ヲット、ゝゝゝ。こぼれるく。ハテこな市まはつよい酌じや。ほんに強で思ひ出した。腹は立られな御ていしゆ。こなたも力をつよいを鼻にかけ。人を恐れぬ人かい商売。おとに聞へた悪者で有たか。此はる富士禪定しられてから。おけな物打明けたやうに。けつかう人ンになられたは。ふじごんげんのお影ぞよ。ヲット最一盃。逆の事に。徳利にもんどりうたせい。イヤ是作左。こなた計有難がつて。こちとは何を戴(五十三才)こぞい。ナント市ま。そこらにふり残してもないかい。サアみきでは足まいとか、様はやぶぎはの酒屋へ。ヤア何ンじや買にか。こりやうまいと。咽をならして待所に。表へどしくそりや登。酒じやくといふ所へ。村のあるきいきせきとかけ来り。コレく御ていしゆ。お尋の松若丸。三日が内に名乗て出ねは。母親の斑女を殺すと有ル。方々へ高札を立られ。それに付いての御せんぎに。姑を名代に出しておく山田ノ三郎。急に連れてこい

との仰付られ。鞭崎地ウの社迄ちやつちやとござれ。ホイそんなら同行衆おりや行ます。爰地ウでゆるりと遊あそしやれ。市松色よふるすせい。イヤ同と、様。とらはれのはん女様の為じやに依よておれもいきたい。何を訳わけもない。きづかいせずと内に居い。追付ケか、も戻るで有口と。いふまもある地ハル(五十四オ)きにせり立られ。鞭崎フジさして出て行。

ナント同いづれも。吉田の少将殿の。ゆかりのもの、御せんぎで。もやつく事じやないかいの。どうでも三郎は。人かいをしやつたによつて。お尋もの、事といへは召出わすする。イヤ忘れぬ先きに。掛銭かけせんのさいふ渡しておこ。けふのおみき代を引て。残つて六百五十文。此通りいふてたも。おくの戸棚とどなか。お前地ウの下へ入いれておきやと。市松ハルをおいやつて。サア誰同レもなければ。講中密ひそに。言合地ウせておく事が有ッとさ、やく声を。戻もどりか、つて女房おくま。何事ウやらんと門口かどに聞共ハルしらず。

先達地ウ講中ハルに打向色ひ。サテ富士のお山伏。降寂院がうじやくいんが。岩間寺いはまへ参るとて。けさおれが所へわせたによつて。是の三郎の身の上を咄はなしたれは。お山伏もきつい驚き。ホンニそれよ。此春裾野はるすので。降寂院に切き(五十四ウ)殺された山田ノ三郎。蘇よみがへてこち

とより先キへちやんと。戻つていた時のひつくり。今に合点ががいかぬはいの。イヤ惣いたい富士禪定して死しんだ者は。連つれより先へ戻り。三年づ、生なきながらへている。此事を同行の外カ。親兄弟かたにも。堅かたふいはぬがお山の誠まこと。三郎がしがいは。百里あなたのふしの山に有ながら。内へ戻つて三年が間まは。女房子にそふていれ共。それを過ると。風に灯ともふきけすことく。影かげも形かたちもなつかりけり。何なんとあらかはれぬ。きずいじやないかと先達ハルが。語るを立聞たてきくつまのおくま。扱あは夫ちうトは先だつてもはや此世ハルになき人かと。思おもへは有ッルにもあらればこそ。おなし思おもひを立涌たてわの。暖廉のれんのかけに市松色が。俱ともに泣共なく共。

しらぬ同行口々に。イヤッ達殿。ふして死んだ者は。お山での事は何もかも皆忘れ。もどるのに。(五十五才)裏からはいつて笠をぬがす。白の上にこしかけるげな。それで白にこしかけな。内で笠きぬ物しやといふが。何シと三郎もそふで有ったか。おかたにとふて見まいかい。アレまたあほう計。それきかして。女房子が泣出したら忽消る。一旦死だ三郎じやといふて。かんまへてこはがりやんな。此白装束は忝くも。行衣と名付て。背にふじのお山をかき。かふきた所が。すぐあなたに籠っている心。狐狸の見入レものき。瘡病でも熱病でも。いたゝかすればさめるがふしき。ヤアさめるついでにおみきも醒た。此おかたは遅こつちやの。ヲノ待遠にごさんしよと。徳利さげて内にいれは。

エ、イおくま女郎お帰リか。三郎は鞭崎から。公用すして呼にきていかれた。ドリヤ立酒に呑ふかい。エ、(五十五才)立酒とは氣にかゝる事ばかりと。いふに講中取々廻る盃に。きげん上戸の声そろへ。さんげ酒は六こん廻つた。にしめに初茸こんごりどうふ。一に大事はふしのせんさく。なむきめうな事いふな合点かがてんと。衛足打つれへ立て帰リける。

息子の市松おくより出。か、様戻らしやんしたか。此さいふは講中のかけせん。預ツて置ました。ヤア大事のものの渡しましよと。さし出せば手に取て涙くみ。ハッアせひもなや。誰レ有ふ吉田少将。藤原惟貞様の公達。松若丸様。代か代ならばたとへ金錢銀錢でも。御ン手にふれさせ給ふべきか。今我レ々が此貧ひ中で。育上ケましたれば。見るを見まねにあられもない。何シの儂な此かけせんを。大切な物じやとさもしい今のお詞。お心根が思ひやられて痛い。氏より育と(五十六才)いふたとへも。御身の上か浅ましやと。お主思ひのしんじつしん。涙は詞に先立り。

イヤなふ内義。西も東も弁へぬ時から。母斑女様の手を離れ。そなた衆の介抱で成長たる此松若。其やうに大切に思ふて

たもるに付ケ。今三郎の身の上を。同行共か咄に聞ておりやかなしい。<sup>エ 詞</sup>すりやおまへも夫トがふしのすそので。

<sup>地中</sup>サア山伏に殺さりやつた事残らす聞たハア。はつとより外詞なく。主従顔を見。合せてしばし涙にくれるが。<sup>中</sup>

<sup>詞</sup>イヤ申シ松若様。今お聞なさるゝ通りじや。必々夫トがお山で。死れた様子おつしやるなへ。若も形がきへうせては。誰<sup>地</sup>

有ッておまへを見育。<sup>そだて</sup>御代に出しませふ。わしやいつ迄も三郎殿を。此世にとめて置たいが。三年と限た身のうへ。ア、あ<sup>上</sup>

ぢきないうきよと又むせ。かへり泣いたる。

<sup>地中</sup>折ふし(五十六ウ)表に夫トが声。女房共戻つたと姑諸共立帰り。ついいおれがいけばすむ事を。いとしなげに婆様をや<sup>ッ</sup>

りまして。つゝぷりと夜に入ル迄嘸御たいくつ。イヤ氣がはつて有レば。たいくつな事はないが。松若丸を髻三郎が。かくま<sup>ひ</sup>

い置たかとのせんぎにあふて。間に合イのうそ八百もぐどくと跡や先キ。所へ髻殿が見へて。まんまと右大将を喋り。罷<sup>たばか</sup>

りかへれで事すんだ。でかさしやつたこちの人と。お熊が悦び三郎は。松若丸を座上になおし。今晚のせんぎ。いぶせ<sup>詞</sup>

も思召れんが。敵右大将。疑イがはれたればこそあれ。向に見ゆる鞭崎のちん座敷で。あのとき遊興と。聞よりおくま<sup>ゆうけい</sup>

が申シ若君様。わたしが引キ舟勤メていた時より。聞覚し斑女様の爪音。ヤアこりややくたいもない(五十七オ)事いふな。<sup>つまあと</sup>

あれは神主の召使イの女子共と。若君に歎キをかけじと。いひ紛せは母は心得。ホニ外から行ケば四五丁も間タが有ふが。<sup>ホニ</sup>

裏から裏へは程ちかふ。テモ面白い琴のしらべ。歌聞キながら若君とねさせませふ。おくま門口よふしめて。アノ髻殿とよふ<sup>アノ</sup>

しめて。深よなべしやんなと。老の戯まめやかに。松若君の御手を引一ト間にこそは入にけり。

<sup>地中</sup>サアくこちの人寝よふじやないかと押入しより。枕ふとんを取出せば、夫トは戸口に錠おろし。ヤアそなたから先キへねやと。



たばこ引よせ思案顔。コレ三日過れば斑女様のお身の大事に及ぶ。それをとやかふ苦にしかいの。ほんに何から何迄此様に。氣にかゝる事はないと。夫トのそばに寄りそふて。いふにいはいれぬ心の悲しさ。そゝろ（五十七ウ）涙にくれければ。ヤ御おくま。そちは何シで泣ぞい。さればいな。松若様かくまふている事が敵へ知したら。御幼少な若君に。年よりしやつた母様。わしや七月で次第く（に身もおもく。お前をひよつと先きだてたりや何シとせふと胸にせまつて。どうも身もよもあらぬとわつと計りに。声立て。むせび歎くぞ不便也。

エ、爰な者は未練な。一旦いひぬけた松若君。御代に立る迄はいつかなく。大切な三郎が此骸。風ひく事でもない。氣づかひしやるな。ム、そんならお前は。今から三年過キても。やつぱりいつ迄も。まめで居て下さんすかへ。ハテかはつた事に念入る。三年は愚百年でも千年でも。お主の御せんとを見届る迄は死ンではならぬ。訳もない案じすごし（五十八才）しやんなど。咄す内にも氣くたびれ。枕かたむけとろくと。

寢入ればお熊は猶涙。さつきに講中の咄を聞いて。何かに氣を付ヶ見れは見る程色も青ざめ口明いて。便りないあの寝顔。ふじの山で死ンたものは。権現様の御利生にて。お山での事を皆忘れ。内へ戻つて三年づゝは生きていると、同行衆のいはしやつたが。裾野で山伏に殺されさしやつた。我身の上をとんと忘れて。お主を御世に出す迄は。たとへ百年でも千年でも。生キながらへて居ると。なんぼ慥にいはいしやつても。こなさんの骸は。ふじのお山に死でじやはいのふ。此様子を母様の聞かしやつたら。年寄の苦にやんで其歎キはいか計り。三年過れば風に灯ふきけす様に。骸も影も残らぬ。其時の（五十八ウ）悲しさを思ひ廻せば。世の中のおちきないといふに。是に上こすあぢきない。はかない事はよも有ルまじ。富士ごんけ

んの御利生で。おなかなかや、と諸共に。此身を代りに取殺して。夫との命をいつ迄も。延はらして給はれと。叶はぬ事をかきくどき。きへ入ル計り正だとも泣沈こそ道理なれ。

あじきなき身の気もつかれ。夫との傍に寄そいて。袖をへかたしき伏居たる。

松若丸は寝所をぬけ出。おくまが歎きを聞クに付ケ。身の悲しさは弥増り。

遙に見れば鞭崎のちんのしやうじに。琴をしらぶる女の影。あれが母の斑女様か。此松若が名乗て出ねは。三日が内に殺

スと聞て。何シと見ていられふぞと。こなたの歎きにつま琴の音。色もいと哀げに。ひよく連理のかたらいなせし我つま

の。秋より先きに(五十九才) 必と。あだし詞の人心。父少将様の事を。思ひ出してあの一トふし。母様に違はない。三

郎夫妻がねやつた此間に。自身に名のつていかふか。イヤくく。爰に幸イ硯がある。母様を助けてと敵のみうちに。頼む目

当は松井源五。文認ても誰レにとゞけて貰ふぞ。そなたの空よと。詠ムればそれぞといし。人もなし。申母上。おまへ

の命助に。早ふ行きたいなのつて出たいと。いふて油断せぬ三郎夫婦。表の戸には錠おろす。ハッアどうせふな。よしや。

思へは是とても。逢は別れるなるべし。世をも人も恨ムまじ。我身のほどを思ひつゞけて只独。明しくらすぞ。かなしき。

悲しうなふて何シとせふ。どうぞ手が、り便りはないか。ヲ、思ひ付イたり。それよくとさし足。ぬきあし延上り。

かけたる(五十九才) 弓矢おつ取て、なんぼ敵に降参しても。松井ノ源五は忠臣と聞及び。頼ンでおくる此矢文。所も鞭崎

弓矢神の恵にて。母の命を助け給へと心中に祈念して。引しほり切ッて放せばねらいをたがへず。右大将のおはしますちん

ざしき。障子の内へ射込だり。

ア嬉<sup>ア</sup>しやくと。杜<sup>ハル</sup>のかたを伏<sup>中</sup>おがみ。産<sup>うみ</sup>の母上<sup>ウ</sup>父上<sup>ウ</sup>は見<sup>ハ</sup>ずしらず。十一に成<sup>ハ</sup>ルけふの今迄<sup>ハ</sup>。飯<sup>かり</sup>にもと、様か、様とて育<sup>そ</sup>てられた夫婦<sup>ハ</sup>の衆<sup>ハ</sup>に。別<sup>ハ</sup>る、のが悲<sup>ハ</sup>しひ。せめてねがほに成<sup>ハ</sup>と暇<sup>いとま</sup>乞<sup>こ</sup>と。屏風<sup>びやうぶ</sup>の内<sup>ハ</sup>をさし覗<sup>のぞ</sup>きこへも得<sup>ハ</sup>立<sup>スエテ</sup>ず歎<sup>中</sup>る、。御<sup>フシ</sup>心根<sup>い</sup>ぞ痛<sup>いた</sup>しき。

ア、いつ迄<sup>ア</sup>名残<sup>中</sup>を惜<sup>おし</sup>んだとて尽<sup>ハ</sup>せぬ別<sup>ハ</sup>れ。母<sup>ウ</sup>様の命<sup>いのち</sup>助<sup>たすけ</sup>に行<sup>ハ</sup>。跡<sup>ウ</sup>で必<sup>し</sup>叱<sup>しかつ</sup>てたもんなや。此<sup>ウ</sup>年月<sup>おん</sup>の恩<sup>おん</sup>も情<sup>わすれ</sup>も忘<sup>ハ</sup>はせぬ。是<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>生<sup>ハ</sup>の別<sup>ハ</sup>れぞと。思<sup>中</sup>へはそゝろにかなしさつらさ。夫<sup>ウ</sup>婦<sup>フ</sup>が寢<sup>ね</sup>所<sup>どころ</sup>老<sup>ろう</sup>（六十オ）母<sup>ば</sup>がふしど。かなたこなたに暇<sup>ハ</sup>乞<sup>こ</sup>。せんかた泣<sup>ハ</sup>々せんざいの。やぶ垣<sup>がき</sup>こへて脇<sup>わき</sup>道<sup>みち</sup>よりとやたけにはやる。稚<sup>ち</sup>心<sup>こころ</sup>のぼれはめきつく。垣<sup>がき</sup>の外<sup>そと</sup>面<sup>おもて</sup>に声<sup>こゑ</sup>立<sup>た</sup>て。怪<sup>あやし</sup>み吼<sup>ほ</sup>る里<sup>は</sup>の犬<sup>いぬ</sup>。こはげもなげにひらりとおり。前後<sup>ぜんご</sup>にかゝるをすりと抜<sup>は</sup>いたる小<sup>せう</sup>脇<sup>わき</sup>差<sup>さし</sup>。切<sup>き</sup>はらい打<sup>う</sup>はらい鞭<sup>むち</sup>崎<sup>さし</sup>として急<sup>いそ</sup>る、。

跡<sup>あと</sup>にはふつと目<sup>め</sup>さます三<sup>さん</sup>郎<sup>らう</sup>。犬<sup>いぬ</sup>の声<sup>こゑ</sup>に聞<sup>き</sup>身<sup>み</sup>立<sup>た</sup>て。つまを起<sup>おこ</sup>せばなんど口<sup>くち</sup>より母<sup>はは</sup>もかけ出<sup>で</sup>。コレく智<sup>ち</sup>殿<sup>でん</sup>おくまもおきや。若<sup>わ</sup>君<sup>きみ</sup>が見<sup>み</sup>へ給<sup>たま</sup>はぬ。松<sup>まつ</sup>若<sup>わ</sup>様<sup>さま</sup>がござらぬはいの。エ、と驚<sup>おどろ</sup>き夫婦<sup>ふうふ</sup>はうろく。お心<sup>こころ</sup>さとき若<sup>わ</sup>君<sup>きみ</sup>。母<sup>はは</sup>御<sup>ご</sup>の命<sup>いのち</sup>助<sup>たすけ</sup>ケンと敵<sup>てき</sup>のもとへ。なのお出<sup>で</sup>なされしかと。戸<sup>こ</sup>口<sup>ぐち</sup>を見<sup>み</sup>れば錠<sup>ぢやう</sup>は其<sup>ま</sup>儘<sup>まま</sup>。そこよ爰<sup>こゝ</sup>よと三人<sup>さんにん</sup>がとほにくれて尋<sup>たず</sup>ねる所<sup>ところ</sup>へ。

表<sup>おもて</sup>にあまたの人<sup>ひと</sup>音<sup>おと</sup>登<sup>のぼ</sup>。門<sup>かど</sup>の戸<sup>こ</sup>けわしく打<sup>たた</sup>叩<sup>たた</sup>。ヤアく（六十ウ）山<sup>やま</sup>田<sup>でん</sup>三<sup>さん</sup>郎<sup>らう</sup>。右<sup>みぎ</sup>大<sup>だい</sup>将<sup>しやう</sup>親<sup>しん</sup>平<sup>へい</sup>公<sup>こう</sup>より。お尋<sup>たず</sup>ねの松<sup>まつ</sup>若<sup>わ</sup>丸<sup>まる</sup>をかくまい置<sup>お</sup>いたるよし。矢<sup>や</sup>文<sup>ぶん</sup>をもつて自<sup>じ</sup>身<sup>しん</sup>のうつたへ。主<sup>しゅ</sup>君<sup>きみ</sup>右<sup>みぎ</sup>大<sup>だい</sup>将<sup>しやう</sup>の命<sup>いのち</sup>によつて。松<sup>まつ</sup>井<sup>い</sup>ノ源<sup>げん</sup>五<sup>ご</sup>兼<sup>けん</sup>俊<sup>しゅん</sup>むかふたりと呼<sup>よ</sup>はるにぞ。物<sup>もの</sup>に動<sup>どう</sup>ぜぬ三<sup>さん</sup>郎<sup>らう</sup>もはつと仰<sup>おほ</sup>天<sup>てん</sup>。つまと母<sup>はは</sup>心をちぎに碎<sup>くだ</sup>け門<sup>かど</sup>の戸<sup>こ</sup>めりくくとつたくと込<sup>こ</sup>ミ入<sup>い</sup>ルを。かたはし摺<sup>すり</sup>で打<sup>う</sup>付<sup>つけ</sup>なげ付<sup>つけ</sup>はり飛<sup>と</sup>す。手<sup>て</sup>なみにおそれにげちつたり。

源<sup>げん</sup>五<sup>ご</sup>さはかず四<sup>し</sup>人<sup>にん</sup>駕<sup>か</sup>かき入<sup>い</sup>れさせ。ホ、き、しに増<sup>ま</sup>る三<sup>さん</sup>郎<sup>らう</sup>のはたらき速<sup>あつは</sup>く。ヤアおさめ過<sup>か</sup>る源<sup>げん</sup>五<sup>ご</sup>。見<sup>み</sup>ぐるしき茅<sup>ぼう</sup>屋<sup>おく</sup>な

れ共我為には城擲。むたいひろぐと手は見せぬ。ハ、ハ、ハ。無体はせず。お尋の松若丸。御辺がかくまひ置たる。證擲は自筆の此矢文となげ出せば。いぶかしながらおつ取ておしひらき。何々此たび捕れまします。(六十一オ)母斑女の命チ其方の計をもつて申助け。山田三郎に渡し給はるにおいては。某直になのつて出。いかやう共行れん。此事偏に頼入候。松井ノ源五殿へ松若丸。ム、成程こりや若君の御手跡。ナント慥な證擲で有ふが。イヤサかくまいおいた。松若殿は家出なされた。ハテサテかくせばけつくお為にならぬ。若君の望に任せ。母の斑女を御辺に渡すと。駕より引出せは。ハ、ハ、ハ。お久しやなつかしの斑女様と。かけよる女房三郎引のけ。ヤ、源五知ルまいと思ふか。汝は高島の与惣といつしもの。其斑女はおなさといふて其方が妹。松若殿を擲にして。斑女を助んとは兄弟思ひの成上り侍。長居ひろぐと只一討を反を打て詰かくれは。コレのお待てと斑女はおしとめ。自(六十一ウ)おなさといひし時よりも。野上の廊でふかきなじみの夫婦の衆。兄様が悪人なれば。それと明していふはいの。心おかずと我子松若に。逢せてたべと涙にくれ。頼るは。三郎実もと猶予の所へ。

内記左衛門氏廣。くびおけ携へけらい引つれとやハ、ハ、ハ。コリヤハ、ハ、ハ。三郎。よつくお上を。其科によつて源五にいひ付。うぬがそつ首さらへおとし。此器へおさむるはたつた今。右大将の御前へ松若丸は。自身になのつて出たはやいと。聞かなしき斑女御前かつぱとふして歎るはさしもの源五。おくま親子も忙果。とかふ詞も泣計り。

三郎いかつてエ、しなしたり。もはや松若君敵の擒と成給へは。某も俱に切死氏廣かくごとつ、立ッ(六十二オ)勢ひ。見るに恠り首桶なげ出し。源五。三郎が首打テと上意有しは御辺が事。松若が手に入たれは我君はもふお帰り。ろしの

お供にかけてはならぬ。跡は貴様に任まかせおく必ふかく取とルまいぞと。おのが臆おくびやう病いひくろめ。気も魂たましいも内記左衛門フシけらい引ぐしにげかへる。

源地ハル五立色て身こ纏づひ。若君詞を隠さるゝと疑いし段ゆるしておくりやれ。夫婦の衆諸共我々兄弟い一所に。御供して立のかんと思ひし所に。松若丸敵の擒とりことなれしと聞からは。右大将か美濃へ帰国の跡をおひ。鋒きつさきのつゞかんだけ。切きつてく切きちらし。たつた今伴ともしなひ帰らん。ア、暫詞く待れよ。荒気をもつて取戻もとさは。却かへて松若君の御命危あやうし。右大将の上意に任せ。某が首くち（六十二ウ）打て敵に心を赦ゆるさせ。松若君をばいかへす所存しよぜんはなきかと。ゆうきはげしき三郎が。打ハルてかへたる一言に。源五もはつと思中ひしが。さはいへ忠臣の御辺を手にかけ何ハルンと討色れふ。イヤ忠臣でない其訳わけは。当春三月。隅田川原すみだがはらにおいて。扱よどころなき間違まちがひにて梅若丸を。手にかけてし人かいは此三郎と。なのれは源五くはつとせき上。ヤア扱詞は梅若殿を手にかけた。人かいは汝で有あつたか。それときいて我ら兄弟。しらず顔にすましては御台所へぎり立たず。梅若殿の御敵初しよ太刀を打ヒて妹と。指さし添そへぬいて投出なげし。後話ごづめは此兼俊と。励はげます兄の一言に。斑女は拔身ぬき手に持ながらむせび入り。わらはが産うんだ松若丸を。育そだてもらいし三郎夫婦に。久しぶりて廻り合あひにぎり有あル。梅若君（六十三オ）の敵じやとて。何上ンと手にか切きれふぞとかつばとふして歎なげるれは。

おくまは猶ハルもおろく涙。斑女様のお手にかける敵は爰にと。拔身色もぎ取我腹へぐつと突立詞。梅若様の御敵。人かいは山田ノ三郎思地ハルひ知ハルれと。あぐれは人々こは何ゆへと。驚かきさはぎ介抱かいはちすれは。エ、いはれざる女のさるぢへ。此三郎が種たねをやどして早七月ハルキ。殊に左さり孕ばらみ。懷胎くわいたいのなんしを。我代わしろりに殺ころし敵討うをすまし。うちわのぎりは立たつにもせよ。右大将地ウに心を赦ゆるさ

せ。松若殿をばいかへす謀はかりごとには。三郎ウが首ハルとらずんば叶かなまじ。此こばの哀かなを聞きて源五。氣きおくれして手がた、ぬか。但ただしは腹はらへつ、込こふか。眼がん前ぜんに梅若君の御敵。切腹せつぷくさせては武士が立まい。討うツか。うたぬか何なんとじやと鐔つばとくつろげ。のつびきさせ（六十三ウ）ぬ覚悟かくごのてい。源五地中も今は辞ハルするに及およばず。主君主梅若丸の敵。恨うらみの刀受かなとれと。ひらりとぬいて後うしろに廻まわるを。コレのふ待まちツてと手おいの女房が。とゝむるかいもあらかなしや。首フシはあへなく落おにける。

直地中に器うつはに取とりおさめ。ヤア詞く老母らうぼ。我妹諸共手おいをよくく介抱かいほうあれ。某かれは此首を以もて。右大将地中を欺あざむき松若君を。ばいかへさんと行をとめてノウ源五様。やうす有地中ル夫トの身の上。今地中一トめ首ウに各残おろが惜おたいたい。歎なげき顔かほへは。ラ詞、心せかる、折おかなれ共。名残地中おしいは理ことわりと。首ウ桶け明めければこはいかに。首ウにはあらで。ふじ禪定の行衣の片身。血ハルまぶれに成てあるとあきれ。はてたる計也。

お熊地中は切せつなき息いきをつぎ。ラ詞、其筈はづく。さつきに同行衆の嘯はなにきけば。此春ふじ禪定の（六十四オ）の時。降寂院がじやくゐんといふ山伏に。殺された三郎殿なれ共。ごんげんの御利生にて。一旦死だ我身の上は忘わすれて。此三郎が首討て敵を欺あざむけと。源五様にいはしやつた。其時様子を明してとむれば。忽たちち形かたちが消しえんと聞きク。所詮しよせんおなかなや、と諸共しよに。主ぬしのかはりにわたしがが死ハルンで。三年が間ハルタ成共。夫トを此世にとゝめおかんと思おもひしに。其ウかいもなき身みの成果。

是地中といふも松若様を。養育よういくするに貯たくはなれば。ひんくをお目めにかけまいと。人商人あきんどの仲間なかまへ入り。おほくの人の子を勾引かどわかし。うきめを見せたる人の恨が身に報むくひ。梅若丸様共しらず手てにかけし。主殺地中しの山田ノ三郎は此おなかな子。先立うツ夫トはむかしの本名ほんなのがみの藤太地中。主殺主しではないぞへ。かふいふもおしつけがましい事ながら。死し後ご迄の夫ト（六十四ウ）の悪

名を。どうぞ遁してしんぜたいと。思ふたとてかんじんの。松若様を右大將に。生とられたれは何を功に。少將様やみだい様へお侘申さふ。因果な夫婦が身の成行。哀れと思ひ召れよと。悲しさつらさをかぞへたて。歎く涙はほどばしる。血汐に染みて日の出の海ひさにたゝへしごとく也。

母は手おいを身にそへて。出かしやつた。夫との代りに命を捨。悪名を通れさせんと。けなげな心が嬉ふて。是見や涙もこぼれぬが。残おゝいは孫が顔。一丁目も見ずに殺すが可愛ひ。なむあみた仏とゑかうする声に哀ぞこもりける。

源五も歎きの涙をとぐめ。神妙。主君少將殿の御前は。某宜く取なさん。首はかたみの此行衣にかはれ共。しがいはいかにと引立見れば着物計。軀にあらで（六十五才）是も同しく片身の行衣。各是はと又恟。かゝるふしぎも誠有ル。夫とのちしほに染たる行衣。片身くを一ツによせ。母と源五が取々に手おいの肩に打着すれば。

斑女御前も涙ながらにうおくま。少將様の自に給はつたる此扇。形チはふじに喩しもの。夫と諸共すそのにて。一所に死ると観念しやと。ひらきし扇を逆に。見すれはいまはの目をひらき。ア、有がたき御すゝめ。扇の形チを逆に。見れは其儘ふじのお山。あのすそのに夫とのしがいは有物を。魂成共したい行んと思へはわしや嬉しいが。跡に心の引さるゝは。年よらしやつた母様の事。御見捨下さるな。皆様頼みますと。いふ声も早たへぐに。命はふじの薄煙きへて行身ぞ哀也。

人々しがいいにいだき付わつと一度に声を上。歎き沈し折こそ有俄に一天（六十五ウ）かき雲。どつと吹くる天狗風。杉のしげみにさつくさ。どろどろと動揺すれば。

人々<sup>地ハル</sup>はつと仰天<sup>うづてん</sup>し。見上る梢<sup>こずへ</sup>にすつくと立つたる異形<sup>いぎやう</sup>の姿。ときんずかけまくり手に。若君<sup>こわき</sup>を小脇<sup>こわき</sup>にかい込<sup>こ</sup>ミ。ヤア<sup>詞</sup>く松井<sup>地ハル</sup>ノ源五。松若丸をばいかへし是迄<sup>ともひ</sup>伴<sup>な</sup>来つたり。はや受<sup>う</sup>とれといふ間も嵐<sup>ハル</sup>に漂々<sup>へうくぜん</sup>然と大地<sup>チ</sup>にへおり立

渡<sup>地ハル</sup>せばはん女は我子の顔。見る嬉しさいふかしさ。夢<sup>ゆめ</sup>に夢みしごとくにて。

さしもの源五<sup>地ハル</sup>もはつと敬<sup>うやま</sup>ひ。主君<sup>詞</sup>松若丸のなんぎを救給<sup>すくひ</sup>はる。飛行<sup>フ</sup>じさいの貴僧<sup>き</sup>のふるまい。さつする所当国<sup>たけ</sup>ひらが嵩<sup>だけ</sup>

大天狗。イヤ<sup>ま</sup>く某天狗<sup>ま</sup>にあらず。先年吉田<sup>つかへ</sup>の家に仕し。いが平次成澄<sup>なりずみ</sup>といつし者。しさい有て身退<sup>みしりぞ</sup>キ。今の名は降

寂院。ふじの行場<sup>ば</sup>において。梅若殿の御敵山田<sup>やまの</sup>三郎。一旦我手<sup>わがて</sup>にかけたれ共。ごんげんの利生<sup>りせい</sup>によつて再<sup>ふたたび</sup>蘇<sup>よみがへり</sup>し事。

同行共<sup>どうぎょう</sup>にき、態<sup>わざと</sup>此所<sup>このところ</sup>にたよらず。岩間寺<sup>いわま</sup>にさんろうし。とろく<sup>ま</sup>と真眠<sup>まどむ</sup>内。三郎<sup>地ウ</sup>が霊<sup>れい</sup>（六十六才）魂来<sup>こん</sup>ッて此家<sup>このや</sup>の様子。

くはしく語<sup>ハル</sup>ルと思<sup>おも</sup>ひしが時<sup>とき</sup>の間に。夢共<sup>うつつ</sup>しらず現<sup>あら</sup>共覺<sup>さ</sup>ず敵<sup>かん</sup>の大勢。松若丸を召捕<sup>と</sup>かへる。途中<sup>とちう</sup>へほつかけはいかへしこく

うを翔<sup>か</sup>て。思<sup>ハル</sup>はずしらず爰<sup>ここ</sup>におり立し。飛行<sup>フ</sup>じさいは三郎<sup>さんらう</sup>がこんぱく。我<sup>わ</sup>ひにくに分入<sup>ぶんに</sup>ッてなすわざと覺<sup>う</sup>たり。

それ共<sup>それ</sup>しらす右大将<sup>みぎだいしやう</sup>を始<sup>は</sup>メあまたのけらい。山ぶし姿の我<sup>われ</sup>なれば。あれく<sup>ま</sup>松若<sup>まつわく</sup>を奪<sup>うば</sup>取<sup>と</sup>たは。天狗<sup>てんぐ</sup>じやくといひしこそ

幸<sup>さい</sup>イ。敵<sup>てき</sup>よりのせんぎは是迄<sup>この</sup>。急<sup>いそ</sup>て此<sup>この</sup>ばを退<sup>の</sup>れよとき、妙々<sup>う</sup>なる物語<sup>ものがたり</sup>リ。今の世迄<sup>この</sup>も松若丸。天狗にとられ給<sup>たま</sup>ひしと言<sup>い</sup>伝<sup>つた</sup>へ

は是<sup>これ</sup>也<sup>なり</sup>けり。

源五<sup>地ウ</sup>いさんでしからば貴僧<sup>おしへ</sup>の教<sup>おしへ</sup>に任せ。御供<sup>ごぐ</sup>申<sup>まう</sup>て立<sup>た</sup>のかんと。斑女<sup>あまの</sup>諸共<sup>しよ</sup>主<sup>あるじ</sup>の老母<sup>らうぼ</sup>に暇<sup>ひま</sup>乞<sup>こ</sup>ふ。又<sup>また</sup>ゑんあらばくと。互<sup>たがひ</sup>に名

残<sup>のこ</sup>を惜<sup>おし</sup>みてふ。今の別に物<sup>もの</sup>いはぬ。おくまがしがいに降寂院<sup>とらふ</sup>。弔<sup>とら</sup>ふ法<sup>のり</sup>の出<sup>で</sup>おぶね。矢橋<sup>やばせ</sup>に近<sup>つ</sup>き山田<sup>やまの</sup>の里。人商人<sup>ひとあき</sup>の古事<sup>ふること</sup>は

よ、に名高<sup>な</sup>きふじ禪定<sup>ぜんじやう</sup>。人<sup>ひと</sup>を導<sup>みちび</sup>く方便<sup>へんべん</sup>力<sup>りき</sup>教<sup>きやう</sup>の道<sup>みち</sup>。とや成<sup>なり</sup>ぬらん（六十六ウ）



#### 第四

燈下<sup>とうか</sup>に数行<sup>すかう</sup>の涙<sup>なみだ</sup>をうかへ独寝<sup>ひとりね</sup>て見る夢にさへ恋しき殿御<sup>とのご</sup>の面影<sup>おもかげ</sup>は。残<sup>ハル</sup>らでつらき桔梗<sup>中</sup>の前。忠義も深き蒔町<sup>かいてほ</sup>が介抱<sup>かいほう</sup>にて。こぞより爰<sup>こ</sup>に下女奉公<sup>げうこう</sup>おしげ小よしと変名<sup>かへな</sup>して。憂<sup>うれ</sup>を三島の本陣宿<sup>ほんちんやど</sup>。泊<sup>フシ</sup>とだへぬ其中<sup>とまり</sup>に。

名<sup>な</sup>も高階<sup>たかしな</sup>ノ右大将親平公<sup>みかひら</sup>の御寄宿<sup>みよぐ</sup>として。表座敷<sup>ウ</sup>にまんまく打<sup>ウ</sup>せ。袴<sup>はかま</sup>はななぬ亭主<sup>ていしゆ</sup>の弥六<sup>ハル</sup>。かつて口<sup>くち</sup>より立出<sup>たて</sup>。ヤイ女子共<sup>こ</sup>。

此<sup>いそが</sup>鬧<sup>い</sup>に何もかもうつちやつてもふ爰<sup>こ</sup>でのらかはくか。ヲ、旦那<sup>たんな</sup>さんのあの顔<sup>かほ</sup>はい。此中の間のしよくだいが餘<sup>あま</sup>りくらさ

にノウおしげ殿<sup>と</sup>。サアラうそくのしん切<sup>き</sup>にたつた今きた物を仰山<sup>げうさん</sup>そふに。いふたが何<sup>なん</sup>じや。惣<sup>そう</sup>たいわいらは此<sup>こ</sup>おやかたをへ

こにして。聞<sup>き</sup>ぬなく。あのおくにござる右大将様<sup>みぎだいしやう</sup>。此度<sup>このたび</sup>（六十七オ）鎮守府<sup>ちんしゆふ</sup>の將軍<sup>しやうぐん</sup>になつて奥州<sup>おくしゆ</sup>へお下り。お宿申<sup>しゆくまう</sup>スこそ

幸<sup>さい</sup>イ。小よしがおねまの伽<sup>とき</sup>をすれは。此弥六<sup>このやむく</sup>迄<sup>まで</sup>浮上<sup>うかみ</sup>る。三島女郎衆<sup>さんしやうしゆ</sup>と名代<sup>なだい</sup>の此宿<sup>このしゆく</sup>で勤<sup>しん</sup>メせぬかはりきめ細<sup>こま</sup>にこきつかふぞ。

かくごしおれとつぶやく内ころく<sup>うち</sup>とかけでるおつち。申旦<sup>しんたん</sup>那<sup>な</sup>さん。下駄屋<sup>げたや</sup>の武介<sup>ぶけい</sup>といふ人が。此文<sup>このぶん</sup>もつて見<sup>み</sup>へました

とさし出せば封<sup>ふう</sup>おし切<sup>き</sup>て。是<sup>こゝ</sup>は右大将様の御出頭<sup>しゆつとう</sup>。厚見<sup>あつみ</sup>ノ藏人様<sup>くらんと</sup>がお下宿<sup>げしゆく</sup>からくださつた一通<sup>いつう</sup>。其<sup>その</sup>お客<sup>きやく</sup>早<sup>はや</sup>ふ是<sup>こゝ</sup>へとおつ

ちを勝手<sup>かたて</sup>へおいやれば。

すれちがふてくるげたや武介<sup>ぶけい</sup>。麻<sup>あ</sup>のづきんに。袖<sup>そで</sup>なしばかり荷箱<sup>にばこ</sup>おろして小腰<sup>こし</sup>をかめ。私<sup>わたし</sup>はお江戸照降町<sup>てりかり</sup>の者<sup>もの</sup>。厚見<sup>あつみ</sup>藏

人様のお取次<sup>とりだ</sup>きをもつて。右大将様へお目見<sup>めみ</sup>へをいたす筈<sup>はず</sup>。ヨット其義<sup>そのぎ</sup>は御状<sup>ごじやう</sup>に有<sup>あ</sup>。いざ先<sup>さき</sup>あれへと。いふに武介<sup>ぶけい</sup>が荷箱<sup>にばこ</sup>おし

明<sup>あ</sup>ケふろしき包<sup>づきみ</sup>大小<sup>だいせう</sup>取出<sup>し</sup>し。ていしゆ弥六<sup>やむく</sup>に打<sup>フシ</sup>つれ（六十七ウ）かつてへ入<sup>い</sup>にけり。

跡見<sup>あとみ</sup>送<sup>しやう</sup>ッて。申桔梗<sup>しんけい</sup>の前<sup>まえ</sup>様<sup>さま</sup>。今<sup>いま</sup>の下駄<sup>げだ</sup>やは連合<sup>れんごう</sup>又右衛門<sup>えもん</sup>の近所<sup>きんじよ</sup>の者<sup>もの</sup>。後<sup>のち</sup>にそつと様子を尋<sup>たず</sup>ね事<sup>こと</sup>によつたら。お前<sup>まへ</sup>を娘花子<sup>むすめはなこ</sup>

にしてお供申て帰ります。此<sup>地ウ</sup>き手業も今しばしと。カラを付<sup>ハル</sup>れは、そなた親子の忠義<sup>しんぎ</sup>ふかき志<sup>し</sup>。いつのよにかは忘<sup>わす</sup>れぞと涙<sup>スエ</sup>にくれての給<sup>中</sup>へは。

アもつたいないそりや何おつしやる。参議<sup>さんぎ</sup>忠通<sup>ちんたう</sup>様の御息女共有ふおかたが。宿屋の下女に御身をやつし。うきかんなんの其中<sup>地中</sup>から。御行衛<sup>ごぎやうゑ</sup>しれぬ少将様を慕<sup>しほ</sup>せ給<sup>中</sup>ふ御いとほしさよと。なげ、ば俱<sup>とも</sup>に打<sup>うち</sup>しはれ。人めなき間は主従<sup>しゆじゆ</sup>が悲<sup>かな</sup>しき託<sup>たく</sup>計也。朝<sup>あした</sup>に春の季<sup>き</sup>を悦<sup>ゆ</sup>び。夕<sup>ゆふべ</sup>に秋の氣<sup>き</sup>を愁<sup>うれ</sup>ふ皆夢<sup>みなゆめ</sup>の世<sup>よ</sup>の境界<sup>きやうがい</sup>と。悟<sup>はる</sup>切<sup>きり</sup>たる柳葉居士<sup>りよくち</sup>。行<sup>ゆ</sup>くらしたる旅の僧<sup>そう</sup>一夜<sup>いちや</sup>のやどりと立寄<sup>たちよ</sup>給<sup>中</sup>へは。互<sup>う</sup>いに見合<sup>みあ</sup>す顔と顔。ヤア父上<sup>はハル</sup>かいの桔梗<sup>ききやう</sup>の前<sup>まへ</sup>か。是<sup>こ</sup>はくとかけよつて詞<sup>し</sup>に先<sup>さき</sup>だつ涙<sup>なみだ</sup>の隙<sup>ひま</sup>。

イヤそれなる女は何人ぞ。ア、いやお心おかる、者なら（六十八才）ず。私は吉田のお家の御ふだい。伊賀ノ平次が娘<sup>むすめ</sup>蒔町と申者。ム、娘桔梗の前は其方<sup>かた</sup>か介抱<sup>かいほう</sup>にて。此家に忍<sup>しの</sup>びいるよな。扱<sup>あ</sup>此度<sup>このたび</sup>右大将<sup>みぎだいしやう</sup>ちんじゆふの將軍<sup>しやうぐん</sup>に任<sup>たづ</sup>ぜられ。奥州<sup>おくしゆ</sup>へ趣<sup>おもむ</sup>くといへ共。某<sup>なん</sup>日<sup>じ</sup>比<sup>ひ</sup>こんいなる公卿<sup>こうけい</sup>を頼<sup>たの</sup>み。かれが悪事<sup>あくじ</sup>をそつもんせしに。とかく少将<sup>しやうしやう</sup>の行衛<sup>ぎやうゑ</sup>を尋<sup>たづ</sup>よとの内宣<sup>ないせん</sup>旨<sup>しめ</sup>。廻<sup>まわ</sup>りあはゞ都へ伴<sup>とも</sup>ひ。罪<sup>つみ</sup>なき趣<sup>おもむ</sup>きを申<sup>まを</sup>ひらかせん。心弱<sup>こころよわ</sup>思<sup>おも</sup>はれそと。諫<sup>ふし</sup>給<sup>たま</sup>ふ折<sup>し</sup>こそ有<sup>あ</sup>し。

右大将<sup>みぎだいしやう</sup>親平<sup>きんへい</sup>近習<sup>きんじゆ</sup>小姓<sup>せうしやう</sup>に手燭<sup>てしやく</sup>を持<sup>も</sup>せ。しづくと立出<sup>たてで</sup>。ヤア珍<sup>めづ</sup>しや入道殿<sup>にゅうだうだん</sup>。此度<sup>このたび</sup>勅命<sup>てふめい</sup>を蒙<sup>かか</sup>り給<sup>たま</sup>ひ。歌枕<sup>うたまくら</sup>の名所<sup>なごころ</sup>旧跡<sup>きうせき</sup>一覽<sup>いちらん</sup>有<sup>あ</sup>ル事御くらう千万。某も勅命<sup>てふめい</sup>によつて奥州<sup>おくしゆ</sup>へ下<sup>くだ</sup>る所出合<sup>しであひ</sup>しは幸<sup>さい</sup>イ。夜と共に名所古跡御咄<sup>ごどつ</sup>も承<sup>うけたま</sup>らん。ホ、安<sup>やす</sup>い事ながらいつになきこよいのくたびれ。しばしが間休<sup>まやす</sup>足<sup>たり</sup>せんと立給<sup>たてたま</sup>へは。それくと右大将<sup>みぎだいしやう</sup>のさしづに蒔町桔梗<sup>ききやう</sup>の前<sup>まへ</sup>。ぜんごに心おくふかく父<sup>ふ</sup>を伴<sup>とも</sup>ひ入給<sup>たま</sup>ふ。

折<sup>お</sup>ふし向<sup>むか</sup>の下宿<sup>げしゆく</sup>より急<sup>いそ</sup>ぎ（六十八ウ）来るは厚見<sup>こうみ</sup>ノ藏人<sup>ざうじん</sup>。是<sup>こ</sup>へくと右大将<sup>みぎだいしやう</sup>ひざもと近く打<sup>うち</sup>打<sup>たた</sup>き。只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>我<sup>われ</sup>おち参議<sup>さんぎ</sup>忠通<sup>ちんたう</sup>入<sup>い</sup>

道招ずして是へ来りしゆへ。何事なきていに見せ一ト間へ通しおいたが。人の噂にたがはす。勅命にかこ付少将が行衛を尋ると見へたれば。某が後日の仇。人知れず打殺すてだてはないか。ホ、それに付くつきやうの事こそ候。こそぞの春君の御かんきを蒙し高ノ武者之介。今江戸の照降町にげたやと成り。此度のおうしう下りを聞付。御かんなきの佗致んと某を頼み此家へ参る。彼しに言付殺させては。イヤく日頃に道だてかんけんする武者之介。得心せねば却て妨。イヤ密に忠通卿を討てかれに科をぬり付る仕様は様々。万事宜相計ひ申べしと呼次は。お次の間より。高ノ武者之介義隆。町人姿引かへて袴かたぎぬ大小も。りつばきらめく髪ゆいめに櫛簪。さしもゆゝしき器量こつがら。御前間近く謹で。こそぞの春不破の関所を。女に破られたる(六十九オ)おちどにより御かんな気の某。其時女めがにげさま手に残たる櫛簪。御らんのごとく頭にさすも君の命を守て。一日片時忘れざる心の戒。せんぎのすじは其夜の相図。歌を吟ぜし声をするべに浪々の内も世上の女の五音に氣を付ケ尋れ共。今日の只今迄出合す。此上は御るくはうをもつて。億兆きせんの女の五いんを承らば。やはか知れざる事候まじと恐入て言上す。親平はくゝうち點き。其非を忍びざる時ンば其功全しといへり。是迄女がせんぎ尺寸の間も怠ざる事神妙く。先々此家の女共残らず呼出し。五いん四せいをよつく聞ケよと。仰の内より小よしどのおしげおつちと呼つれく立出る。柳葉こじも娘の身の上きづかはしと。おくより出て座に付給へは。厚見ノ藏人お側小姓に燭だいしめさせ。コレく武者之介。関所を女が破し時くらがりなれば。今も同じくくらがりにしてとくと五いんを聞れよと。御(六十九ウ)前の手燭を庭になおし。掾先の手水鉢を火袋となし打きすれば。とこやみの夜とあやもなき一間に各居ながれたり。

武者之介座を立て真中におし直り。ヤア／＼三人の女共。今よむ歌をよつくきけ。ふはの関朝こへ行は霞たつ。野上のかたに驚ぞなく。サア此通り一人づゝ何成共ふしを付てうたふて見よと。いへはおづ／＼みだい所。不破の関。ア、こりや／＼小よしとやら何もこはい事はない。ふるはず共とくとうたへさ。アイ。あいとはいへど猶こは／＼。不破の関。朝こへ行は霞たつ。野上のかたに驚ぞなく。ム、いや汝ガ五いん違た／＼。関破の女でないといふ間にそつと蔵人が。鏑もとくつろげ拔足して柳葉居士を只一討と。かけよる所を武者之介心得て火袋とれば。くはつと厚見がつらまばゆく。手持ぶさたに（七十オ）もぢ／＼と下緒捻て引さがる。

コレサ、蔵人殿。見れは刀の反打チ、へ出て何めさる。イヤ是は。サア是とは。サ、去とては面目ないが。はつたりと暗成ッたて百物語を思ひ出し。怪ものが出やうかとかふ反打たは臆病風ぶつ共さたなし頼む／＼。ヲ、あの嘘はいの。此しげが透して見たが。どうしてもあの御出家様を。ヤア女其様なばか尽さず共早く歌を唱へ／＼。サア武者之介火袋かけられよと。いふに気の付く右大将。コリヤ／＼蔵人。くらく成てそさうのないやうナ。合点かと示合する主従が。巧をそれと知ながら動ず去ぬ柳葉こじ。側からはあ／＼桔梗の前油断やるせもおしげか気配。

サア／＼是から私が番。イヤ／＼其方はもふよしにせい。言五音を聞くに。関破の女のこはねとは年頃が大にちがつた。それ／＼次の女今の歌を覚えているか。いる共／＼。ハア何とやら。ハテ物覚のわるいやつ。ふはの関朝こへ行は霞たつ。（七十ウ）ヨットそれよ。ふは／＼で。朝食くへは。ゆげがたつ。ヤア置おらふ。似てもにつかぬびしやがれ声飛すさつてけつかれと。叱るすきまもうか／＼蔵人。すらりとぬいたる白刃の光りとつこいさせぬと武者之介腕先拵で動せず。何やつなれば。

主君右大将の御前へ狼籍。しさいぬかせとひしぎ付る。桔梗の前は父を後にかこひ給へは。濞町心得御出家様をねらふ曲者。きつと御せんぎなされませ。イデ火をあげんと手をかくる。火ぶたの水鉢しつかとふまへ。コリヤ女。火をあげてめんぱくさせてはこやつ計りでない。いかふなんぎなおかたが有ル。扱是程かまししいに蔵人殿はぐつ共いはずどこにいらる、コレお出やれと声かけられてわなくふるへは。

イヤこいつ何をびこつく。重て狼籍ひろがぬやう。腕さきに(七十一オ)こたへよと捻上れば。あいた、といふもいはれぬ蔵人が。なんぎをけどつて右大将。コリヤ武者之介。つみの疑しきはかくくすといふ。其儘にしてにがしてやれ。コリヤあれを聞おつたか。おじひ深き主君の御意。有がたふ思ひつ、走れと。つき飛されてがつくり蔵人。わざと表へにける。是くはたく。追行身ぶり二人まへ。独打たりもふ逃おつた残り多イとかおせる詞。にくさも憎しと武者之介火ぶたを取て。ホウ蔵人殿。どこに居めさつて。ハ、ハ、ハ、けんくは過ての棒ちぎり木と。嘲り笑へは。

右大将はつたとねめ付。ヤア武者之介。蔵人に恥辱をあたへ。柳葉居士が肩もつな。我妨と成おち入道。サア目通りで打放すか。いやといへは身が手にかくる。ア、御待と蔵人が。とむる(七十一ウ)隙に武者之介。主君の仰背ぬ證拠は御覧遊せと。飛か、つて柳葉居士を引出せは。ハ、悲しやと桔梗の前。濞町諸共取付クを弓手めてへはつしと当付ケ。居士の胸ぐら取て引よせ心もとをぐつとさす。右大将遙に見やり。ホ、でかしたく心底見へた。今こそ不興を赦しもとの主従と成べきが。勅命を蒙たる柳葉居士を害せし汝。禁庭への恐れ暫ク帰参を延引せよ。ハ、ア仰なく共彼。関破りの女めをさがし出して。再び帰参する迄は。お暇申おさらばと下駄の荷箱をやつとこな。ふりかたげたる侍イすがた似合ぬ頭にくしか

んざし。さして行衛を見送りく右大将。藏人引つれおくに入ル。

桔梗の前はがんぜんにかなしさにくさ父の仇。のがさじものと懷劍ぬいて（七十二オ）かけ込ミ給ふを濊町おしとめ。右

大将は勅命を蒙ておうしうくだりの折からなれば。手むかいするは都への憚有。差当て敵といふは武者之介私に御任せ

と。懷劍もぎ取表の方へかけ出スをヤレまで兩人早まるなど。朱に染ミて柳葉居士むつくと起させ給ふにぞ。二人は恻かけ

よつて。ヤア是濊町。父上にお怪我はない。ホシニなあ。それに又此血は。ア、騒まいく。武者之介が我をト刀刺と思ひ

の外。かれが腕をついて刀を血にそめ。右大将を欺し志をかんじ。し、たる体にもてなしたはコレ。是を汝に渡さん為と

懷中より。一箇の箱を取出し桔梗の前に給ければ。

濊町諸共ふたを取々おしひらき。エ、イ是は敵右大将を追討の御りんし。ヤア音ト高し。父は是より都へ帰る。少将の行衛を尋

て早く渡せ。ハ、はつと計にいたゞきく。物数いはで互イの心におさむるりんし。箱根にちかき三島の里別れて。こそは三

重（七十二ウ）

### 道行京花形

花の桜木世にちりはめて。代々の帝の。其言種を人に教の年代記。二人リつれたる読売の。京の花がたの染ゆかた。し

ば編笠を。桔梗の前。人目の関や濊町が深き。情に。忍ぶ身は。只一とせを。一睡の夢と三島の里にさへ。隠れへかねた

る。主従の姿。心も一やうに。男めかする。こはづくろい。往来の人に立むかひ。サアく召ませく。是は日本年代記のか

な書。お女中様お子様がた迄も。読よいのが御重宝。抑日本の始り。天地いまだ開けざる其中に。現れ給ふを。国常立の

尊と。申奉り。我朝人の。始り也。扱。人王に至つては。神武すいせい安寧いとく。孝昭孝安。(七十三才) 孝靈天王の御宇にあたつて。近江の国に。一夜に湖涌出。其土は則。駿河の国のある富士山手に取。やうに見へますと。人の氣をとる商ひ口。孝元かいくは崇神の帝十一代。すいにん天王の御時。野見の宿禰。当麻の蹶速といふ者。力を角しより。相撲といふ事。始つたり。十。二代のあまつひつき。景行天王の御子。日本武の尊と申は御身のたけ一丈。十六さいの御年。あづまぢ過て武蔵野や。我ぞこもれる若草に敵の大勢火を放つ。時に尊の御腰のたちまち。ひとり抜出て。もへくる炎かるかやの。草薙の宝剣のるせひはげしき成務ちうあひ扱。十五代は女帝。神功皇后神かぜや。天照大神宮の告によつて。新羅百濟かうらい国迄切なびけ。帰る波かぜやすくと。(七十三ウ) 正八。まんを産給ふ。是。応神の帝とかや。仁徳りちう。反正るんげう。安康ゆうりやく。此御時に。浦島太郎といひし者。龍宮城におもむくなり。清寧。けんそう仁賢の。めでたき御代に引かへて。廿六代武烈天王。御悪逆の其中に。孕女の胎をさき。梢に人を追上し。殺し給ひし悪王の在位はわづか八年にて継体。あんかん宣化きんめい此御代に。始て日本に。仏の教へひろまる也。三十一代敏達帝の御弟。用明天王と申は。玉世の姫を恋佐て。草刈さんろに玉体を。やつし給ひし。例も有。我も恋ゆへ様々に。世のうき事に。大磯や磯によせくる。波にさへ。女夫くは有る物を。夫にはいつか相の宿ふりかへり見る梅沢の。名もなつかしき梅若が。さきだつ日数たちぬれど。忘る、ひまなき子故の(七十四才)やみ。あゝ恋ひしの梅若や。よや梅若と呼こがれ涙そゞろにとつかはと。急ほどがや打過。で神奈川の。町程近しと。又編笠に。顔かくし。三十六代皇極天王のおん時。信濃の国の住人。本田小太郎善光は津の国難波堀江より。上り給ひし御仏を。我本国に安置して。善光寺を建立有り。

今の世迄も難波津にあみたが。池の常燈の。光りたへせぬ御誓。今年は都で御開帳もござんすげな。則是迄よみましたか上の巻。是から末は。下の巻に委しうしるし。封本にして上下が六文。一さつが三文サアくめせと。売手の品ナに買入の。

心もいさむ春の道。つるみ川崎六郷の渡しをこへて品川や日影は。まだき高輪の町にぞたどりへ三重着給ふ（七十四ウ）

東路に名高き江戸の町の数。八百八町の其中に下駄と雪踏の世渡りに。照降町の。両側は軒を並し見世行燈。頃日世上にいひふらす豊蔵いなるの靈験とて。夜ルもとだへぬ人くんじゆ。老若男女袖をつらねて行かよふ。

向角のげたやの武介。仕事おしやり門に出。コレせつたやの嫁女お米女郎。おやぢ殿のるすの間なつとの、じをやつたが

よいはいの。前垂がけのこしふなく。雪踏の表に艶かける押棒の手を放れる間はない。もふそろく店仕廻んせ。ハア

俄に空が。曇てきたといふ事かへと。気毒そふにせきだやの。嫁はうろく下駄屋が悦び。てんとたまらぬ天のあたへ。

雨さへふれはかいなでに雪路店は皆。あがつたりやといふ間も嵐にばらく。降くる雨に下向の男女。げたやが軒にさ

しか、り。（七十五オ）指下駄挽けた二つばかり馬。思ひくに買求め。皆く家路に立かへる。

むさしの、草のゆかりの。江戸紫。ふくめん取たるほうろく頭巾に袴はおりの着こなし迄。風流りつぱの若侍。雨の

はれまを軒つたひ。げたやが店に立よるを。申くお侍様。お召なされてござんすはお草履そふな。こんなざぶりのあげ

くには湿のあがらぬが雪踏の一徳。おかいなされて下さんせ。イヤ是々お米女郎。得手勝手な事いはしやんな。雪踏ではは

ねがあがる。こんな時にずんどよいのが草履下駄。お求なされとす、むれは。イヤ是く兩人。所の名さへ照降町。商売

論は有うち去ながら。げたもせつたも所望になし。暫く是にて待合す人有れは店先をかりたし。ラ、お安い事。さあく是へ



と。武介が店へ伴ふてお茶よ（七十五ウ）たばこと饗応所へ。

深編笠の二人連し。お米を見るより。コレく女中。今は京家のお侍イが。待ッ人有とてお出の筈と。いふ声聞てヤアおまへは。

こちの豆蔵殿のお袋様じやないか。のふお久しやと取つけば。笠を取て蒔町が。ヲ、驚キは尤。連合又右衛門殿はまめなか。

アイお前もおまめで目出たい。あなたがつれまして戻らしやんした花子様かいな。待合せて居さしやんすお侍イ様は。向イの店にと。聞に嬉しく桔梗の前も蒔町も。かけ行門口武介と見合す顔と顔。ヤアこなた衆は三島の宿の。エ、イ。こなさんは武者之介殿じやないかいな。ア是々むしやとした事いふまいぞ。さつきにから聞いていれば。又右殿の内義や娘御そふなに。

せんどはよふ隠さんした。それいな。わしが此娘の花子をみの、国へ（七十六オ）迎に行。長くゝのるすの間に。隣へ宿替してごんした。下駄屋殿共しらず。ヲ、知ラしやれぬは無理でない。扱こなた衆を待合せてござるあのお侍。さつきにから

小間言いはず思はせぶりはどうでも花子のふかまじやの。イヤ全く左様の者ではない。最前豊蔵いなりであの両人が年代記

の読売。一冊求めてみやげにせんとそれゆへに待合せた。ハアテ此けたやは酔でござんす。お隠しなされな今夜は久しぶり。雪

踏屋の親仁殿と女夫合イの咄もある。其中で花子とおまへがねられもせまい。こちの内をかしますお侍様つれまして花子殿。のれんの内へとむりに押やり。寡なれ共嗜んで枕は二ツ押入に。ふとんも有と氣を付れば。蒔町悦び。ホンニ日外三

島の宿クにての心づかひといひ。武介（七十六ウ）さんのいかいお世話。今のお侍イ様は野上の廓で花子のなじみ。ふしぎに廻り合た其上に。お前の様な結の神に出合たが娘が仕合。サアあの衆を世話やくも。有やうはるすがしてもらいたい。

コレお米女郎。おれは吉原橋迄叶はぬ用でいきまする。ヲ、そんならかみ様はまあ内へと。伴ひ帰て。見世戸棚より雪踏取

出し。ノウ武介さん。ついでに夜番の与五八の訛。此せきだを。ヲ、届けてしんぜふ。其代リにはこちの店のるすを頼ムと。  
雪踏たづさへ吉原へ橋へと急行。

外より戻る又右衛門。つかくど内に入。ノウおやぢ殿お久しや。先お達者でといはせも立。ヤア女房共。たつた今吉原

橋で。下駄屋武介に様子は聞た。娘花子が廓のなじみ。隣に寝ている侍イが名。お身は知ツ（七十七才）ているかそれき、

たい。ハア久くで内へ戻つたわしが身の上。娘が事は打やつてかはつた間。ム、しらぬといふ前置か。もふぬかすなとは

ひでも大事ない。扱身が古主高階の右大将親平公。おうしうへ御下向とて。当所入間の宿に御逗留。お尋もの、おふれも

有れば。そち達にいひ聞す事が有。爰ははし近こつちへ来れと妻とよめ。伴ひおくに入にける。

折から帰るむすこの豆蔵。古郷へはれの錦の袂引かへて。鈴羊の裘きつ、馴にしこつがらは。其たけ一尺三寸。手びら

ほど有。小編笠腰にさいたる大小迄。ちつくりくりくいが流の。竊の術ぞふしぎなる。

我家の戸口に立寄て。ほとくと打叩。誰れじやく。とおくより夫婦嫁のお米走り出。となたでござんす。ホ、そふい

ふのは女房よねじやないか。（七十七才）ヤアこちの人の声ではないか。豆蔵殿の戻らしやつたと。門の戸ひらいて。申かみ

さん。たつた今迄声がしたが。豆蔵殿は見へませぬ。ハレやれ鹿相な爰にいと。編笠取てしつくと。打通れば。

きやつといふてお米は飛のき。ためつすがめつとつくと見て。なんぼちつそふならしやつても。夫ト豆蔵殿の顔にまがいも。

あらなつかしやとすがり付くをはつしと蹴のけ。きよろつく女房。此様に形チのちいさく成た其子細。親者人に物語るを。

飛しさつて聞キおろと。刀をぬいて手をつかへ。去々年の冬より武者修行に出。東八ヶ国を経廻りし所に。母方のちい。

伊賀ノ平次成澄殿に廻り合ひ。いが流の細の術を授り。御覧のごとく身に着たる竊の装束。色赤けれ共まさかの時は人の目に（七十八オ）たず。秘密をもつて是を着すれば。大の男の此豆蔵。ちいさくほそるが細の妙術。其上に能主人を求め。年来の望の通り侍イに成つて罷歸り候。おやち様。母人。お悦びなされて下されと。言計りは有しにかはらぬ乙声にて。ませくしたる顔も姿も。小猿の居りしごとくにて。礼義たゞしく聞々たり。

父母とかふの諾なければお米がひつくり。ホンニ親御達のあつけに申しやんすもむりじやない。伊賀衆甲賀衆とて。日本に類のない竊の家筋。こんな術が有ルと常がねお袋さんの。咄には聞いたれど。豆蔵殿が餘り幼氣にならしやつたによつて。女房の身では。あられない事迄が思はれ氣づかひな。此儘でひとつに寝て。口舌などした事なら。夜着の袖（七十八ウ）からすつぽりぬけて。尋させて下さんな。是。かふならんだ所は。悉皆蜜の女夫じや迄。ホ、くくと笑イける。

父はじろく打ながめ。ヤア嫁。それに有ルは誰が刀じやエ。ほんに此刀は。たしかに豆蔵殿の抜て下におかしやる迄はちいそふ見へたが。目ふる間に常の通りの刀の長みに成たは。奇妙なこつちやといふに豆蔵。ヲ、それがいが流の竊の妙術。我主人は今御漂泊の御身。今日当所。豊蔵稲荷へ御さんけい。御迎イに参りしついで。親者人の御きげん窺に立寄て候と。語る内より母は手を打。ホンニふしぎや最前わしがいなりへ参て。お目にか、つたお侍様。ちつくりけな男が迎にくる筈じやとおつしやつたが。扱はそなたの御主人か。本社に籠てゝ有たれば。お迎イは延引しても大事有ルまい。（七十九オ）久しぶりしやお米。きてんをさかしやいの。アイく。わたしら女夫計りじやない。親仁さんとお袋さん共久しぶり。べらつて爰にいるは不慮サア。こちの人おくへいかふと刀をもつて立上れば。

きよろ／＼あたりを見廻して。久／＼て内へ戻つたれば勝手を忘れた。ちいさふなれば身もかるい。女房共だいていきやと夫婦打つれおくにいる。

又右衛門つゝ立胸ぐら取てヤイ女め。駈に見かへ夫トを皮にする不所存もの。サア。豆蔵が主の名をぬかせ／＼とどうど打付。ふみのめさんと足を上てうんとこけ。又立かゝつてかつぱとふし。起上つて。あらふしきや。どうでも儂名作な懐剣か。

但しはあらたな守りを持しに疑いなしと。飛かゝつて懷へ。つゝこむ夫トが腕先きに濳町すがつてア、是々。ヤア何ンと是でも

(七十九ウ) あらがふかと一ツの箱を引出せは。イヤそれを見せては一大事と。あせる女房をしつかとふみ付ケ。箱の内なる一通を押ひらき。読も終らずこりやこそ見たか。古主右大將殿を追討の御りんし。此。又右衛門が手に入しは。主君の仕合

我身の出世と。箱に納てエ、につくき女めと。繪旨の箱にてばつし／＼た、く後へかけ出る豆蔵。どつこいさせぬ親父殿と。御箱もぎ取おくへにぐれは又右衛門。夫婦もつゝいて入にける。

下駄屋の内には少将みだい。何事やらんと燈火吹消ひそみて。様子をうかがひ給へは。おくより出る又右衛門。りんしの御箱をいたゞき／＼一走に。いづく共なく走行。

跡より女房が追かくるを何事ぞいの濳町と。とゞめ給へは。ヤア御台様か。大事の／＼御りんしを。夫ト又右衛門に盜れまし(八十オ)たと。いふに少将御夫婦も忙て詞なき所へ。豆蔵お米走り出。今親父がうばひし箱はからつぽ。御りんしは拙者めが。ちよいとかくして是爰にと。少将殿に奉れば。ホ、豆蔵よくしたりな。先刻より桔梗の前に聞ケは。舅忠通入道殿の吹拳をもつて給はつたる此りんし。再び奪かへす事。本懐をとぐべき瑞想ぞと。謹で頂戴有し。

豆蔵<sup>地ハル</sup>重<sup>色</sup>て。君<sup>詞</sup>是へ御出有し跡にて。浅草寺へ松井ノ源五が尋来り。当国<sup>地ウ</sup>隅田村<sup>すだ</sup>に蟄居<sup>ちつきよ</sup>し。松若丸様<sup>ももたて</sup>を守立<sup>ウ</sup>。拙者<sup>ち</sup>が祖父<sup>ちいウ</sup>降寂<sup>ウ</sup>院諸共。旧恩<sup>きうおん</sup>の士<sup>し</sup>をかたらひ。敵右大将親平<sup>詞</sup>を夜討<sup>くはだて</sup>にせん企<sup>ハル</sup>。急ぎ彼ノ地<sup>地ウ</sup>へ君を御供仕れと。源五<sup>源中</sup>がさしづ吉原橋<sup>中</sup>のあたり。御迎<sup>ハル</sup>イの舟をつなぎ置候<sup>色</sup>。父又右衛門<sup>詞</sup>が見咎<sup>とがめ</sup>ては事やかまし。道<sup>地ウ</sup>をかへて舟場<sup>ふなば</sup>へ御供仕らん<sup>ハル</sup>（八十ウ）と。申上<sup>ハル</sup>れは少将<sup>はんとん</sup>殆<sup>えつ</sup>悦喜<sup>ウ</sup>有。ヲ、等閑<sup>なほざり</sup>ならぬ松井が忠節。降寂院<sup>中</sup>とはいがの平次が事よな。某はすぐさま隅田村<sup>すだ</sup>へ舟路<sup>ふなぢ</sup>を急ん。桔梗<sup>地ウ</sup>の前は豆蔵夫婦を召つれ。浅草寺<sup>ウ</sup>のゆかりのかたに忍<sup>中</sup>れよ。我供は濠町<sup>ウ</sup>計いざ脇道<sup>ウ</sup>の案内せよと。舟場<sup>中</sup>をさして急る、。

別<sup>地ハル</sup>かなしき桔梗の前。コレ<sup>中</sup>のふしばし我君と。かけ出給<sup>ウ</sup>ふを夫婦がいさめとゞむる折<sup>中</sup>から。吉原橋<sup>ウ</sup>の火の番与五八。右大将が内意を受。附人<sup>中</sup>引つれ雪踏屋<sup>ウ</sup>の。戸口<sup>ハル</sup>に立ッてうかゞふ共。内<sup>ハル</sup>にはしらず。桔梗の前<sup>中</sup>は涙<sup>中</sup>にくれ。是に付ても思ひ出<sup>ハル</sup>すは花子の事。自<sup>ウ</sup>にかはつていくせのなんぎ。自<sup>中</sup>は又花子<sup>ハル</sup>になつて世<sup>中</sup>を忍<sup>中</sup>べは。御台様<sup>長能</sup>く〜と大切<sup>ウ</sup>にしてたもらいでも大事な。豆蔵<sup>ウ</sup>は我君の跡をしたふて御供<sup>色</sup>（八十一オ）申しや。ハア<sup>詞</sup>いかにも我君の御供。母濠町<sup>中</sup>計では氣遣<sup>中</sup>に存ます。そんなら御台様<sup>ウ</sup>は此米が。浅草寺<sup>ウ</sup>へ連<sup>中</sup>まして立退<sup>のき</sup>ませふと。豆蔵夫婦。御落支度<sup>フシおちしたく</sup>取急ぐ。外<sup>地ウ</sup>には与五八ひそ〜声<sup>詞</sup>。コレ<sup>中</sup>く旁<sup>かたぐ</sup>。今聞<sup>中</sup>れし通りを。武者之介殿<sup>中</sup>へ申上<sup>中</sup>て下されい。ヲ吞<sup>のみこん</sup>込だ。武者之介<sup>中</sup>が見へる迄<sup>中</sup>必<sup>中</sup>にがすな合点<sup>中</sup>じやと。手筈<sup>地ウ</sup>をきはめて二人の足輕<sup>がる</sup>。今<sup>フシ</sup>きし道へ引かへせば。跡<sup>地ウ</sup>には与五八。門<sup>ハル</sup>の戸<sup>中</sup>こち明<sup>色</sup>つ、と入。ヤ<sup>詞</sup>豆蔵。わりや何<sup>中</sup>としてちいさく成た。ホ、おれが骸<sup>からだ</sup>のせんさくより。むたいにふん込<sup>中</sup>うぬは曲者<sup>くせ</sup>。ヲ、右大将様より御内意<sup>詞</sup>うけ。桔梗の前<sup>地ハル</sup>をせんきにきたと。御台<sup>地ハル</sup>を目がけ受<sup>うけ</sup>よれば。どつこい〜と豆蔵<sup>ウ</sup>が。足先<sup>中</sup>キ取<sup>中</sup>て打<sup>中</sup>のめしつかとふみ付<sup>ケ</sup>。ヤ<sup>詞</sup>イ与五八<sup>中</sup>（八十一ウ）からだはちいさふ成たれと力<sup>中</sup>ラはむかしにかはらぬ豆蔵。儼<sup>中</sup>しをばら<sup>中</sup>をの雪踏屋<sup>中</sup>が手なみを見せんと。ぐつとさし上溝<sup>みぞいし</sup>石<sup>中</sup>に打<sup>中</sup>付<sup>中</sup>れは。頭<sup>かうべ</sup>みち

んに石割<sup>いわ</sup>せつた。あへなきさいごぞ心地よし。

かゝる所<sup>ところ</sup>へ高<sup>たか</sup>ノ武者之介義隆<sup>よしかた</sup>。むかしにかへる侍姿<sup>うしづか</sup>。はな／＼しく頭にさしぐしかんざしは。君命<sup>くんめい</sup>忘ぬ勇者<sup>ゆうしや</sup>の励<sup>はげ</sup>み。道<sup>みち</sup>をふ

さいで大おん上<sup>おのうへ</sup>。ヤア／＼豆蔵<sup>まめくら</sup>。右大将殿の御本陣<sup>ごほんじん</sup>入間の宿にて桔梗<sup>ききやう</sup>の前の討手<sup>うけ</sup>をかふむり。武者之介が向たり。ホゝゝこり

や面白<sup>おもしろ</sup>い。右大将にもらつてきたか。かさ高な大小いふく。武士に成ても今迄の商売<sup>しやうばい</sup>がら。下駄<sup>げだ</sup>を預けたほざき事。みだ

いの在家<sup>ありか</sup>はしらぬはい。とつと、かへれと豆蔵<sup>まめくら</sup>が。にらむ目もとは山椒粒<sup>さんせうつぶ</sup>。小粒<sup>こつぶ</sup>で辛<sup>から</sup>き男也<sup>おとこ</sup>。イヤちんじても(八十二才)

のがれぬ所。いが流<sup>なが</sup>の竊<sup>しり</sup>の術<sup>じゆつ</sup>をたんれんしたる情<sup>おのれ</sup>。桔梗<sup>ききやう</sup>の前をかくまはぬとはくらく。それなる女が御台所に極た。

ひつとらへて面縛<sup>めんばく</sup>させんと。飛<sup>は</sup>でかゝるをかうくゞり。小股<sup>こまた</sup>を取てこりや／＼。からだはちいさし一握<sup>つかみ</sup>と片手にひつ

さげふり廻し。もみ合はづみいかゞはしけん豆蔵<sup>まめくら</sup>が。上帯<sup>うはおび</sup>ほどけて竊<sup>しり</sup>の装束<sup>そうそく</sup>。ぬげれば忽チ六尺ゆたか見<sup>み</sup>かはす人相<sup>じんさう</sup>。肌<sup>はだ</sup>に

は小具足<sup>こぐそく</sup>こて脚当<sup>すねあて</sup>すつくと立たる其有様<sup>ありよう</sup>。今迄<sup>いま</sup>ちいさく見<sup>み</sup>へたるは羚羊<sup>れいよう</sup>の裘<sup>かほろも</sup>竊<sup>しり</sup>の術<sup>じゆつ</sup>ぞ奇妙<sup>きみゆう</sup>なる。

女房<sup>によう</sup>お米かけよつて家の宝と竊<sup>しり</sup>の装束<sup>そうそく</sup>。かたに打かけ御台を伴ひ落<sup>お</sup>て行。

コリヤ<sup>こりや</sup>まで女とかけ出すを引すりもどせばふり放<sup>はな</sup>し。さそくをふんでかゝれは身<sup>み</sup>をかはし。くんづ(八十二ウ)転<sup>ころん</sup>づ引すへ

捻<sup>ねぢ</sup>ふせ。いづれ劣<sup>おとろ</sup>ぬ武士<sup>ぶし</sup>のさしくし。斧<sup>かき</sup>ぬけめなく。又かけ出せは豆蔵<sup>まめくら</sup>が跡<sup>あと</sup>をしたふて三重<sup>さんじゆう</sup>へ行空<sup>ぎやうくう</sup>の。

照降<sup>てりか</sup>町より吉原<sup>よしはら</sup>へかゝれは其名<sup>な</sup>よしはら橋<sup>はし</sup>。夜<sup>よ</sup>ルの往來<sup>ゆらい</sup>の非常<sup>ひじやう</sup>をいましむ。橋<sup>はし</sup>の半<sup>なか</sup>の番所<sup>ばんじよ</sup>。切ぬきの窓<sup>まど</sup>とやいはん角行燈<sup>かくあんどん</sup>。

光<sup>ひ</sup>も細<sup>ほそ</sup>くいとしん／＼と更<sup>ふく</sup>る夜に。いたはしや桔梗<sup>ききやう</sup>の前。照降<sup>てりか</sup>町をのがれ出。豆蔵<sup>まめくら</sup>がつまのお米を力<sup>ちから</sup>にて。浅草寺<sup>せんそうじ</sup>へと急

るゝ。

逢<sup>地ハル</sup>跡<sup>ハカ</sup>より女<sup>ウ</sup>の非人<sup>ヒニン</sup>。三味線<sup>ウ</sup>箆<sup>ササ</sup>手<sup>テ</sup>にもつてかけ来<sup>色</sup>り。卒爾<sup>ソツジ</sup>ながらおまへは。吉田の少将様のみだい所。桔梗の前様じやござんせぬかと。とはれてはつとお米<sup>地ハル</sup>が恠<sup>色</sup>。見<sup>詞</sup>れはこなたは。此頃こちの近所を。アイ三味線ひいて袖<sup>色</sup>乞<sup>コイ</sup>する女子<sup>オナコ</sup>でござんす。そつちに見<sup>色</sup>覚<sup>サ</sup>さんしたりや。こつちにも見<sup>色</sup>知<sup>チ</sup>ッている。おまへは雪踏屋の豆蔵殿の。お内<sup>ハル</sup>（八十三才）義<sup>ハル</sup>さんで有<sup>ハル</sup>ふがな。わ<sup>ウ</sup>たしはみの、くに。野上<sup>ウ</sup>のけいせい花子<sup>色</sup>じやはいな。ノウ久<sup>ハル</sup>しやと桔梗の前。すがり給へはお米<sup>トモ</sup>も俱<sup>ウ</sup>に。互<sup>ウ</sup>の身の上さつらさ。語<sup>中フシ</sup>りもあへず歎<sup>ウ</sup>クにぞ。

花子<sup>地ハル</sup>涙<sup>色</sup>のひまよりも。敵<sup>詞</sup>右大将のもとへ御台様の代<sup>ハル</sup>りに行<sup>地ウ</sup>しを。松井源五殿の情<sup>ハル</sup>にて漸<sup>やハル</sup>のがれ出<sup>色</sup>たれ共。父<sup>詞</sup>又右衛門殿はもと右大将の家来筋。それ故に内へもたよらず。三味線ひいて諸<sup>ハル</sup>人の情<sup>ハル</sup>に命<sup>ウ</sup>をつなぎ。こんな浅ましい姿<sup>色</sup>に成<sup>詞</sup>たれば。さつきに少将様を連<sup>つれ</sup>まして。母様が此所へお出なさんしたれど。はづかしさに見<sup>ハル</sup>ぬ顔<sup>色</sup>してい<sup>色</sup>やんした。ヲ、いかにも我<sup>つま</sup>夫<sup>ハル</sup>は濳町一人御供にて。此<sup>地ウ</sup>辺へお出の筈<sup>はず</sup>。早<sup>ハル</sup>ふあいたい合<sup>ハル</sup>せてたもと。託<sup>か</sup>給<sup>チ</sup>ふをお米<sup>色</sup>がせいして。少将様にお逢<sup>詞</sup>なされたいは尤なれ共。敵の（八十三才）けらい武者之介が見<sup>とがめ</sup>咎<sup>ハル</sup>て今宵<sup>きょうとう</sup>の騒<sup>地中</sup>動<sup>ウ</sup>。しるべ有<sup>レ</sup>れば浅草寺へ供<sup>ウ</sup>せよと。夫<sup>フ</sup>ト豆蔵殿のさしづ。何のかのと隙<sup>ウ</sup>どつて跡<sup>ハル</sup>から武者之介が。追<sup>ハル</sup>かけ来<sup>色</sup>らば何とせふと思<sup>色</sup>し召<sup>詞</sup>ス。花子様もサア一所にござんせ。イエ。そふ聞からはわたしは爰に用も有<sup>リ</sup>。ちやつと御台様つれましていかしやんせと。心<sup>地ハル</sup>をあせれば桔梗<sup>中</sup>の前<sup>ウ</sup>。涙<sup>ハル</sup>と共に暇<sup>いとま</sup>乞<sup>コイ</sup>。お米<sup>ハル</sup>諸共せんかたも。泣<sup>ウ</sup>々別<sup>ハル</sup>れ浅草の御寺<sup>ミツシ</sup>をさしておち給<sup>ハル</sup>ふ。

橋<sup>地色中</sup>の下なる苦舟<sup>とまふね</sup>には。母<sup>ハル</sup>の濳町吉田<sup>ウ</sup>ノ少将<sup>ハル</sup>。しづうを聞<sup>色</sup>てヤア。花子<sup>詞</sup>。豆蔵を待<sup>ハル</sup>合<sup>ハル</sup>せて。某此舟に有<sup>ハル</sup>共しらず。浅<sup>地ウ</sup>ましき姿と成<sup>ハル</sup>たれば。見<sup>ハル</sup>ぬ顔<sup>中フシ</sup>したるとは。不<sup>ハル</sup>便<sup>ハル</sup>のもの、心<sup>中フシ</sup>やと涙<sup>ハル</sup>に。く<sup>ハル</sup>れての給<sup>ハル</sup>へは。

花子<sup>地中</sup>も恋しさやるかたなく。殿さんと物いふたら二タ親を。奈落<sup>なうろく</sup>へ沈<sup>しづめ</sup>ふと斑女<sup>はんにょ</sup>（八十四才）さんに。誓文<sup>せいもん</sup>を立たによつて。廻り合<sup>詞</sup>ても。詞<sup>地ハル</sup>をかはす事さへならぬ。心<sup>上</sup>の内のかなしさを。推量<sup>すいりやう</sup>してたべか、様<sup>シ</sup>と。橋<sup>ウ</sup>のらんかに身を打かけ。こばす涙<sup>キン</sup>は苦舟<sup>中ラシ</sup>に雨を。ふらせるごとく也。

イヤ／＼其誓文を立いでも。そなたを誠の御台様と心へ。右大将より絵姿をもつて。詮義<sup>せんぎ</sup>きびしき身の上。殿様と一所に片時もおく事ならぬ。君<sup>地ウ</sup>もあきらめ忍せ給へと苦引<sup>中おほ</sup>覆へは。遙<sup>はるか</sup>に聞ゆる人音に花子<sup>ハル</sup>驚<sup>色</sup>き。アレ／＼か、様武者之介が御台様の討手にくるに極た。殿様<sup>地ウ</sup>を見付られて下さんすなど。其身もかしこの橋詰<sup>はしづめ</sup>に忍ぶもへくらき星<sup>ほし</sup>の影。

か、やきうつる瑠璃<sup>たいてい</sup>の櫛<sup>くし</sup>に。銀<sup>下</sup>の笄<sup>かんざし</sup>さいて高鉢<sup>色</sup>巻。こて脚当<sup>ハル</sup>に身をかため韋駄天<sup>いだてん</sup>のごとくかけ来るは。高<sup>ウ</sup>武者之（八十四ウ）介義隆<sup>よしただか</sup>。はしの半<sup>なかば</sup>へ渡<sup>色</sup>りか、つて。ヤア豆蔵<sup>豆</sup>めが某<sup>うしな</sup>を見失ふて隙<sup>ひま</sup>とるか。此橋限<sup>このはしづめ</sup>に先<sup>ハル</sup>キへはやらじと欄干<sup>らんかん</sup>に。諸<sup>ウ</sup>手をかけてゐい。やつとこち放<sup>色</sup>し。すじかいにやり渡せば。透<sup>地ウ</sup>をあらせず豆蔵<sup>豆</sup>が。おつかけて来て<sup>色</sup>コリヤどうじや。おとなげない武者之介。子供遊<sup>あそび</sup>のはつとをしたな。ヲ、此橋限<sup>このはしづめ</sup>に。仮<sup>かり</sup>に関をすへたれば。脚<sup>すね</sup>ふん込<sup>こ</sup>で。みだいの首<sup>くび</sup>うつ妨<sup>さまたげ</sup>ひろぐと。目に物見せるぞ。ハ、くくしやうこりもない。関よば、り。ふはの関でふかくを取り。右大将に勘当<sup>かんたう</sup>うけ。其ごとくさしかざしたる。櫛<sup>くし</sup>笄<sup>かんざし</sup>諸共<sup>もろども</sup>に。うぬがそつ首<sup>くび</sup>さらへてこます。イヤ安外<sup>あんぐわい</sup>なる毛<sup>け</sup>二才<sup>さい</sup>めと。こち放<sup>地ウ</sup>したるらんかんを。ぐつとさし上<sup>ウ</sup>ケ打てかゝる。どつこいさせぬと。しつかと受<sup>ウ</sup>とめ<sup>色</sup>こりや／＼と。捻<sup>ね</sup>かへせば。さしもにかためし鉄物<sup>かなもの</sup>。（八十才）鉾釘<sup>びやうてい</sup>。一度にゆるんでめり／＼。どろ／＼どつと橋板<sup>はしばん</sup>を。ふみとどろかすいどみ合<sup>地ウ</sup>イ。見るにたへかね花子<sup>ハル</sup>は三味線持<sup>さんみせんもち</sup>チながら。二人が中<sup>色</sup>へわつて入。諸方<sup>しよほう</sup>へ絵姿を廻し。せんぎ有<sup>あ</sup>ル桔梗<sup>ききやう</sup>の前<sup>まへ</sup>は自<sup>みづから</sup>。是<sup>地ウ</sup>へ名乗<sup>なをり</sup>て出るからは。武者之



介も豆蔵も。必せきやんな早まるまいといふに憫り。扱は母の噂に聞し。妹の花子成ルかと。思へどいはぬ兄の豆蔵。武者之介は懷中より絵図取出し。番所の火影にすかし見て。此絵の面体によく似たれば。扱は御台所の代りに立た。野上のけいせい花子じやな。しかも豆蔵が為には妹。ソ、それは何を證據に。イヤ先刻照降町にて。火の番与五八が訴人によつて聞いたくと。星をさゝれてはつと計り花子兄弟。舟に忍んで少将（八十五ウ）蒞町。とやせん角やと氣をあせる。化の皮を踏されさぞほいなるらんが。今改めて武者之介が。主君を欺く身代りではなし。御せんぎの絵図にあふたる花子。御台所に成すまし。色から取入り意見を申上。右大將殿を善心になしておくりやれ。さすれば吉田のお家の為にも成ると。忠義一途に思ひ込。心は等閑なかりけり。スリヤ妹を御台所にして。受取て下さるか、是く。なんぼでも右大將殿に。従ふ事はわしやいやく。いやといへは命チがないが。何とく二人がすゝむる後の番屋の内よりも。ヤアく娘。必右大將殿に従ふなど。戸を押ひらきぬつと出るは又右衛門。花子見るよりソうなつかしやと、様シかいのと。すがり歎けど見向きもせず。ヤイ豆蔵。いかに身代りな（八十六オ）ればとて。妹に不義をすゝめ。桔梗の前の名を付けて。女の道を捨てさすれば。吉田の家の名折れと成。それでもうぬが忠義がたつか。武者之介も其通り。邪の恋慕より事發たる主君の悪心。御いけん申上る根性はなくて。花子を御台所にして。お髭のちり取ル不忠もの。加藤小豊治枯隆といふ。父の名迄を下しおるか。三三十年いぜん御改易にあはれし。武者之介が父の名を。知たりし御辺は何者。ヲ、汝が親加藤小豊治とは此又右衛門が本名。エ、イと人々驚けば。又右衛門一つの箱を取出し。先刻此御りんしを奪取り。是なる番家に忍居たればこそ。思はざる親子の名乗をする。此小豊治が若氣の至り。先手右大將殿のお乳の人と（八十六ウ）忍び契りしに。武者之介

汝を身に持ち。不義の科露見し。我しは高階家たかねけを御ついほうに合しか共。其節右大將殿はやう／＼三才。余人の乳を召上られねば。母諸共に武者之介はお家に残しおかれ。某は他家の奉公迄おかまひにて。牢々の其内又候や。吉田の御ふだい伊賀ノ平次の娘。瀧町に馴なじみ。連して都を立のき。照降町の雪踏屋と成つて。設しは豆蔵と此花子。縁はふしぎや。兄も妹も。少將殿に仕て忠義を励む折から。げたや武介こそ。高階家の浪人。本名武者之介とき、しより。扱は都に残し置たるせがれ。とは知りながら。今互いの御主人敵みかたと成り給へは。親子兄弟の名乗りもならぬ。照降町の下駄と雪踏の。商売迄が敵どし。せめて御りんしを武者之（八十七才）介に渡し。忠義を立させんと存の外。披見れば箱は明きから。かゝる巧も全く我悪心にあらず。兄息子に忠義を立させ。綸旨を盗まれたる女房や豆蔵が。身の申訳まつかう計ふは見よと。諸肌ぬげば腹かき切て布にて巻たる必死の深手。娘は悲しく取付ば。あはてる豆蔵武者之介。舟には瀧町氣も狂乱。早まつた事して下さつたと。むせび歎けば少將も。涙やるせはなかりけり。

エ、残念や親人共しらず。一年餘り同じ所に住ながら。不孝にくらしたる此武者之介に。忠義を立させんと父の御恩の有がたや。イヤ／＼兄者人より不孝ものは此豆蔵。御りんしをはいかへしたる上は御切腹には及ぶまいもの。思ひ詰た事なされた。と。さしにも（八十七才）たけき者共が前後深くに見へければ。

ヤア兄も弟も未練な諄。右大將殿へも少將殿へもか、はらず。父が腹切り相果るは。そち達兄弟に。忠義を立させん。為なるぞや。

最前より様子を聞々に。不便なるは娘花子が身の上。八ッの年から都九条の廓へいて。美濃の野上迄売渡され。親の為に君

傾城のうきくらう。漸やどくとのがれても。父を敵うのけらいすじと疑ひ。親の内へとはたよらず。照降町の近辺をへちまひしを。稚わさな顔成りと見知しるならば。非人乞食こつきを何なんのさそふ。かく浅ましき姿に成なつても。右大将殿になびかぬ心のけなげ。なんぼうそちが心中立ても。少将殿にそふ事はならぬじやないか。思ひ切て潔いさぎよく。みだい所の御身代りに相たて。父が手にかけ首打と。其身み(八十八才)も手おいのよろめき立て。ずはとぬいてふり上あれは待まちて下くださんせ。ヤア待つてとは未練みれんな。イ、エみれんじやないはいな。死ぬる今は暇乞ひまぎに。殿さんに逢あいたいはいな。逢あせてたべと計はかりにて。なげ、は父も。ふり上あし拔身ぬきみも。心も乱ゆき。

橋はしの上には兄と兄。互たがひに涙嗜なみめば。舟には母と少将の忍しのび歎なげぞ道理なる。

ヤア妹。少将殿が此近辺に忍しのんでおはするにもせよ。是へ出て暇乞ひまぎしめさるを。きよろりと見ていては。右大将殿へ某が忠義が立たぬ。今生こんじやうの名残と思ふて此三味線で。心こころのたけの一トふしをと。氣きを付られて涙にくれし顔かほふり上あケ。こぞの春野上の廓くわくを出しより。様子有あつて少将さんに詞ことをかはす。事ことさへならぬわたしが身の上。いかなる前世ひんの報はひかと。撥はと三味線取と(八十八ウ)手もふるひ。くるふ調子てうしを引ひしめて。稀まれにあひ見て。飛とたつ計はかり。どうかかふか。一心しんのたけを。いはふ。

くと。思おもふていたに。ホンニ御台様の代りにたち。少将さんといふ夫は有あれ共。そふ事ならぬ此花子と。此三絃がおなじ事。皮かわは有あれ共渡わられず。こまは有あれ共のられもせず。糸は有あれ共縁の切れ目は。どうも縫ぬ合あひされぬ事ことかい。結むすの神に。見捨みられたか。訳わけもなや。今は命もたへなばたへね。合点なと又立上たつて拔身ぬきみひつさげ。後うしろへ廻まれは武者之介ぶしをかけ。ヤア親父様。妹を殺す事存もよらず。先刻せんこくより一トふしに心を付て聞きくに。ふはの関朝こへ行いけはといふ。古歌こを相あいづに我けらいを

嗟なげり。関を破やぶりし女の五音に疑うたがひなし。扱とは花子汝なで有あるか。ア、いかにも関破くわんぱりの科人しやうじんは自みづから。比興ひきようみれんに隠かくしはせぬ。

サア兄あさん（八十九才）首切くて。お前の身の言こと訳わけにして下くださんせと。みぢん臆おくせぬかくこのてい。

ホ、いさぎよき白状はくじやうなれ共。望のぞみに任せ首打くてさし上あては。関破くわんぱりの女をといふ證しやうこ拠こがない。不便ふべんながら繩なわかけ御前ごぜんへひくと。

刀うの下緒さげひつしごげば。ノウ情はるなや右大将殿うでだいしやうだんの。館やうたを漸やうやくとぬけ出しに。又またもや連つれ行い。二度ふたのうきめを見みせんより。今爰いまで殺ころして給たまはれ。兄のおじひと計けいにてかつはとあして泣なきさけぶ。

いか成所存なりか父又右衛門にじりよつて花子が肩先かたきずつはと切きれば。うんとものつけに反さかかへる。橋はしの上下四人しやうげが仰天ぎやうてん。ヤア

騒さわまい。娘がせつなる心底しんぞこをかんじ。此ごとく手てを負おせれば。絵姿えすがたに合あたとて枕まくらかはそふとはの給たまふまじ。右大将殿うでだいしやうだんの

御前ごぜんへひかれ。我われこそ不破ふの関破くわんぱりと。いさぎよく白状はくじやうして。兄武者之介あやまりが誤あやまりを申まをひらき。此手このてで（八十九才）すぐ死しるならば。御台所ごだいしよのせんぎも是迄このへ。さはいへふびんや非人ひじん乞食こじきに迄成なりり下くだり。身みの果はは親おやの手に。かゝる因果いんぐわも有あル物ものか

と。いたはる其身みもいた手のくつう。

母はははたへかね声こゑを上あげ。一ひと度どみだい様さまの代しろりに立た。敵てきのもとへとらはれし。其時そのときのかなしさの余あまり上を今又泣なかするかと。く

どき立たれば。花子はなこは漸やうやくくるしき息いきをつぎさほの。三味さんまいを力ちからに立た上あり。初はつめて逢あつた二人ふたりの兄あさん。かゝ様さまに別わかれるはかなしけれど。と、様さまと俱ともにめいどへいて。かうくつくそふと思おもへは嬉しい去いながら。いとしかはひと言こといはした。好すい

た殿御とんだんごに引別ひきわかれ。思おもはぬ方かたへ死しに行いく。心こゝろの内うちを。思おもひやつて下くださんせと。歎なげくはづみに三味線さんまいせんを。おとせば舟ふねには母ははと少すこ将しょう。今は形見かたみと取とり上あげ中て中ぞ深ふかく見みへければ。

又右衛門よはる心を取なおいし。コリヤ兄も弟もよつく聞ケ。父が名残に一首の歌を残しおく。思ひきや。下駄やせきだや（九十オ）子に持テば。照かし降よ親の心をと。詠も終ず巻たる腹おび切ほどき。刀おし当首。かき切たる此親父が。さいごもよしや吉原橋を今の世に。親父橋とて名に高き謂はかくとしられたり。

角てはあらしと豆蔵つゝ立。ヤアく母人。拙者は父のしがいを葬り。跡よりおつ付キ奉らんと。心を付れば武者之介。関破りの女が手にいる上からは。櫛簪も是限り。妹が形見母人へと。舟へ投入レ手おいを伴ひ立上る。

陸と舟との別路や。橋の上より豆蔵が。空しき父の。首を諸手にさし上て。見すればわつと泣く声に。夜明ケ鳥の声そへて。野寺のかねのひゞき迄哀れ数すそふ無常の道人間。ういの此世には悦び有。かなしみある。照降町の職敵キ。一首の歌に兄弟の子供を。恵む親父橋かゝる。例をむさしの、世の。諺に伝へける（九十ウ）

## 第五

釣の糸細して餌かうばしければ。よく魚を得るといへり。故は近江の漁夫成しが。今は吉田の家の忠臣松井ノ源五兼俊。主君少将殿の御在所相しれ。御迎いの為メ隅田川の。渡シ場ちかくす、みくる。

向より数多の行人引ぐして。先きに立ツたる山伏姿。ヤア貴僧は一本杉の降寂院。イヤ源五殿。兼て書通にて申合せしごとく。右大將が入間の旅宿へ今宵の夜討チ。ふじはぐろの行人をかたらひ貴殿のもとへ趣く所。コレハく今日はいかなる吉日。主君少将殿はへ御出の折から。隣の御加勢はふじごんげん。吉田一家を憐給ふと有がたし。ホ、少将殿へ降寂院が御目見へも。途中にては敵への聞へ有。すぐに隅田村の貴宅へ趣き。夜討のかけ引万事は後刻と手筈を極め。悦びのほら吹立く

(九十一才) 別行。

水の面<sup>おもて</sup>に朝餌<sup>あそ</sup>にあさる都鳥<sup>つ</sup>。ぱつと立たる羽音に。驚<sup>おどろ</sup>き何事<sup>なに</sup>やらんと。見<sup>み</sup>やれは小舟<sup>こふね</sup>に。棹<sup>さほ</sup>さす女<sup>を</sup>ノウそれ成は我君<sup>わがきみ</sup>を。松井源五殿<sup>まついげんごてん</sup>ではないか。ヤア蒔町殿<sup>まきちやうてん</sup>かとかけよつて。苦<sup>くる</sup>おしのけいざ先<sup>はる</sup>是へと源五<sup>げんご</sup>が悦<sup>よろこ</sup>び。蒔町諸共<sup>まきちやうしよども</sup>吉田少将<sup>きちだせうしやう</sup>。舟よりあがらせ給<sup>たま</sup>ひければ。

御台所<sup>ごだいしよ</sup>をお米<sup>こめ</sup>が伴<sup>とも</sup>ひかけ来り。ソウ我君<sup>わがきみ</sup>様か。我夫<sup>わが</sup>マかいな。敵<sup>てき</sup>よりのせんぎきびしく。浅草寺<sup>あさくさじ</sup>に有<sup>あ</sup>ルにもあられず。源五<sup>げんご</sup>のかたへと心ざし是迄<sup>ここ</sup>参り侍ふと。御夫婦<sup>ごふうふ</sup>互<sup>ひ</sup>イにすがり尽せぬ。悦<sup>よろこ</sup>び涙<sup>なみだ</sup>の折こそ有<sup>あ</sup>し。

斑女<sup>はんにょ</sup>御前<sup>ごまへ</sup>を肩<sup>かた</sup>にかけ。息<sup>いき</sup>を切<sup>き</sup>ッて豆蔵<sup>まめくら</sup>馳<sup>は</sup>付<sup>け</sup>。あれなる川辺<sup>かわべ</sup>にて斑女<sup>はんにょ</sup>様。身<sup>み</sup>を投<sup>な</sup>んとしたまひし所へ参り合せ。是<sup>こゝ</sup>へ御供仕<sup>ごくし</sup>ると。申上<sup>まへ</sup>れはヤアいかに斑女<sup>はんにょ</sup>。先達<sup>ただち</sup>て松若丸<sup>まつわが</sup>に廻<sup>まわ</sup>り合しと聞<sup>き</sup>つるに。命<sup>いのち</sup>を捨<sup>す</sup>んとはいかなる所存<sup>しよぜん</sup>と尋<sup>たず</sup>給<sup>たま</sup>へは。わつと計<sup>はかり</sup>りに泣<sup>な</sup>出しさればいな。けさ源五殿<sup>げんごてん</sup>のるすの間に。是<sup>こゝ</sup>様な書置<sup>かき置き</sup>残<sup>のこ</sup>して。(九十一ウ) 松若丸<sup>まつわが</sup>の家出<sup>いっで</sup>しやつたれば。とうも君<sup>きみ</sup>に。申<sup>まを</sup>訳<sup>わけ</sup>が立ぬによつて我身<sup>わがみ</sup>のかくごと。語<sup>かた</sup>りもあへず歎<sup>なげ</sup>るれば。

松井<sup>まつい</sup>は一通<sup>いっとう</sup>おしひらき。何々<sup>なに</sup>。わらはが家出<sup>いっで</sup>は兼<sup>かみ</sup>てより出家<sup>しゆけ</sup>の願<sup>ねが</sup>ひ。兄梅若殿<sup>あにうめわがてん</sup>の御為<sup>ごため</sup>にと。読<sup>よみ</sup>もあへぬにヤア兄<sup>あに</sup>の為<sup>ため</sup>に出家<sup>しゆけ</sup>とは。もしもや梅若<sup>うめわが</sup>空しく成<sup>な</sup>しか氣遣<sup>きやり</sup>し。いかにくと有<sup>あ</sup>ければ。

イヤ其儀<sup>そのぎ</sup>はと。源五兄弟<sup>げんごあにぎみ</sup>つい打明<sup>うちあき</sup>て得<sup>え</sup>もいはぬ。心<sup>こゝろ</sup>をさつし桔梗<sup>ききやう</sup>の前取<sup>まへとり</sup>繕<sup>つくろ</sup>ひ。行衛<sup>ぎやうゑ</sup>のしれぬ梅若<sup>うめわが</sup>を。死<sup>し</sup>た様<sup>よう</sup>に氣<sup>き</sup>にかゝる事<sup>こと</sup>計<sup>はかり</sup>との給<sup>たま</sup>へば。源五心<sup>げんごこゝろ</sup>へア、いかにもく。松若君<sup>まつわがきみ</sup>の御出家<sup>ごしゆけ</sup>はふつとした出来<sup>いっそ</sup>心<sup>こゝろ</sup>。日外<sup>にちがひ</sup>より此隅田<sup>このすみだ</sup>の川向<sup>かわむかひ</sup>イに。始<sup>はじ</sup>つたる大<sup>おほ</sup>念仏<sup>ねんぶつ</sup>。去年三月<sup>こぞうしがつ</sup>。人かいの手に懸<sup>か</sup>り。死<sup>し</sup>たる人のしるしに立し柳<sup>やなぎ</sup>のさし木<sup>き</sup>。一年も立<sup>た</sup>やた、ずに。アレく御らん候<sup>ごらんこう</sup>へあのご

とく。生延し枝にたいこと鉦鼓をかけ置キ。ゆき、の人の手向の念仏。かねてより帰依あれば。大かたあれにござなされんと申せは少将。ヲ、しからば我レは松若を（九十二オ）尋行ん。かゝる墓所へは恐レ有と守袋を取出し。此内にこめ置たるは柳葉こじより給はつたる。右大将ついたうの御りんし也と。みだい所に渡さるれば。涙と共に受取て自らも松若を尋がてら。あの塚へも詣たし。一所につれて給れと。梅若の御墓所をしたはせ給ふ心根を。思ひやりて誰しも忍涙にかきくるゝ。然ル所へおかざき金五。大息ついでかけ来り。ヤア源五。君の迎イに此所へ来られし跡へ。敵右大将より大せいを以て逆寄にすだ村へおしよせ。降寂院が手せい一味の諸士も。防かねて危しく。夜討の催しろけんの上は。一ト先君は何方へも御忍と言捨て引かへせば。

豆蔵つゝ立。拙者めはかのちへかけ付けいで一防キと。すだ村さしてかけ出す。

源五はつと心付キ。イヤのふ豆蔵がつまと母は。此辺にて見知り有ル人々。御供召れてはけつく君のお為にならぬ。いづくへ成共早のかれよと。いふにお米は濞町伴ひ。一まづ其場を立かへる。

少将御夫婦斑女諸共御舟に（九十二ウ）召るれば。

川の面にむれゐる鷗。ながるゝ経木をひつくはへ飛かふはづみに。ひらくくく舟へおとせば。

少将取上て。ヤア此経木に俗名吉田梅若丸。ぼだいの為と書記せしはこはいかに。はつと計に顔色かはり。

ハ、くく。我子の梅若。古郷をしたふて都鳥と。成しか可愛や。我レは白ラさぎ孔雀か鶴か。つるくてん。てんとたらぬ親の心の歎キを紛らす。此三味線と舟底より取出し。是は先だつ花子が形見。経木は梅若。恋し床しと両手に持て。

物狂しく成給ふ。

情なやお心が乱れしかと。源五がきもせい。みだい斑女もせいしかねておはする所へ。右大將が郎等内記左衛門。たゞ一人かけ来り。ヤア見付た。吉田ノ少將けらいの源五。うぬが手下タの奴原にすだ村にて切立られ。思はず爰へ来しはけがの高名。少將が首取て手柄にすると切てかゝれは。さしつたりと渡り合。手練の源五に切立られて内記左衛門。叶ぬ赦せと一走に。ほかけてにぐれはいづく迄もとおふて行。おいてはげしく帆なしに舟は。流れ渡りに向の。きしへと三重（九十三才）

## 物ぐるひ男すみだ川

実や人の親の。心はやみにあらね共。子に迷てや。狂らん。うはの空なる。川風に。ア、サテ。柳の枝は。招くか笑ふか。ハ、ハ、ハ。我思ひ子と。我恋人の此世を。早く先立しを。聞てくるふがおかしいと笑ふぞ。憎や。情しらずの人心。人商人の手にかけてまだき蒼の梅若を。殺されしとは。誠か本ンか。無常の風にちり。ちつてはかなき花子が形見の此三味線。いとしくと。いひかはしたる。夫婦親子の四鳥の別。是なれや、ハ、ハ、ハ不便やな。と。か。恋しとしたいつらんにかはいや床し。なつかしの。いざ事とはん。都鳥我。思ふ人は有やなしやとよれば。おそればら。ばつと。波をけたて。月は隅田の川水に。うつれる影を。狂する。（九十三ウ）ハ、恨はつきじ思ふ敵の大將こそ。ひくなさもし、のがさじやらじかへせ。戻せと。飛たつ鳥をおい廻り。ハ、狂い乱しておはします。御跡したふて桔梗の前。斑女諸共走り寄。ノウ正だいなやお心をしづめてたべと。袖や袂にすがり。歎くを。ふりはなし。ハ、物にくるふが悲しひとや。花子が事を。思ひくれば狂がむりか。恋とぎりとの。ふたへ帯。むすふ契りもついた事じやないはいの。わしに詞をかはさじと。



文字が。読ぬとナ。ふみさへ戻す。そなた。花子じやないかいの。かはいらしく。文字が読メぬとナ。文さへ戻す。そなた。  
花子じやないかいの。かはいらしく。情なや誰し有ふ吉田ノ少将惟貞卿迎は。君の御覚めでたく。世に  
も人にも用られ給ひしお身の。うつ、なやとせいすれば。ア、それよ。過し。廓（九十四才）の犬寄に外八もんじの道中姿  
めつきで殺す。しよていになづむ糸よりほそき。こしをしむればじつ。たんと猶いとし。いとしにやきり、んのふきり、ん  
く限りなふいとし我子の。けふの忌日をうら盆と。手向のかゝい踊れく。そゝろ調子にひく三味線の。いと涙に一  
踊り。むさんなる子の亡跡は。アレあの柳のこのもと、。しろし召れぬ痛しや。枝にたいこと鉦鼓かけしはいづくの人の。  
手向章いざ我レ々も念仏申てゑかうをせんと。太鼓取々立ならべは。ホ、出来たくと少将も鉦鼓おつ取。ねぶつの拍子は三  
人一致に。一色二香むひ中尊は金持チ大尽。観音せいしの幫閑。死だ花子を憐ミ給へ。九品の浄土は九軒のあげや。七日  
くのもん日ひがらをどこへ出る事ぞ。葬頭河の鴛子の。うばにせがまれて。かはいや（九十四ウ）たんとくらうするで  
ある。浄婆城の曙に朝込ミ姿でしやなく。東門口に出迎フて。ゑかし我レを待わびん。めいどもしやばも。皆濡  
の世と。悟れはつみも。なかりけり。光明遍照。十方せかいの色と情のたいこと鉦声もしどろになむあみた仏。それ。みだ  
の誓は一さい衆生を心隔ず救が本願ふうふの中も。心隔ず心の外の恋路はしがち。とかく勤メの其内は。実といふのも  
皆浮気。うはきといふも逢とぐれは皆。しんじつに成た所が即心成仏。ほれるは順縁。そゝるは逆縁。順逆別なく。退  
も逢のも法心法性。おきてはゆつうの念仏かんくからり。たいこはと、とん頓證ばだい。瀬々の波音ト我子の声かと  
川の上ミ下モあなたこなたと走くて。つかく塚のまねく柳にしたひ寄り。梅若床し花子恋しと声泣キからし。鉦鼓を

枕に伏給ふはいたはし。くも又哀也。(九十五オ)

地色中 涙の隙よりみだい所。けさ自らに渡し給ひし御りんし。是こそはよき御守りと。斑女諸共立よつて。額にあつれば少将むつくと起させ給ひ忽本氣人心地。ノウ嬉しやとくよりも。此御りんしを戴せます心も付ず。けさよりも梅若花子を恋し床しと。物ぐるはしき御身よりそばに付キそふ我々が。悲しさを推量あれと語りもあへず。歎く二人を少将せいして。是偏に十善天子の御守と。謹でおしいたゞき。夜に入まで隅田村へ向イし源五豆蔵。兩人がしらせなきはうしんくと夕間暮柳の陰より申父上母上と。稚こはねに三人ははつと驚き。梅若が父母恋しと思ひの余り。ふた、び此途へ形子を躰し出たるかと。すがり付く歎給へは

ア詞 是申。私は幽霊ではござりませぬ。ヤアそれでも物いひかつかう。梅若丸に生キうつしと。夜かけにすかし(九十五ウ)みだい所。斑女御前は手を打て。エ詞 是が尋る我子の松若じやはいなあと。いふに御夫婦二度びつくり。兄のぼだいに出家を望み松若丸。白装束は聞へしが何としてさつきにから。それと名乗て出やらなんだと。尋給へは松若君。けさ程より此川上で。経木千枚に水たむけ。たつた今此所へ帰りました。ヤア然らは今朝此少将が手に入し。梅若ぼだいと記たる。経木は松若そちが手跡で有たか。此ごとく親子を一所に。引合するも亡梅若が導と。皆々御墓に打向ひ涙ながらに御あかう有か、る所へ高ノ武者之介大息ついで駆来り。扱も降寂院松井源五か謀にて。昼の間は打負たる体にもてなし続が原迄おびき出し。伏勢を以て前後よりおし包。主人右大将一族の大ぜい。時の間に敗北いたし候と言上すれば。

阿詞 ヤア心へぬ武者之介が注進。此少将を討とらん計略なるか。アツア全ク左様の事にあら(九十六オ)ず。三島の宿において。

御しうと柳葉こじを助け奉りし事は。みだい所よつく御存じ此所に一字を建立し梅若殿の御ばだいを。弔はん心底はかくの  
通りと。指添ぬいて地髻ふつ、と切払ひ。何とそ是にて御疑ハルイをはらされ。悪人ながらも主君親平の命を御助け下されかし  
と。いふ間程なく凱歌かちときつくつて降寂院。右大将を高手にいましめ。引立来れば源五豆蔵ハル両人は。蔵人内記に繩をかけ追立  
く。金五ハルを始メ一味の諸士残ず御前に詰かけたり。

少将地甚御悦喜有。武者之介が望に任せん。急ぎ親平が髻地払ふべし。それくと有ければ。源五豆蔵承り。蔵人内記  
が首ちうに打おとす。忽ハルちほつきの右大将心のに色こり隅田川。梅若丸は彼岸かのきにしろしはびこる柳のみどり。松若丸の齡久  
敷ハルおんあひいもせ。忠臣の道も豊ゆたかに都入。よろづ吉田のはんゑい斑女が簀の年千秋。楽とぞ祝しゆくしける（九十六ウ）

右俳優曲調者以通俗為要

故隨物聞字正字俗字各為

用捨而文句明也且予自加

墨譜誠為正本云余

豊竹越前少掾（印）

正本屋

大坂心齋橋本四町目西側 九左衛門

（裏見返）